風のコラージュ

梅本周平（うめもとしゅうへい）

内容紹介

東京と神奈川の県境付近に位置する瀬野駅の程近く、川沿いの木々に囲まれひっそりと建つ都立けやき坂高等学校。学業はそこそこの進学校だが部活動の成績は芳しくないこの学校において、吹奏楽部も他の部活動同様、成績は芳しくない。

一・二年生だけで構成される吹奏楽部には、一九九五年の今年、どこまでもマイペースな伊野、元不良の中本、やる気のなさではナンバーワンの山上、ひたすら恋に走る上条の四人の男子生徒に加え、顧問の田口も上級生も認める天性の才能を持つ宮内、校則を破ってアルバイトに励む小島、二年生よりもはるかに腕のある光田、孤高のサクソフォニスト戸崎、将来を嘱望された兄を持つがその兄とは似ても似つかない平井など、個性豊かな面々が入部した。

彼らを擁する吹奏楽部は夏の吹奏楽コンクール地区予選の練習に励んでいたが、結果は金・銀・銅の三種類ある賞の中で銅賞。しかもほとんど最下位での銅賞であった。しかし創部以来万年銅賞の吹奏楽部にあってさほどショックな出来事でもなかった。

吹奏楽への燃えるような熱意もなく、いきなり全国大会に出てしまうような夢のサクセスストーリーもない、平々凡々で地味な部活である。

そんな平凡な日々の中でも、数々の小さな事件を経て、彼らは徐々に変わっていく。コンクールが終わった後の秋には文化祭、地区音楽会と、順調に活動を進めていく吹奏楽部だったが、地区音楽会が終わった後、ついに一年生と二年生の衝突が始まってしまう。

中本の一声でなんとか決裂を回避した吹奏楽部だったが、部内ナンバーワンの腕前になっていた宮内がその後衝撃の事実を知り脱退してしまう。大きな痛手を被った吹奏楽部だが、一年間の集大成、定期演奏会へ向けて一丸となって動き出す。

しかし定期演奏会の準備が進むに連れて増えてくる不思議なＯＢ達の訪問、そしてこれまで部活を引っ張ってきた顧問兼指揮者、田口の突然の転任。果たして吹奏楽部は今年一年を無事に乗り切り、定期演奏会を迎えることができるのか―

たいしたドラマもないように見える平凡な毎日の中で、彼らの人生はドラマに溢れ、そして互いに交錯していく。去り行く者にも残る者にも、また恋に破れた者にも、最後の日に残されたのは未来への希望。また新しい、愛すべき平凡な一年が始まる。

けやき坂高等学校吹奏楽部　一九九五年

東京と神奈川の県境。小高い山の上に位置するその駅の周辺は、二つの都県を縦横に走る鉄道が交差する交通の要所として、また都内有数の商業地として毎日多くの人で賑わっている。駅前には大規模な商業施設が乱立しているが、その合間を縫うように昔からの小さな個人商店も点在しており、訪れる人の数と相まって混沌とした熱気に溢れている。

しかし騒々しいのは駅前から歩いて十五分ほどの圏内だけで、そこから先は緑に囲まれた閑静な住宅地が広がる。一時はベッドタウンとしても高い人気を誇った街である。

駅から街道沿いに南西へ進むと昭和の匂いを感じさせる不動産屋や建設会社が並び、ビルや商店もまばらになってくる。外装も剥げ落ちて久しい建設会社の事務所がある交差点を南へ曲がると、急な下り坂が延々と続く。坂は西へ東へ進路を変えながらも南へ向かい、やがて谷底を流れるゆるやかな川に突き当たる。

さらに川沿いにカーブを描きながら平地を南へ向かうと、西にまた小さな丘が見え、その丘の上に小さな駅「瀬野」がある。こちらは簡素な駅ビルとスーパーマーケット、パチンコ店などのほかはこじんまりとした商店が駅前に少しある程で、周囲には古いマンションと民家しかない。

その駅から南へ丘を越えて川の方へ向かって一〇分ほど歩くと、川沿いに多くの木々に囲まれひっそりと建つ校舎が見える。静かな環境と、都立高校としては市内三番手の進学校という手ごろ感が保護者にも人気の「東京都立けやき坂高等学校」の校舎である。校門を一歩入ると、学校のシンボルでもある大きな欅の木が1本そびえたっている。

今年で創立十八年目のけやき坂高等学校は人気の割にこれといって特徴がないことでも有名で、進学率は悪くないがトップクラスの有名大学への進学は少なく、クラブ活動においても未だ運動部・文化部ともに優秀な成績を修めたことはない。それでも万年地区予選敗退の野球部員は毎日白球を追いかけるし、厄介者扱いの吹奏楽部も毎日音符を追いかけるのである。

閑静ではあるが夏休みの時期ともなると大量のセミの鳴き声が騒音となるこの校舎で、耳を澄ますと四階の教室から気の抜けたトランペットの音が聴こえてくる。

「ちょっと山上君、ちゃんと吹いてよ」
「はあ」
「もっと、ガツーンと」
「いやあ…」

夏のコンクールも差し迫った八月五日、けやき坂高校吹奏楽部の夏休み練習である。

高校野球に甲子園があるように、吹奏楽の世界にも全国から多数のバンドが参加し夏から秋にかけて開催される「全日本吹奏楽コンクール」がある。東京の場合は地区予選の後の東京都大会で東京都代表に選ばれると、杉並区にある「普門館（ふもんかん）」というホールで開催される「全国大会」へ出場することができる。人数の少ない「B部門」「C部門」と呼ばれる全国大会のない部門もあるが、けやき坂高校は十七年前の創部以来ずっと人数の多い「A部門」で出場してきている。高校から吹奏楽を始める「初心者」が多いこともあり、B部門・C部門の存在を知る部員は少ない。今年もまた新入部員十八人のうち実に半数が「初心者」である。

そんなけやき坂高校吹奏楽部は今年も夏の地区予選へ向けての強化合宿を二日前に終え、今日から学校での練習が再開されたばかりだった。

「これから合奏あるんだからさ、そんなんじゃダメだよ。山上君、合宿のときはもっといい音出たじゃん」

「はあ」

一年八組の教室は、トランペット・パートの練習部屋となっている。今日は全員が出席しており五人が顔を揃えている。その教室で今年の部長兼パート・リーダーの二年生、前田智子（まえだともこ）に槍玉にあげられている山上剛（やまがみつよし）は新入生の一人だ。

四月に行われる定期演奏会で新三年生は引退という伝統のため、年度始めに新三年生が引退した後は、新二年生が部を仕切ることになる。またそのため夏のコンクールを含め全ての年間行事は二年生と一年生の二学年だけが参加する。

今年のコンクールには二年生二十一人に新入部員十八人を合わせた三十九人で臨むことになった。コンクールに際して部員の選抜は行わず、初心者も含めて全員で参加するというのもこの部活の伝統である。コンクールでは十一年前に一度だけ地区予選で銀賞を受賞したが、その年以外はこれまですべて銅賞、しかも限りなく最下位に近い成績の部活であった。

「あーもう、これじゃまた銅賞じゃん」

「はは…」

山上剛は中学校の時からトランペットを始め、その中学時代には部長を務めていたという噂もあるが、そのけだるそうな雰囲気からはとても想像がつかないといった具合の男子である。元来やる気があるのかないのか判然としない山上であるが、合宿の疲れからか今日はいつにも増してボオッとしている。

「もうちょっとさあ、反応とかしてよ…まいいやもう一回やろう」
「はい…」

トランペット・パートの練習はこうして今日も基礎練習を一通りこなすだけで精一杯で、智子の思いも虚しくただ時間だけが流れ、合奏が始まる時刻になってしまっていた。

合奏が始まる一〇分ほど前になると、各教室に散らばっていたパートが音楽室に集まってくる。打楽器パートが大音量で思い思いに楽器を打ち鳴らす中、各パートは急いで楽器のチューニングをするのだが、人数の多いクラリネット・パートは決まって時間が足らなくなりチューニングもおざなりである。

吹奏楽部の顧問であり指揮者も務める田口浩之（たぐちひろゆき）はたいてい合奏開始の五分前には音楽室に来て指揮台に登り、指揮者用の背の高い椅子に腰掛け、履いているジャージの模様をぼんやりと目で追いかけたり毛玉の数をかぞえたりしながら、時間が来るのを待つ。

合奏開始時刻になり田口がパンパンと手を打つと、部長の前田智子の号令で起立・礼を行う。

「よろしくおねがいします」
「はいよろしく」

長身の田口が低くぼんやりとした声で答えると、「着席」の合図を待たずして座りだす者もおりガヤガヤと着席が始まる。田口はそれには構わず指揮棒を右手に持ち、

「じゃあ、全員で一度チューニングしようか。B♭（ベー）いくよ、イチ、ニイ、サン、シ」

田口が長い手を使い柔らかく振り下ろした次の一拍目で不協和音が鳴り響く。こうして、けやき坂高校吹奏楽部の合奏は始まるのである。

伊野拓也（いのたくや）

高校入学時に新しく買い換えた自転車に乗り、民家の合間の急な坂道を一瞬で降って、今度は木々に囲まれた細道のゆるやかな坂を一〇分間かけて登る。

体力的にはかなりしんどい道筋だが、川沿いを進む正規ルートを行くよりはこちらのほうが早く学校へ着ける。川沿いを進んで途中で他の生徒に会うのも気まずい。良く知らない生徒の集団に巻き込まれたときなんて最悪だ。それは夏休みであっても変わらない。

学校に着いたら、ゆっくりと音楽室へ向かう。階段を四階まで登ってすぐ目の前にある音楽室へ入ろうとした時、右側の廊下から先輩が声をかけてきた。

「あ、伊野君おはよう」
「あ、おはようございます」
声をかけてきたのはトロンボーンの二年生で一年生男子のアイドル、緒川小百合（おがわさゆり）だ。このあいだの合宿があって、ようやく部活にも慣れてきた。まだろくに会話をしたこともない先輩も多いが、緒川とは比較的、会話は多いほうである。
扉を開け音楽室に入るとすでに大勢の部員が集まっていた。壁にかかっている時計を見ると、十二時二十五分。集合時間の五分前だった。
室内はすでに冷房が効いていて、ひんやりとして心地よい。五分後、部長の前田智子が指揮台の上に立って練習前の点呼が始まった。

「伊野君、来てるー？」
「うぃす」
同じテューバ・パートの先輩、広田裕子（ひろたゆうこ）に呼ばれていつもどおり短く答えた。
合宿が明けて初の練習ということで特に一年生部員は顔が浮かない者ばかりだが、点呼を取ってみると意外なことにほぼ全員が出席していた。点呼のあと今日の練習予定を確認し、各自部室へ楽器を取りに行く。部室は二階の奥にある。テューバ・パートにとっては楽器を二階から四階まで持って上がるのがとにかく重いし面倒くさい。

今日は十二時三十分からはパート練習、十五時からは合奏。テューバ・パートはユーフォニアム・パートと合同で一年四組の教室を使っての練習だが、両パート合わせても三人しかいない。テューバ・パートは二年生の広田裕子と一年生の伊野拓也だけである。
またユーフォニアム・パートには二年生がおらず、今年入った一年生の小野田由里（おのだゆり）が、未経験者ながらユーフォニアム担当になった。頼まれたら断れない性格のようだから、なかば押し付けられたようなものだろう、と拓也は思っている。

そういう拓也も、元々はパーカッション・パート志望だった。正確に言えば、ただドラムが叩きたくて吹奏楽部の見学に来ただけである。「練習すればドラムも叩けるようになる」との誘い文句だったので、ドラムを教えてもらって、叩けるようになったら部活を辞めてロック・バンドをやるつもりでいた。
ところがパーカッション・パートは一日目、平たい台のような物に向かって全員でバチを打つ練習がひたすら続いた。あまりのつまらなさに、拓也はその日の練習が終わる頃には先輩に「部活辞めたいんですけど」と切り出していた。打楽器の先輩と揉めているところに、広田がフラリと寄ってきて「辞める前に一度テューバに」とテューバ・パートに引き抜いたわけである。
その足ですぐに部室に向かい、一昨年に購入したばかりだというピカピカの楽器を吹い

たら、すぐに音が出た。パーカッション・パートでの意味不明な練習と違いすぐに音が出るのが楽しく、また広田と一緒にテューバへのコンバートを進めた緒川小百合の麗しさもあり、しばらくテューバで続けてみることにした。そのままずるずるとなんとなく部活を続けていたが、同学年の友達も増え、いつの間にか辞めるつもりはなくなっていた。

楽器を持って四階の教室へと入った後は、テューバ＆ユーフォニアム・パートも他のパート同様、練習開始直後にはパート全員で一緒に基礎練習をやり、その後個人練習へと移っていくのだが、人数が少ないパートということもあり、全員揃っての基礎練習はサッサと切り上げて個人練習の時間を多く取る。気になる点があればその都度個人練習の時間にアドバイスをする、というのが今年テューバ・パートとユーフォニアム・パートのパート・リーダーを兼任する広田裕子の方針だった。

楽器を始めてまだ二ヶ月に満たない六月初旬の頃にはすでに三年生やＯＢから「テクニックはないけど音は良い」と評価されていた拓也は、高い音こそまったく出ないものの、中低音の音色はすでに広田に迫るものがあり、楽譜にある大抵の音は指番号さえ書いておけば吹けるようになっていたので、広田からも指導めいたものはもうほとんどされなくなっていた。

ただ、指導をされなくなっても拓也には不安はなかった。少々恰幅が良く男気あふれる広田が同じ教室にいるというだけで安心感を覚える。何か上手くいっていない点があれば必ず広田がアドバイスしてくれると信じていたのである。

ところが実際は、広田自身が楽器のことをよくわからずやっているので、細かいことはどう教えていいのかわからず知らん振りを決め込んでいるというだけであり、拓也の成長もここに来てやや停滞気味である。困ったときには「気合」と「練習量」でカバーする、というのが広田の取り組み方だったし、まだそれでも伸びる余地のある時期でもあった。

それにしても、他のパートにいる一年生の大変そうな姿と黒々とした譜面を見るにつけ、テューバは楽譜も簡単でラクだ、と拓也は思う。

特に二年生がいないにも関わらず一年生が五人も入り、一年生だけで何とかやりくりしているサックス・パートに至っては目も当てられない惨状で、アルト・サックスの西堀（にしぼり）友香（ともか）とテナー・サックスの村田麻紀（むらたまき）という中学校から楽器を始めていた二人の経験者が、初心者の上条英雄（かみじょうひでお）と小島美紀（こじまみき）を指導するという状態であったが、四人とも揃いも揃って練習が追いつかず四苦八苦していた。

一年生同士のためなかなか言われたとおりに吹こうとしなかったり練習そのものを嫌がる小島美紀の態度が大きいのが混乱の主な要因だが、それについては誰にもどうしようもない状態であった。もう一人の経験者でバリトン・サックスの戸崎聡子（とざきさとこ）は一人黙々と練習

に励み、寡黙なうえにどこか上から冷めた目で全体を見やっているような性格で、これもまたパート内では変り種である。

そんなサックス・パートで初心者ながらメキメキと上達し、かえって自分の負担を増やしてしまった上条や、「だりい…」と毎日ため息ばかりついているトランペットの山上を見ていると、やはりテューバ・パートは楽園のように思えるのである。

ただ、コンクールの曲は正直、つまらない。なんでもコンクールというものは課題曲と自由曲という二曲を演奏しなくてはいけないそうだが、拓也としてはけやき坂高校が課題曲に選んだ「アップル・マーチ」などはもう吹きたくないぐらいだ。

譜面は一見単調なのに、皆が影で「ゲルマン」と名づけて呼んでいる顧問の田口からあれやこれやと注文が入り、またその注文の意味もほとんどよくわからないからである。

合宿での何時間にも及ぶ合奏などは、もはや苦行でしかなかった。どこがアップルか、という怒りにも似た思いのあまりに一時は林檎を食べなくなったぐらいのものである。合宿中の楽しみといえば、男子で集まって遊ぶトランプとＵＮＯやどの先輩が一番可愛いかという白熱した議論だけだった。

一方の自由曲にしても、バーンズという外国人の「イーグル・クレスト」という曲だが、冒頭においしい出番もあるものの、その後はなんだか面白くないし吹いていて非常に疲れる曲で、他のパートはどうやら難しいようで譜面どおりに吹けていないし、この曲を作った人は鬼か何かじゃないかと思う。これまたゲルマン田口からは色々と細かく注文が入るが、正直何がなにやらよくわからない。

全部の音符の下に指番号を書き込み、田口からの注文も目立つように大きく書き込んだ譜面は、もう文字や記号だらけで混沌の極みに達していた。

そんな曲の練習をしていると、

「伊野君、いくよ」

と広田に声をかけられた。すでに小野田も荷物をまとめて移動の準備を終えている。

あわてて楽器と楽譜、譜面台などを持ち、二人と一緒に音楽室へ向かい、そこで合奏前のチューニングをした。

拓也はここのところチューニングはほぼ一発で決まる。この日も一回目でチューナーの針は真ん中を指していた。それに比べてクラリネット・パートは今日も時間ギリギリまで延々とチューニングが続いていた。もっと早くからチューニングを始めればいいのに、といつも思う。

やがていつの間にか指揮台の上の椅子に腰掛けていた田口がパンパンと手を叩いて立ち上がり、前田智子の「起立」の号令で全員が起立した。テューバを足の上に横たえていた拓也は楽器を抱えたまま中腰で立ち、軽く礼をして、「着席」の合図が出る前に誰よりも

先に椅子に戻った。

「じゃあ、全員で一度チューニングしようか。B♭いくよ、イチ、ニイ、サン、シ」

ゲルマンはいつも同じジャージだけど、いつ洗濯してるんだろう。そんなことがふと頭をよぎって、出遅れた。トランペットからプファ、という音が聴こえサックスから船の汽笛のような音が聴こえチューニングが終わっていないクラリネットから様々な音程が聴こえる中、拓也は二拍目から音を出した。四拍目に入る前に、田口が指揮棒を激しく左右に振り、音を止めた。

「合宿前に戻っちゃったな」

そういって指揮棒で頭を掻く田口の背後の壁には、部員手作りのカウントダウン・カレンダーが貼られている。

「コンクールまであと4日」

本当にあと四日でコンクールの本番の日を迎えるのか、拓也には実感がない。指揮台の上で音を聴く田口もまた別の意味で実感が沸かないでいたが、その心を拓也が知る由もない。

拓也が「ううん」と唸る田口をよそにあくびをしながらふと最後列のトランペット・パートのほうに視線を移すと、見えざる睡魔の襲撃を受け今にもトランペットを手から落としてしまいそうなほどに身体がくねった山上の姿が目に飛び込んできた。拓也には、彼が四日後のコンクール本番へ向け誰よりも他人事の絶頂にいることは間違いないと感じられたが、それを非難できるほどのやる気は拓也にもなかった。

東京都吹奏楽コンクール地区予選

一九九五年八月十一日。ここ数日でも最も暑い日となったこの日、けやき坂高校吹奏楽部が参加する東京都吹奏楽コンクール地区予選の一日目が行われた。東京都は参加する高校の数が非常に多いため、各地区に分け四日間にかけて予選が開催される。けやき坂高校が属する第7地区は予選の初日の今日、早くも本番を迎えたわけである。会場は東京の練馬区にある練馬区立練馬文化センターの大ホール、出番は午前中である。

けやき坂高校吹奏楽部は朝、学校に集合してから皆で電車に乗り文化センターのある練馬駅へと向かった。顧問の田口は別行動で生徒よりも早く会場に着いていたが、部員がホールに着いたのは午前一〇時を少し回った頃であった。

前日の十日、練習を午前中で切り上げた吹奏楽部は、午後になるとOBや三年生に手伝ってもらい楽器をトラックに積んだ。そのトラックはOBの須崎修（すざきおさむ）の運転で、今日、ホー

ル裏手の搬入口へ到着する。
須崎は現在二十八歳。十一年前にコンクール地区予選で銀賞を取った代の吹奏楽部で部長を務めた男で、今でも何かと吹奏楽部のサポートを続けているが、口を開けばすぐに「俺が現役のときは…」と説教を始めるので、現役部員からは嫌われている。

ホールに着いた部員たちはホール正面で待っていた田口と合流し、それぞれ田口から出演者であることを示す安全ピン付きの小さなリボンを受け取った。二年生の見よう見まねで一年生もそのリボンをシャツの肩に付ける。その後トラックを迎えるために搬入口へ向かったが、すでにトラックは到着しており、ホール脇の路上に停車していた。部員たちが駆け寄るとヒマを持て余していた須崎は一言二言愚痴をこぼしながらも、トラックを動かし搬入口へ付けた。
コンクールを運営する東京都高等学校吹奏楽連盟の腕章を付けたスタッフに促されるままに楽器をトラックから下ろし、ホール舞台袖へとつながる下手裏の広いスペースで打楽器を組み立てる。
管楽器パートの部員は打楽器の組み立てが終了次第、各自の楽器を持って、「都立けやき坂高等学校」と書かれたプレートを持ったスタッフに先導され、ホール内のロビーに用意された待機場所へ向かい、各々の楽器の組み立てを始めた。
楽器の組み立ては出来てもロビーでは音を出すことが禁止されている。ルールを知らない一年生のうち、サックスの小島美紀が「プッ」と音を出し、クラリネット・パートの二年生渡辺素子（わたなべもとこ）に注意される。しばらくするとまた先導のスタッフに促され、リハーサル室へと向かう。
コンクールの本番は、本番前に自由に音を出せるのがこのリハーサル室内のみである。与えられた時間は十五分。まさに一発本番に近い。
ひととおりチューニングを終わらせ、いつものように全員で一度Bｂの音を出したところで、連盟スタッフから催促が入り、リハーサル室を出なくてはならない時刻になった。あの合宿明け初日の不協和音は聴こえなかったものの、ちゃんとウォームアップ出来たかどうか田口には少々心許ない。
「まあ、楽しもう」
とリハーサル室を出る前に田口は部員たちに一言声をかけた。

リハーサル室を出ると、けやき坂高校の二つ前の団体、都立瀬野川（せのがわ）高校の演奏が始まった。けやき坂高等学校と同じく丘の上の小さな駅「瀬野」を最寄りとするライバル校だ。
「やばい、うまいね」とテナー・サックスの一年生村田麻紀が誰にともなく呟く。
「ヘタだべ」と応えたのはホルンの一年生中本淳（なかもとあつし）である。
「ヘタではないでしょ」

「あっ今のとこミスったっしょ」
「別にミスったって関係ないよ」
「んなことねえだろ、俺ならミスってねえぞ」
「アンタろくに音出てないじゃん」
「ちょっとアンタ達、うるさい」
激化する応酬をたしなめたのは部長の前田智子である。

瀬野川高校は市内で四番目の偏差値の学校であるが、閑静で手ごろな環境はけやき坂高校とさほど変わらず、人気の高い都立高校のひとつである。進学校と呼ぶには微妙なラインではあるがどちらかといえば進学校で、部活動の成績にしてもけやき坂高校と非常に似通っており、学業はともかく部活動においてはどの部活もライバル関係にあった。

ただ吹奏楽部に関して言えば、全国的な知名度で言えば無名という点で変わらないものの、決定的に違うのはけやき坂高校が地区予選万年銅賞なのに対し、瀬野川高校は限りなく銅賞に近いものの万年銀賞という点である。地区予選を抜けられない、ほぼ近い成績という点ではどんぐりの背比べだが、けやき坂高校吹奏楽部よりも三年創部が早いだけの創部年数の近さなども手伝って、両校の吹奏楽部は常にライバルとしての意識があった。

そんなライバル校の演奏が終わると、次の高校の演奏へと移り、けやき坂高校も舞台袖へと進む。ここで打楽器パートと合流し、次はいよいよけやき坂高校の出番である。合流した打楽器パートに管楽器パートにしたのと同じように「楽しもう」と田口が声をかけた。

ステージへ出て素早く楽器のセッティングをし、指揮台の横に立った田口が客席を向き直立すると、陰アナウンスが入った。
「プログラム七番、都立けやき坂高等学校。課題曲Ⅳに続きまして、自由曲、バーンズ作曲、イーグル・クレスト。指揮は田口浩之です」
あまり期待のこもった拍手ではないが一応の拍手をもらい、田口が一礼をし指揮台に登る。田口はもう一度声を出さずに「楽しもう」と言い、指揮棒を構えた。しかし田口がこだわるように再び発した「楽しもう」は、緊張が頂点に達していた部員たちには全く届かなかった。

そうして始まった演奏は、普段の練習から見れば可も無く不可も無くの出来であったが、一般的には「ヘタクソ」の一言で済ませられてしまいそうな演奏なのであった。

演奏が終わって楽器を片付け、朝とは逆にトラックに楽器を積む。演奏面ではともかくこういった場面では一年生男子の出番である。次々と楽器をトラックに積む間にも須崎が

何か嫌な感じで話しかけてきたがまともに聞くと「ムカツク」ので皆で聞き流す。その後、賞の発表までの間、一年生男子は他団体の演奏も聴かずホールの裏で地べたに座り喋りこんでいた。

「つーかマジ緊張したって」

「まあ初めてだししょうがねえべ」

「おまえはもっと緊張しろって」

初心者でコンクールも初めてだったホルンの中本と、中学から吹奏楽を始めていたトランペットの山上が今日のコンクールについて話している。この二人は同じ中学出身で、もともと中学時代不良だった中本が吹奏楽部に入部したのも山上から「女の子がいっぱいいるぞ」と誘われたのがきっかけだ。もっとも中本に言わせれば「てっきり『可愛い子』が一杯いるもんだと思った、あいつは詐欺師だ」とのことである。

「ああヒマ」

「他の演奏聴けよ」

「聴いてもおまえみたいに違い分かんねえし、だりいよ」

「おま…確かにだりい」

いくら経験者とはいえ、山上も性格的には不真面目なほうである。

その後「銅賞」の結果を聞いたあと学校へ戻る間も、彼らの間には打ちひしがれた悲しさも虚しさも何もなかった。ただとりとめもない会話が続いただけである。さすがに経験者の山上は少なからず残念そうだったが、会話の中にその無念さは一切反映されていなかった。

一年生だけのパートで孤軍奮闘に近かったサックスの上条は音楽のことよりも女子の話に気が行きがちで、

「それにしても緒川先輩かわいいよなあ」と最近熱を上げている緒川小百合について中本に熱く語りはじめている。

「ホントそんなんしか考えてねえから銅賞なんか取んだよ」

「おまえも銅賞じゃん」

「俺の銅賞はおめえとは違えんだよ」

「違わねえし」

中本はいつもこういったとりとめもない会話の中心にいた。

「で、銅賞って何？ダメだったってこと？」

吹奏楽についてまったく知識もないが好奇心旺盛なテューバの伊野にとっては、コンクールの賞の仕組みがいまひとつピンとこなくて心に引っかかる。

「まダメっていうか三種類ある賞のうち一番下ってことだから、まあ参加賞だよね」

初心者集団の一年生男子の中にあって部長経験者でもある山上は、こういった質問に答え

る役目も帯びている。

今年の一年生男子は以上の四人。この後学校へ戻り楽器をトラックから降ろした後、瀬野駅の近くのモスバーガーでさらに二時間以上も猥談を交えつつ過ごした。彼らにとってコンクールは、結局のところ始まりも終わりもなかった。大勢の前でパニックになりながら吹いた、ただそれだけのことであった。この日一番気分が盛り上がったのは演奏中ではなく猥談中だったという、なんとも頼りない四人なのである。

ゲルマンの憂鬱

今年のコンクールも最下位に終わった。自分がこの学校に赴任して6年、初めて高校吹奏楽部の顧問になり指導を始めてから四回目の挑戦だった。前任の顧問は公立高校の教諭にしては珍しく長い間けやき坂高校で教鞭を取っていたが、授業よりも吹奏楽の指導に熱心で、一度だけコンクール地区予選で銀賞を取ったこともある。しかし自分が赴任して来てからは全て銅賞で、いまだにそれよりも上位に行けていない。そればかりかここ数年は連続して最下位という順位に甘んじている。

「人数も揃ってるし今年は結構いい演奏だったのになあ」

賞の発表後に学校に戻り楽器をトラックから降ろした生徒達の解散を見届けた後、瀬野駅のそばにある賃貸マンション五階の自宅へと戻ってきたが、まだ今日の演奏が頭から離れない。田口としては彼なりに全力を尽くしているわけで、今年もまた最下位となると何がなにやらとボヤくほかない。前任者のように吹奏楽の指導にだけ没頭するわけにもいかず、進学校というプレッシャーの中で授業もしっかりとこなさなければならない。そうはいっても田口が教える「世界史」の授業は選択科目で人気もなく、他の教師に比べれば部活に時間を割けている方なのである。

田口も学生時代は吹奏楽をやっていた。中学から始めたクラリネットは、大学ではファゴットに変わった。しかし現状と決定的に違うのは、中・高・大といつの時代でもコンクール地区予選銅賞など味わったことがないということだった。とはいえ田口のそんな過去を知る部員は少ない。ただただ指導が厳しいと感じているだけだ。それは田口にも痛いほど伝わってきていた。

コンクール終了後のミーティングで田口は部員に向けて

「僕は去年よりいい演奏が出来たと思う。二年生は今年でコンクールは終わりだけど、来年こそ一つでも上の賞が取れるようにしっかり一年生に色々なことを伝えていこう」

そんなようなことを語った。

しかし自分はどうだ。あと数ヶ月、何を残せるのか。無意識に何度も口にした「楽しもう」は自分のための言葉だった。生徒のことなど考えてもいなかった。本来は生徒が楽し

むべきなのだ。
「ゴハン食べないの。冷めるよ」
妻の由紀絵（ゆきえ）がテーブルを挟んで座っていた。気づくと田口は一〇分以上も今日の夕刊のテレビ欄を開いたまま微動だにしていなかった。
「ああ食べるよ」
そうつぶやいて新聞をたたみ、箸を握る。
「今日のコンクールのこと？これからのこと？」
「うんまあ両方」
「でも連続最下位ってそんなに取れるもんじゃないし」
「出来るもんなら取りたくないね」
「まあ聴いた感じ銅賞ってのはすぐ分かったけど」
「相変わらず手厳しいな。今年は結構いい演奏出来たと思ったんだけど」
「アンタさあ、生徒のこと愛しすぎなんじゃないの」
「なんで」
「だってあの演奏でいい演奏って、あれが他のバンドだったらアンタも下手って言うでしょう」
「まあきっとそうだろうね」
「だから」
「なるほど」
「とりあえずもう考えるのやめたら」
「なんで」
「だってアンタ来年はもうあの学校いないじゃない」
「まあそうだけど。ブロッコリーあげる」
「好き嫌いしないで食べなさいよ。生徒さんには異動のこと言ったの」
「いやまだ言っちゃダメなんだよ」
「なんで」
「学校のアレでそういうもんだから」
「ふーん。よくわかんないけど。だからブロッコリー自分で食えってば」
大学の吹奏楽部の後輩である由紀絵と結婚したのは三年前、田口が三十一歳の時だ。彼女は田口の二学年下で、バス・クラリネットを吹いていた。大学の同窓会バンドで再開したのが縁で付き合い始め、二年で結婚した。今では尻に敷かれる毎日であるが、吹奏楽の指導に理解があるのは有難いことだった。
　とにもかくにも田口は今年でけやき坂高校を離れることになっていた。転任先はまだ決まっていないが、家の事情もあり近場で希望を出してある。ここから先数ヶ月、転任する素振りも見せずに吹奏楽部の指導を続けなくてはならない。何年も生徒に最下位を味合わ

せてきた自分が残り数ヶ月で何かを残して行けるのか、はなはだ疑問である。
「時間に限りがあるなんて当たり前のこと忘れてたよ」
「まあ気づいただけでも偉いんじゃない。次の学校でも吹奏楽部やれるといいねえ」
「そうだな」
色々な不安が入り混じり、どうしても憂鬱な口調になってしまう田口であった。結局、ブロッコリーは食べなかった。

文化祭と蛇

悔しさも何もなく例年通りのコンクールが終わり、けやき坂高校吹奏楽部もいつものように九月を迎えた。まるで無為に過ごしたかのように思える夏休みも、終わってみると初心者の一年生部員にも音楽をする喜びが芽生え始め、少し表情が引き締まっていた。とはいってもそれはわずかばかりの変化に過ぎない。
一年五組の教室では数学の授業が行われていた。一番後ろの席で寝ているのは吹奏楽部でテューバを担当している伊野拓也、その前に座って真面目に問題を解いているのは同じく吹奏楽部でバリトン・サックスを担当している戸崎聡子である。伊野拓也は一学期に数学の教諭とちょっとしたいざこざを起こし、それ以来数学の授業をまともに受けなくなった。テストの結果も悪くクラスでは「レッド・トライアングル」と呼ばれる赤点三人組の一人である。そして戸崎聡子はと言えば、同じ部活だからといって必要以上に伊野拓也に干渉することもなく、クラス内で会話をすることは皆無といってよかった。
吹奏楽部の部員で、クラスで目立つような人物はほとんどいない。伊野のように数学だけでなくほとんどの授業で赤点を取り妙な目立ち方をするのが関の山だ。戸崎も例に漏れずクラス内での存在感はない。元々口数が少なく、休み時間はどこかにフラリと消えてしまう。そんな性格も存在感をなくす要因ではあった。
ただそんな孤高のサクソフォニスト戸崎聡子に、ある日突然難敵が現れた。クラスで目立つ男子グループの一人から「付き合って欲しい」と迫られたのである。
「え、無理」
と一度はそれはもう箸にも棒にもかからぬ態で突き放した戸崎であったが、相手もなかなかしぶとく、毎日授業が終わると声をかけてくるようになっていた。
彼はまた伊野拓也と同じ中学校出身だったこともあり、伊野拓也にとっても難敵となった。彼は拓也にしつこく戸崎聡子を「落とす」ためにどうしたらいいか、アドバイスを求めてくる。拓也の立場は複雑だった。正直誰と誰がくっつこうが離れようが、拓也には関心がない。ただ同じ吹奏楽部員が絡むとなると少し話が別だ。せっかく部員同士のコミュニケーションも増え部活動が楽しくなってき始めているときに、部外の男と付き合われる

のは、何だか吹奏楽部から彼女を取られてしまうような気がしてどうしても応援する気にはなれなかった。戸崎自身も迷惑がっているわけで、とてもじゃないが彼の側に立つのは不可能だ。

こういった話は二学期に入ってから急激に増えた。各部活動内でもカップルがちらほら生まれ始めているのだから、クラス内となるとそれはもう毎日が恋人探しのような様相を呈していた。

そんなちょっと色気づいた空気に学校全体が包まれているのは、近く文化祭が行われるからだ。各クラスで文化祭の準備が急ピッチで進められている。拓也と戸崎のクラスの出し物はお化け屋敷に決まっており、連日放課後はその準備に追われている。

ただいくつかの部活の部員はその準備もある程度免除されている。そのいくつかの部活とは、文化祭中に体育館のステージで出番がある部活、つまり演劇部、ダンス部、フォークソング同好会、そして吹奏楽部である。拓也と戸崎はクラスの準備には少しだけ顔を出し、ほとんどの時間を部活に当てることが出来ていた。普段からの存在感のなさが功を奏したと言えるだろう。

各クラスが放課後の教室を使って文化祭の準備をしている間は、吹奏楽部は教室を練習に使うことが出来ない。個人練習やパート練習を行うことは休日練習を除いては皆無となり、毎日音楽室で合奏を行うことになった。

文化祭のステージでは毎年ポップスの曲を数曲演奏する。コンクールの自由曲のようなやや難しい曲を演奏する気力はもう消えうせ、なおかつコンクールが終わってから文化祭まであまり練習する時間が取れないからだ。大勢の生徒に「ウケる」曲を演奏しないといけないという理由もある。

ポップスといっても歌謡曲から映画音楽まで様々で、そのときのヒット曲だけを演奏するというわけでもない。けやき坂高校吹奏楽部の部費は月々五百円で、楽譜を購入する資金も限られているので、過去に定期演奏会用に購入した譜面などを使いまわすこととなる。今年は一曲、最近まで放送されていたテレビドラマ「王様のレストラン」の楽譜を購入するにとどまり、残りは「バックドラフト」「ディズニーメドレー」「ファンダンゴ」「ナイスデイ」など、皆が知っているような曲と誰も知らないであろう曲が半々くらいになった。

また文化祭は顧問の田口が多忙のため部員だけで作り上げるステージで、そんな意味でも年間を通して特殊なイベントである。

一週間ぶりに教室も使える日曜日、朝から吹奏楽部は活動を開始した。曲の練習をするのも大事だが、「演出」をどうするか、演奏会実行委員会がそろそろその内容を決めなければいけない時期に来ていたからだ。

午前中、他の部員が個人練習をする中、二年生の数名で構成される演奏会実行委員会は

音楽準備室にこもり照明やパフォーマンスなど様々な演出を取り決めていった。他の部員が口を挟むのは御法度、というのは暗黙の了解になっていた…はずだった。
その慣例を打ち破ったのは未だ夏休み気分が抜けていないマイペースな一年生、伊野拓也である。
昼休みになり部員達が音楽室で弁当を食べている中、実行委員会の面々は先ほど決まった演出内容を各自に伝えていく。やがて彼らはなんとも淀んだ空気でこの世の儚さを嘆くかのように談笑している心許ない一年生男子達のもとへとやってきた。

「一年男子、アンタ達は踊ってもらうから」

突然にズバッとそれはもう雷光のごとく言い放ったのは強硬派で知られる渡辺素子である。クラリネットという引っ込み思案な人がやりそうな楽器をなぜ貴女様が、という女王の貫禄に満ちた女傑。もちろんパートリーダーである。実行委員会では副委員長を務めていた。
一斉に犬のようにキャインキャインと反発をする一年生男子。
「踊りとかなんだよそれマジだりいよ～」
と元不良のホルン吹き中本淳。
「うわ～踊るとかマジかよクラスの奴らの前はヤバイって」
と言いながらも憧れの緒川小百合先輩の視線を気にしているのはサックスの上条英雄。
「ははは無理だし」
と他人事のように笑うのは部内ダルキャラNo.1の呼び声高きトランペットの山上剛。おそらく本番を欠席するつもりだろう。

三人とも各々のやりかたで拒否反応を示しているが、顔には笑みがありまだ考える余地がある風である。しかしその三人と全く異なる真面目な形相で反応したのが、もっとも反対をしなさそうだったテューバの伊野拓也である。
「嫌です。踊らないといけないならいますぐ退部します」
一気に場の空気が凍る。
「伊野君、嫌って言われても皆で決めたことだし、踊ってほしいなあ～」
あわててサポートに入ったのはおっとりした雰囲気のわりに演奏会実行委員長に加えパート・リーダーまでも兼ねる二年生フルートの的場佐知子（まとばさちこ）である。しかしおっとりしているのは「作りもの」で実はしたたかな女性であることは既に周知の事実であった。伊野拓也も一歩も引かない。
「誰が決めたか知らないけど勝手に決めてんじゃないッスよ。俺は踊らないス」
「ガタガタ言ってないで踊りなさいよ」

「ざけんな」

そんなやりとりが何度も続き、ほかの部員も事態に気づき音楽室は異様な雰囲気に包まれた。そして業を煮やした渡辺素子により提案された改定案はもうヤケクソであった。。

「じゃあいいよもう、伊野君抜きで踊ればいいじゃん」

これには他の三人も黙っちゃあいない。

「それはねえべ！それはねえべ絶対！伊野だけずりいじゃん！マジだりいよそれ！」

「伊野も踊れよ～」

「そしたら俺その日欠席ってことで」

とまあ火に油のような状態となってしまった。

「あああもう…何なのよアンタ達…」と肩を落とす渡辺素子。

「中本君、踊ってくれない？」

「伊野が踊らないなら無理っスね」

「山上君は？」

「どう考えても踊るキャラじゃないでしょ」

「ああそう……じゃあ上条君はどう！踊るよな！なあ！」

ついに女王がキレた。しかし何というタイミングでキレたのだろうか、哀れな上条は引きつった笑いを浮かべながら

「お、お、俺は……踊りまっす！」

上条英雄、まさに彼は英雄であった。

しかし踊るのが男子一人、しかも曲はディズニーということだったので急遽トランペットの一年生女子を一人追加し、ミッキー&ミニーでのダンスが決定した。しかし伊野のゴネ勝ちというわけにもいかず、彼は渡辺から

「伊野君、こんだけ予定変更させたんだからせめてダンスの振り付け決めてよね」

と途方もなく面倒な仕事を言いつけられたのであった。しかしその時、伊野の目に不適な光が浮かんだことには誰も気づかなかった。

こうして中本、山上、伊野はダンスの刑を逃れ演奏に加わることとなり、上条のみが全校生徒の前で恥じらいのダンスタイムを迎えることとなったのだが、ただでさえ恥ずかしいダンスを恥辱まみれに仕上げたのは本騒動の元凶のはずの伊野であるから世の中わからない。

それから一週間後、めっきり秋めいた空気とともに文化祭の日が訪れた。校門には、美術部と文化祭実行委員会の協力により出来上がった巨大なゲートが建てられた。校内に入

ると、一般の来校客を迎える最後の準備で各クラスともに賑わっている。文化祭にまるで興味のなかった伊野拓也は当日になってようやく各クラスの出し物を把握したのだが、喫茶店、模擬店、寸劇、お化け屋敷、迷路、古着屋…まあよくもこれだけどうでもいいものを集めたものだ、と逆に感心してしまうほどである。とりわけ飲食店が多かったのには閉口したが、拓也のクラスのお化け屋敷も上級生のクラスと被っていた。まあ資金もスペースも限られているのだから、そんなもんである。

「クラスの出し物が何よりも大切！」という生徒でもない限り、やはりこの日のメインイベントは各文化部の出し物であろう。各部室や特別教室では美術部や書道部といった真面目な活動が目立つ部活から、写真部そして漫画部といった学校中のアナーキストが集まったような部活の展示会など定番の出し物に加えて、電子音楽部という謎の集団によるピコピコサウンドの演奏会まである。

そしてもっとも注目を集めるのがロック有志同好会による、剣道場を借り切ってのライヴである。朝から一日中、数多くのバンドが次々と登場するこのイベントは、ロックでモテたい男子諸君と、気になる男子がどこまで出来るヤツか品定めする女子とのせめぎあいでもある。ライヴを見てみれば百年の恋が冷めるときもあり、また逆に「あら彼のほうがイイ男じゃないの」と新たな展開を見せたりもして、まさに恋におぼれる文化祭にはピッタリの出し物なのである。

そんなロック有志同好会は、実は一年生が仕切っている。上級生にもバンドはあるが、今年入学した同じ中学出身の四人組バンドがべらぼうに上手いバンドで、実力で権力をもぎとっていた。

拓也がふと気づくと一番目のバンドのヨレヨレの演奏が、文化祭スタート三十分前の朝九時半からすでに始まっていた。なんでも以前聞いた噂によれば締め切り後にエントリーしてきたバンドのようで、ライヴ経験ゼロ、実力は未知数、ジャンルはメタルだというのでロック有志のリーダーによって「開演前の開演」を言い渡されてしまったという悲劇のバンドだ。

一年生の中では陰から「ロック博士」なる称号を得ていた拓也には何の曲を演奏しているかわかったが、非常にマイナーなバンドのコピーだったので他に興味を示した生徒はほとんどいなかったであろう。むしろあまりの下手さにノイズバンドと化していた感もあり、とりもあえずもご愁傷様である。

そんなマイナーなメタルサウンドを聴きながら拓也が自分の教室へ向かうと、教室内はすでに黒いポリ袋で一面が覆われた漆黒の迷宮と化していた。ほとんど準備に顔を出さず部活の練習に明け暮れていた拓也は、教室の入り口で

「うおっ」

と感嘆をもらすばかりであったが、暗闇からふいに声をかけられた。

「おい伊野、今来たのかよ！」

「うおっ」
「これ向こうに持って行っておいてくれ」
といって何かを投げてよこす。
声をかけてきたのは未だに名前を覚えていない体育会系の男子生徒だったが、彼は何の説明もなく再び漆黒の闇へと消えていった。なんだか準備が相当忙しいようだ。がそんなやつのことよりも、この突然に渡されたビニール袋に入った大量のこんにゃく。いったいこれをどこに持って行けば良いのか。拓也にはさっぱりわからない。黒いポリ袋で覆い隠された迷宮のどこに友人がいるかも、どこに仕切り役がいるのかも、何もかもが分からない。お化け屋敷の成功にも失敗にも居合わせる気がない拓也であったので、教室内に一歩踏み込み、奥のほうの暗闇めがけてそのこんにゃく入りビニール袋を投げ込んだ。なんとなく気分爽快で振り返ると、戸崎聡子が驚いたような顔をして立っていた。
「投げた…？」
「投げた…かも？」
「えっ」
「えっ」
一瞬の沈黙。
「えっとさ、あの、俺部室行くけど」
なかったことにしようぜ戸崎。
「あ、アタシも部室行く。手伝いもう大丈夫みたいだし」
ちゃんと集合時間守ってクラスの手伝いしてたのか戸崎。
「あ、そうなの？じゃあ良かった。気兼ねなく部室で楽器を吹こう」
なかったことにしてくれたんだな戸崎。あなたは女神です。
「こんにゃくの行方が気になるけどね」
シャラップ、戸崎。

職員室へ行くとまだ部室の鍵が壁際に架かっていた。文化祭の準備でごった返す中、まだ部室へ行っている部員はいないようだ。校舎二階の一番奥にある部室へそそくさと歩いていく。部室へと向かう廊下の脇は吹き抜けで、下は剣道場になっており、あの可哀想なメタルバンドが無人の観客を前にしてヘロヘロと演奏している。そんな彼らを一瞥し、二人は部室に入った。
同じクラスとはいえ、普段とくに仲が良いわけでもない二人であるから、これといった会話もなくそれぞれ淡々と楽器ケースから楽器を取り出し、なんとなく吹いてみる。拓也はテューバ、戸崎はバリトン・サックスと、二人とも低音楽器であるから聴こえてくるのはボフボフといったベースラインだけだ。
それにしても六畳あるかどうかの、楽器を置くだけで精一杯の狭い部室に男女が二人で

ある。戸崎はともかく拓也としてはなんとなくこみ上げてくるものがなくもなく、やがてめくるめく妄想をはためかせながら音にならない音を吹き続ける有様。もうどうしようもない。誰か助けてくれ。この空気を打破する一撃が必要だ。

とそこへヒョロ長い身体に顔のパーツがいちいち大きな男、上条英雄が入ってきた。

「なんだ先に誰かいると思ったらおまえら、もうクラスの準備終わったのかよ」

ああ救世主。まさに英雄。だがおまえは間違っている。

「終わったんじゃなくて、個人的に終わらせてきた」

「おまえなあ…さすが！」

と咎めるどころか乗ってくる男、それが上条。

「戸崎さん、伊野と二人っきりで何かされなかった？こいつの妄想いつ爆発するかわかんねえからさあ」

「いや全然。まったく。まるでアタシがいないみたいにひたすらボヘボヘ吹いてたよ」

「おいおいおいちょっとくらい迫れよ伊野！それがレディーに対する」

それにしてもよく喋るやつだ。このくされ外道め。

「女だったら誰でもちょっかいだすのは上条だけだろ」

「俺がいつちょっかい出したんだよ、ねえ戸崎さんも言ってやってよこいつひでえよ悪党だ俺泣いちゃう」

「あのさ、とりあえず狭い部室でキャンキャン言わないでよミッキーさん」

「その通り。おまえは今日はただのネズミだ」

「二人してなんだよ俺はイジメられに来たのか？つかミッキーまじ恥ずいんだけど」

そうだ。すっかり忘れていたが今日は上条英雄一世一代の大イベント、ミッキーダンスお披露目の記念すべき日でもある。

あの日、渡辺素子先輩から指令を受けてから一週間、伊野と上条はディズニーメドレーの演奏中に踊る上条のダンス練習に明け暮れた。上条の家で合宿までしての壮絶な一週間であったが、出来上がったのはただただエキセントリックな、創作ダンスとも言えない何とも変態じみた、蛇のような舞踏であった。強いて言うなら中近東の香りがするだろうか。一方のミニーのダンスは他の女子部員に任せてしまったのでそちらの無難なダンスと比べ、まさに陰と陽、といったような白熱のダンスバトルの様相を呈している。重ねて述べるが、その際バックに流れるのはファンタジックなディズニーメドレーである。ミニーを狙う隠微なアラビアン・スネーク、それが上条の舞である。ある意味正しく普段の彼を表現したものだ。正直、あれを踊ろうとはさすが上条、恥知らずの男であると、拓也も彼を見直していた。今回の変態ダンスを作るうち、二人の間には互いを親友と呼べるほどの友情が芽生えていた。変態性というものは変態と変態を強く結びつけるものである。

ふと、剣道場から音が消えた。例のメタルバンドが演奏を終えたのだ。ということはつまり、文化祭の開会を意味する。

「アタシちょっとクラスの様子見てくるね」
「おう」
「なんだよなんだよおまえら実は付き合っちゃってるんじゃねえの～？」
阿呆かコイツは。いっぺん脳内どうなってるか見てやろうか。いややっぱり見たくない。どうせ変態が手と手を結びフォークダンスを踊っているに違いない。
そういいながらも、戸崎が部室を出ると急に上条は神妙な面持ちになった。
「伊野、ちょっと手伝ってくれ」
「俺に男の趣味はない」
「違えっ！ソロだよ、ソロ！」
実は上条はミッキーダンスに加え、「ファンダンゴ」なる曲でちょっとしたソロがある。一年生だけのサックス・パートでは、アルト・サックスのソロはすべて上条の担当になっていた。なぜ経験者の西堀がソロを吹かないのか、その理由は良く分からない。
文化祭が始まり、ロック有志のステージもだんだんと熱気を帯びてくる中、拓也と上条はひんやりとした部室で「ファンダンゴ」のソロ部分を延々と練習した。本番も上手くいけばいいが、と思うがこればっかりは拓也にもどうしようもない。どちらかというとソロの成功よりもダンスで客席から悲鳴があがることを願って止まない拓也であった。

やがてソロの練習にも飽き、拓也と上条は二人でロック有志のステージを見物することにした。午前中はほとんどが一年生のバンドのため、ステージ上には見知った顔も多い。ああ、あの人地味なくせにギター弾けたんだとか、なんだあの野郎ドラムなんて叩いてやがるなどと捻じ曲がった視点で部室の前からステージを見下ろす。客席はオールスタンディングで、自分達のクラスのニューヒーローの誕生に沸きかえる女子がステージへと殺到している。まったくモテ要素のない吹奏楽部の二人にとっては複雑な光景であった。
しばらく「おのれバンド野郎め、そんなシャバイ演奏で女をたらしこむつもりかこのクサレ外道め」という思いを胸に秘め、はたから見れば「なんでそんなに不機嫌なんだ」と思われるくらいに憮然とした表情で、蟻んこをニジニジと踏み潰すかのように足を踏ん張って戦況を見つめていた二人であったが、気づくとすぐ傍らに中本淳と山上剛も来ていた。
「よう」
「よう」
そんな挨拶もそこそこに中本は「いいなーロック俺もやりてえよ」と、中本らしい発言を投下し「この野郎、寝返ったか」と拓也と上条の鋭い視線を浴びることになったのだが、対する山上はというとまったくロックには興味がないようで、マウスピースを口にあて「ブィー」とやっている。マイペースにもほどがある男だ。
「淳たちのクラスは何やってんだっけ」

と校内のほとんどの行事を把握していない拓也が尋ねる。
「うちらは喫茶店とかいって超だりいことしてんだけどよ、とりあえずこいつが何も手伝わねえんだよ」と中本が山上を親指で指す。
「んなことねえだろ、ちゃんと味見してんじゃねえかよ」
「それはてめえが腹減ってるだけだろ、そんな食ってばっかいるからブクブク太るんだよてめえは」
「へへっ」
と悪びれもせずむしろ楽しんでいる山上は、確かにここ最近膨張著しい。二人は同じ中学校出身で、なおかつ高校では同じクラスであった。
中本と山上が部室で練習をするというので、拓也と上条は狭い部室から退散し、各々のクラスへと戻っていった。
「それじゃあまた昼飯時に」
「おう」
そういって上条と別れたものの、自分のクラスで何が起こっているのかさっぱりわかっていない拓也である。とりあえず一般客と同じように「入口」と書かれたお化け屋敷へと足を踏み入れるしかない。
黒いポリ袋で覆われた教室内は真っ暗で、これまた黒いポリ袋で覆われた段ボールの壁によって築かれたチンケな通路を進んでいく。頭上から迫り来るこんにゃく、壁から一斉に出てくる無数の手、近づくと飛び出す黒ヒゲ危機一髪など、その他もろもろの仕掛けを全て喰らい「うひゃあ」とか「わひゃあ」とか全力で驚きながらも「おいおい待て俺だ俺だ」と叫び奥のほうへ進んでいくと、クラスの友人と呼べるかどうか、まあどっちかというと友人と呼ぶべき者たちから「伊野！こっちこっち」と黒い壁の向こうへと誘われた。
「なんなんだよこれ」と息も絶え絶えに拓也が問うと、
「だからお化け屋敷だって」と真っ当な答えが返ってきた。
「とりあえずヒマになったから何か手伝いに来たんだけど何すればいい」
「じゃあここの前を通る人の前にワッて出てって驚かす役やってよ」
「なんだよそれ驚かなかったときの虚しさとんでもねえじゃん」
「だから頑張って驚かせろよそこは」
と半ば強制的に「ワッ」という最もやりたくない仕事を任されることになってしまった。
しかしそこは伊野拓也、吹奏楽部一年男子随一の隠れ変態である。男子が通るときは何もせず、中学生と思しき女子が通るときだけ「ワッ」とやるというとてつもない変態性を発露させ、見かねた友人もどき達から「あいつをクビにしろ」と強制退場と相成った次第である。
仕事を失った拓也は、特に文化祭を楽しむべき理由も見つからず、結局また部室へと戻

ることになった。

午後になり、来校客も増え文化祭はさらに盛り上がりを増していく。親子連れや他校の生徒でごった返す教室や廊下と同じく、吹奏楽部の部室内、そして部室前の廊下も混沌の極みに達していた。部室脇にある階段を登ると体育館の舞台袖にたどり着く。午後の体育館ステージ、トップバッターである演劇部の謎めいた声とＢＧＭがぼんやりと聴こえてくる中、その階段下の廊下で次の出番を前にした吹奏楽部三十九名がわさわさと落ち着きなく準備をしているからである。部室内ではクラリネットとサックスの面々が最後まで一番良い音の出るリードを探している。拓也は部室前の廊下の皆から少し離れたところに楽器を置き、その傍らで中本淳と話していた。

「ああ、マジ緊張するって。コンクールとかならいいけどよ、クラスの奴らの前で演奏するとかマジ恥ずいんだけど」

「まあ適当にやってりゃいいよ」

「前から思ってたんだけどさ、伊野って何でそんなにマイペースなわけ？」

「…目の前のことにあまり興味がわかない」

「じゃあなんで吹奏楽なんてやってんだよ」

「そりゃドラム叩こうとしてたのに騙されたから」

「いやそうじゃなくて何で続けてるのかってこと」

「何でだろうなあ。楽器吹くのは楽しいんだよ。でも合奏やってるうちに曲に飽きる」

「なんだよそれ」

「でも本番になって、いざ演奏が始まると燃えるよね」

「始まる前から燃えとけや」

「まあでも今回はダンス部の前座みたいなもんだからねえ。ちょっと燃えない」

「ま確かに前座だわ」

拓也と中本淳の言うとおり、吹奏楽部の後はダンス部のステージである。けやき坂高校のダンス部といえば近隣にはちょっとは名の知れた部活であり、他校のダンス部も大勢見に来る。そのうえ学校中の男子諸君は性的なフィルターを通してその華麗なる演技を見るという欲望を満たすために、ダンス部の前に演奏を披露する吹奏楽部のステージが始まる前には我先にと客席最前列を確保するのである。けやき坂高校では毎年ダンス部の前が吹奏楽部なので、この青春リビドーほとばしる行為も恒例の行事となっているらしい。

「ダンス部に負けないような演奏をする」というのも文化祭での吹奏楽部、毎年の目標でもある。

そしてついに吹奏楽部の出番が来た。舞台の上手（かみて）に並ぶパートを先頭に、下手（しもて）から体育館のステージへと登る。緞帳は降りたままなので、ひそひそと何かを喋る声が幾重にも重

なって結構にぎやかな舞台上である。
「つづいて、吹奏楽部による演奏です」
と誰だかわからない女子生徒の声が体育館のスピーカー越しに流れ、いよいよ緞帳が上がる。それまでひそひそと話し合っていた部員も一斉に押し黙り、緊張の面持ちでそれぞれ客席やら体育館入り口の非常灯やらを眺めている。拓也が客席に目を移すと、やはり前の三列目までは男子諸君で埋め尽くされていた。演奏が始まる前にも関わらず彼らの目には「早く終われよ」と無言のサインが浮かんでいる。
しかし1曲目の「王様のレストラン」が始まったとたん、男子諸君の目の色も変わった。なんといってもつい最近まで皆がこぞって見ていたドラマの音楽である。
「王様のレストランじゃん」などという声が聞こえてくる。
続いて披露された「バックドラフト」では特に何の反応もなかったものの、続く「ファンダンゴ」の上条のソロでは客席にいる彼のクラスメイトと思われる集団から
「いよっ上条！」
などという掛け声も飛び出した。その後には再び「ナイスデイ」で客席を退屈のどん底に突き落とすというまるでジェットコースターのような選曲運びであったが、そのステージのトリを飾ったのが「ディズニーメドレー」である。ダンスをする二人が舞台袖に移動し準備をする間、楽器紹介などで間をつなぐのだが、その時間、客席からの視線の痛さといったら容赦なく、あまりの場の凍りつき具合に拓也などは笑い出しそうであった。
しかし本当の笑いはここから始まる。司会進行を務めていた渡辺素子が
「続いて最後の曲です。ディズニーメドレーをお送りします。楽しんで聴いてください」
とアナウンスしたときの最前列男子諸君の「もう勘弁してくれよ」と言わんばかりの悲壮感漂う表情も凄かったが、その直後に舞台脇のドアから上条が元気よく飛び出した刹那の彼らの表情の変化も凄まじかった。驚愕、恐れ、その後からわきあがってくるとてつもない感情の波。彼らの前にはさきほど華麗なソロで客席を沸かせた男が、やせ細った身体にタイトフィットした全身黒タイツに手作りのおそまつなミッキーの衣装を身にまとい、満面の笑顔を撒き散らしていた。その後ろには恥ずかしさのあまり顔を伏せた女子が一人おずおずと付いて来ている。
ほんの一瞬の空白の後、「わっ」という声が一斉にあがり、体育館が笑いと熱狂の渦に巻き込まれた。
指揮をしていた的場佐知子までもが笑いに巻き込まれていたが、ふと我に返った的場が指揮棒を構えなおすと、この勢いを絶やさずいざ行かんと吹奏楽部は一致団結、吹奏楽部の歴史にその名を残す魅惑の「ディズニーメドレー」がスタートしたのである。
伴奏のリズムを刻みながら、拓也は上条に念を送っていた。
（まずは第一のポーズ、左足を思い切り伸ばし身体を反らせての左手で右耳つかみ、そして右手は妖しくミニーを誘い屈折した右足が不吉なリズムを、さあ刻め上条！）

練習の通りに上条は動いた、否、それはもうただ動いただけではなく、躍動していた。あれだけ羞恥心でいっぱいだった上条のガラスの心は舞台袖で既に粉々に瓦解し、破壊のあとに生まれた妙な解放感だけが彼を突き動かしていた。

「上条！上条！」

客席からは彼をさらに高揚させる声が掛かり、彼の動きはどんどん鋭さを増していった。ヒートアップした彼のスネーク・ダンスは後半になるとトランス状態に陥り、練習した内容の面影などほとんどなくなっていたが、その勢いに任せた摩訶不思議な舞いは、拓也にとっても嬉しい誤算であった。

結果、上条は吹奏楽部の株をおおいに上げることに成功し、彼はまたもや英雄になった。

終演後、吹奏楽部の面々は各クラスの友人たちに囲まれることになり、拓也もご多分に漏れず友人たちから賛辞を贈られた。といっても話題の中心は上条である。

「いやあ伊野、吹奏楽部チョー良かったよ！伊野がどこにいるかは良く分からなかったけど、とにかくあの上条ってやつは凄いよなあ」

とこんな調子で、上条の名はけやき坂高校一年生の間で知らぬ者はいないという状況になった。しかし人気者になった当の本人が「その話には触れないでくれ…」と目に涙をうかべうつむきがちに訴えているのだから、青春とは不可解なものである。

何はともあれ、混乱と熱狂のうちに文化祭は終わりを迎えた。文化祭終了後には「後夜祭」といって要は打ち上げのような大イベントがグラウンドで行われたのだが、吹奏楽部のほとんどの部員は参加しなかった。そういう輪に加わるのが得意な奴らではないのだ。伊野拓也、中本淳、山上剛の三人はハートブレイクの上条英雄を慰めながら、一緒に帰途についた。打ち上げはいつもの通り、顧問・田口のマンションそばにあるモスバーガーであった。

地区音楽会

秋風に春の匂いを残して、文化祭は終わった。数多くのカップルが生まれたことを除けば、またいつもの生活が始まっている。二年生はそろそろ三年次の授業選択について考え始めなければならない。進学に力を入れるけやき坂高校では、三年次には文系と理系に生徒を振り分ける選択科目というものが存在していた。国公立大学の受験を考えなければ、物理を学ばずとも、また世界史や日本史を学ばずとも卒業が可能なカリキュラムなのだ。文化祭が終わり三日後の昼休み、二年三組の教室では、吹奏楽部でテューバを担当している広田裕子、そしてトロンボーンを担当している緒川小百合が弁当をつつきながら「あの日」について興奮冷めやらぬ様子で話している。

「それにしても上条の意味不明なダンスも凄かったけどさ、一年だいぶ伸びてきたよね」
うんうん、とうなずく緒川小百合を相手に広田のトークは止まらない。
「小百合のとこの宮内(みやうち)さんとかさ、超ウマイよね」
「うちの伊野君もさ、もう一人で大丈夫って感じだもんね。音とかアタシより大きいし」
「淳と山上君の二人もさ、不良中学出身の割には結構マジメなんだよねえ」
「あとはアレかなあやっぱ小島とか光田(みつだ)とかの態度がね。素子最近キレかけてるもんね」
と広田の話は文化祭に始まり最終的には愚痴に落ち着くのであるが、二年女子と一年女子、それぞれの一部の勝気な集団同士のピリピリした空気には緒川も不安を覚えていた。
「なんだかそのうち衝突しちゃいそうな気もするけど、裕ちゃんと私のパートは後輩と仲良くやっていこうね」
「うちらは大丈夫だよ宮内さんだっていい子だし、伊野君と小野田さんも言うこと聞くしね…いや伊野君はたまに言うこと聞かないか」
自分の進路についておおいに悩まなければならなくなってくると、さて来年はどうなっているだろうかと自然と後輩の話に花が咲くのが先輩というものなのであった。
「まあとにかくこの調子なら地区音も楽勝だね」
そういいながら広田は満足げにウィンナーをほおばった。

さて一方同じ頃、一年生数名が教室を離れてうす汚い部室で弁当を食していた。なんとなくもうお分かりかと思うが、そんなところで弁当を食しているのはトランペットの山上剛、ホルンの中本淳、サックスの上条英雄、そしてテューバの伊野拓也である。山上と中本は同じクラスで、上条もクラスの友人が多くわざわざ部室まで来て昼食を取る理由もないのだが、拓也がクラスに対して無関心の姿勢なので彼の救済措置的にほぼ毎日四人でここに集まって昼休みを過ごすことになっていた。
救済措置とはいっても四人で過ごす時間は彼らにとって非常に心地よく、また四人とも最近は部活中心の生活にどっぷり浸かっているので、こういった時間を使ってコミュニケーションを取るのも何かと都合が良いのである。
「最近部活どうよ」
ウィンナーをほおばりながら突然切り出した中本淳に、玉子焼きを口元に持っていく手を一瞬止めて、なにが、と山上剛が短く返す。
「何がっておまえ雰囲気だよ。なんか地区音の選曲んときからさ、なんかこうピリピリしてね？」
具体的に、と反問しながら白米を口いっぱいに詰め込む山上の横で、上条が浮かない表情をしている。
「上条なんか聞いてねえの、あいつらから」
「小島と村田？」

箸を止めて上条が中本の表情を伺う。それ以外に誰がいるんだ、という顔で中本が続きを促している。それまで一心不乱に弁当と格闘していた拓也までもが身を乗り出してきている。上条にとっては話し出すと気分が落ち込んでくるからあまり話したくはない話題だ。

「いやあもうさあ、大変だよ毎日。先輩たちの悪口しか言ってねえ。初めは小島だけだったんだけど最近は村田も一緒になってうるせえんだよ」

話し出すと上条も止まらない。彼は彼で鬱憤が溜まっているのだ。

「地区音の選曲の仕方が一方的だとか、誰それが下手だとか、ろくに練習もしねえでそんな話ばっかして一日終わりだよ。注意するのもなんか変だしかといって先輩にチクるようなことでもねえし、とにかくひたすらうるせえ。戸崎は途中ですぐに低音と合わせに伊野んところに行っちまうしさ、西堀はどっか違うところで練習してるみたいだしさ、そんで基礎練もろくに出来ねえから基礎練だけは俺も伊野のところにお邪魔させてもらってるんだけど」

「なんだよそれひどいな。ふざけてんだろ」

急に山上が怒り出した。ふだん温厚もしくはやる気のない彼にとっては珍しいことだが、心の奥底にはこと音楽に対してやぶさかではないほどの情熱は持ち合わせているらしく、その後の言動を見ると「練習もろくにしないで悪口で一日を費やす」というところが気に食わなかったようだ。

「要はあれだろ、あいつらのせいでサックスパートが崩壊の危機ってわけだ」

何を要約したのか分からないが中本も怒りに震えている。

「あとはあいつだよ、光田。あいつもかなり先輩ともめてるらしい。つか普通にウザイ」

さらに中本が新情報をもたらす。最後はただの好き嫌いの話だったとしても。

「広田先輩も小島とか光田のこと良く思ってないよ。よく愚痴っとる」

それまでふむふむと話に聞き入っていた拓也が新しい切り口の情報を場にもたらした。それはまことか、ほかに奴らに鉄槌をくだせる人物はおらぬのか、それは素子先輩しかおらぬのではないか、いやいやすでに素子先輩は臨戦態勢にあり今まさに音楽室は戦火に包まれようぞ、などと会話は多いにはずみ、最終的に「我ら一年男子はどうあるべきか」という悩ましい命題に直面したが、女子しかいない先輩たちからまるで赤子のごとくに可愛がられて早五ヶ月、彼らの気持ちは固まっていた。すなわち、

「戦場において我々は一人として欠けることなく先輩軍の援護にまわる」

後にいう「ウィンナーと玉子焼きの盟約」がこうして結ばれたのである。実際のところ、恩義に報いるというよりは、同学年女子よりも先輩女子のほうが圧倒的に美人が多いから、というただそれだけのことなのであるが。ここにいる四人誰もが「あわよくば」を狙っていた。もうどうしようもない四人なのであった。そして結局誰もが援護にまわらず、

中立を保った。どうしようもないことこのうえない。

さて時をほぼ同じくして広田と中本が別々の場所で発した「地区音」そしてそれがもたらした部内の一触即発状態について少し説明しておく必要がある。

地区音楽会、通称「地区音」は東京都の文化連盟が主催する「東京都高等学校文化祭」なる催しの中のイベントである。東京都の高等学校は十以上の「地区」に分かれているが、おおよそ十一月の下旬頃に各地区ごとの高等学校の吹奏楽部や合唱部が集まって演奏会を行うのだ。

都立けやき坂高等学校、そしてお隣さんの都立瀬野川高等学校などは第七地区に入っていた。

演奏会は十一月二十三日、そして演奏する曲は二曲。たいていの学校がシンフォニックな吹奏楽作品とポップスとの組み合わせで出場し、けやき坂高校吹奏楽部もそれにならっているので本番まで少し余裕がある。そうはいっても学区内でダントツの下手さを誇ると噂されるけやき坂高等学校であるから、顧問の田口からは早く選曲を終えるようにと念を押され、文化祭の始まる前には曲目が決定していた。

さてまず一つの問題はその選曲過程にあった。「どうせ一年生には地区音が何かもわからないのだからこっちで決めよう」と二年生は彼らだけで選曲に踏み切った。そしてこの選曲の仕方は文化祭の選曲でも同様であり、一年生の中には選曲に関われないことを快く思わないものもいた。上条のように無茶な目に会いながらも結果オーライだった人物は稀である。

それだけでは特に大きな問題とならなそうなことだが、もう一つの問題がなかなかに深刻であった。コンクール後の一年生の伸びはなかなか凄まじく、それは技術的にももちろんのこと、一部の部員には二年生の技術的な拙さが分かるようになっていた。つまり「耳がよくなった」一部の一年生が二年生を「下手なやつら」と思うようになったことである。

元を正せば二年生も悪いしその一部の一年生も悪いということになるのだが当人達には罪の意識はないのだから仕方がない。そしてこの問題がやがて二年生と一年生の間に衝突を生む原因となるのだが、彼女達がいなければそんなことも起きなかったかもしれない。彼女達とは、二年生がおらず野放しになっているサックス・パートの村田麻紀と小島美紀、そしていつも小島たちとつるんでいるパーカッションの光田恵（みつだめぐみ）である。

光田と村田は中学校から吹奏楽を始めたいわゆる「経験者組」である。とりわけ光田はロールすらろくにできないパーカッションの上級生を、入部当初から疎ましく思っていた。そして彼女は中学校時代、コンクールの予選で銅賞など取ったことがなかった。男子

四人組にとっては半ばどうでもよかったコンクールの賞だが、光田にとっては許しがたい屈辱だったのである。そんなコンクールの後から、光田はパーカッションの上級生に対し露骨に食ってかかるようになっていた。そしてコンクールでも銅賞しか取れず、その後も一向に技術向上の気配なく和気藹々と活動する二年生全体に対し、光田と村田の怒りは増すばかりであった。

ある日のこと、いつものように部活帰り、一年生の駐輪場で光田と村田が愚痴りあっていた。

「うちの先輩達マジでいつになったらロールできんだよって感じでさあ」

「おたくほんとヤバイよね」

「だってあいつらタンバリンもろくに叩けてねえんだもん」

「タンバリンなんて誰でも出来んじゃん叩きゃいいだけじゃん」

「それが出来ないんだって。リズム感全然ねえんだもん」

そんな会話をしているところに「よっ」と挨拶も軽やかに小島がやってきた。なんの話してんの、と話しかける小島に今日の愚痴内容を伝えると、小島は露骨に嫌な表情を浮かべて、村田と光田が兼ねてから腹に溜めていたであろう悶々とした思いを代弁した。

「つうかさ、上手くねえのに先輩ぶってんのおかしくね？なんか話聞いてるだけで腹立ってきたんだけど」

まさに小島は導火線と火付け役がセットになったようなデンジャラスな女性であった。村田がそれに続く。

「うちらは先輩いないから自由にやれてるけど光田は辛いよね」

「つうかさ、うちら先輩なしでせっかく楽しくやってんのにさ、他のパートのくせに渡辺とか超アタシに文句言ってくんだ、遅刻がどうとかさ。でもあいつら上手くねえんだろ？」

「まあクラリネットも上手くないよ」

「なんだあやっぱそうかあ何かむかつくなあ」

そして光田が少し声を落としてささやいた。

「この際、もう反逆でよくない反逆」

反逆か、いいねえ、と小島がニヤリとして村田を見る。村田も「しちゃおうよ、反逆」と追従する。後に言う「駐輪場の反逆」がこうして始まったのである。

翌日からというもの、三人は常に戦闘モードであった。音楽室で二年生が楽しくじゃれていると、光田がドラを大音量でぶっ叩く。村田が二年生の技術不足の指摘や運営批判を公然と行う。極めつけは小島で、二年生とすれ違う度に舌打ちしメンチを切りまくるとい

う、もはやおまえそれはただのチンピラではないか、という悪態のつき方であった。

これにはさすがに二年生も黙っていない。否、おっとりした性格の者が多い二年生のほとんどはまるで彼女たちを夏の台風か冬の風邪か何かのようにじっとやり過ごしていたのだが、女王渡辺素子は黙ってはいなかった。文化祭が近づく頃には徐々に渡辺と小島が「バカ」「死ねよ」などととてつもなく短い舌戦を交わす現場が多く目撃されるようになっていた。光田と村田は渡辺個人に怨恨があるわけではなく、どちらかというと部をまとめきれていない部長の前田智子や自分達とまるで違う美人の緒川などに敵意を抱いていたのだが、小島の敵意は、何かと自分に小うるさく、また男子から「女王」などと祭り上げられている渡辺に向いていたので、この二人がぶつかるのは必然であった。

このような状況に、二年生側では男気あふれる女傑、広田裕子も渡辺のサポートに回るようになった。最終的にけしかけておきながら半ば表立った行動は取っていない村田を除けば、一年生側も小島と光田の二人組である。奇しくも二対二の状態になったのだが、決してその組み合わせで争いが行われるわけでもなく、局地的な戦いはやがて部活全体を雨雲のようにどんより湿度を含んで包んでいった。そんな中行われたのが一時休戦の役目を果たした文化祭であり、その文化祭が終わった後に再び部活は暗雲に覆われようとしていたのである。

そんなわけで広田や緒川、そして男子四人の不安もいたしかたないことだった。そしてやはり、ほどなくして局地的な戦いが再開された。部長の前田も火消しに奔走していたが、もう二年生女子は一致団結して小島と光田への不満を露にし、部内の亀裂は決定的となった。しかし最後まで前田は部員同士での決着を望み、顧問の田口には何も言わなかった。田口も合奏の雰囲気から「何かが起きている」とは感じていたが、担任のクラスの生徒が次から次へと問題を起こして近隣から苦情が来るわ考古学の分野で歴史的な発見があり世界史の入試対策には追われるわのてんやわんやだったので、部活の様子を伺う余裕もなかった。

そして十月、部長前田の号令の元、ついに全部員を集めての集会が開かれた。音楽室で、教室を二分するように机と椅子が並べられ、教室の前側には二年生、後側には一年生が陣取る形で座った。二年生サイドから、部長の前田が最近の部活内で起きていることのうちいくつかを例に出し、慎重に言葉を選ぶようにして話し始めた。後に言われる「地区音の乱」はこうして厳かに始まったのである。

「…とそういうわけで、一年生から、二年生に向けて色々と疑問に思うことや不満に思うことがあるなら、今日ハッキリと言ってください」

こうして改めて問われると、小島も光田も村田もこれといって言うことがない。端的に

言えば、ただ単に嫌いなだけなのであり、不満があれば、と言われたところで不満が多すぎて何から言えばいいのかわからなくなる。光田も村田も下を向いたままなので、膝を組んで二年生に対し横向きに座っている小島が爪をいじりながら気だるそうに話し始める形となった。

「つうかさあ、二年生だからっつっていちいち偉そうなんだよアンタら」

一言目から飛び出した暴言に「はあ？」と怒気を含み勢いよく立ち上がった渡辺を広田があわてて右手で抑える。なおも小島の攻撃は止まらない。

「上手くもねえのに先輩ぶってんじゃねえよっつってんの」

「何でオマエにそんなこと言われなきゃいけねえんだよ練習もろくに来ねえくせに」

「アンタみたいに小うるさいヤツがいるところに何で練習しに来なきゃいけねんだよ」

「小うるさくしたくてしてるんじゃねえよ、オマエがそうさせてんだよ」

負けじと応酬する渡辺に、意味わかんねえよ、と呟いて小島がため息をつく。

「アンタまじだりい」

開始前から分かっていたことではあるが、まずは渡辺と小島の舌戦で時間が過ぎていく。時折部長の前田が「冷静に」と呼びかけるも焼け石に水だった。二人のあまりの凄みに他の部員は何一つ言葉を挟めない。二人の戦いは永遠に続くかと思われた。

あほくさ、と周りに聞こえない様に呟き、伊野拓也は眠る体制に入った。目を閉じる直前に戸崎聡子の姿が偶然目に飛び込んできた。彼女は何を考えているのか、窓際の席に座りぼおっと外を眺めていた。上条は奇しくも小島と同じ不敵な格好で座っていたが、早くこの場が収束することだけを願ってやはりどこかぼおっとしている。中本は女子同士のスッキリしない戦いぶりに憤りを感じるらしく頬杖をつきながら貧乏ゆすりをしている。山上はと言えば、意外と真面目に戦況を見つめていた。彼のやる気スイッチがオンになる基準は誰にも分からないが、本件に関しては相当の関心があるようであった。

やがて小島と渡辺が双方ともに罵詈雑言ライブラリから全ての単語を出し尽くし、場が静寂につつまれた。何とも重苦しい静寂である。さすがに小島も渡辺も応酬に疲れたのか、ぐったりとしてしまった。前哨戦は終わりを告げた。ここからは前田の仕切りによる本格的な話し合いが始まる予定であったが、そう簡単には行かない。誰もが「なんじゃあそりゃあ」とひっくり返ってしまうような最後に向けて、もう少し小競り合いがある。

「小島さんと素子からお互いの意見が出たけど、他の一年生はどう思ってるの。村田さんと光田さん、部にかなり迷惑かけているんだからハッキリと教えてください。私たちも反省すべき点は反省して部活を良い方向に持っていきたいの」

狙ってか狙わずか発せられた前田の優等生発言に弾かれたように、村田が答えた。

「じゃあ言わせてもらいますけど、先輩達なんでそんなに下手なんですか。なんで下手なのにいつもヘラヘラしてるんですか」

あまり中身のない小島と違って二年生にとって最も痛い所を突いた発言に、一瞬二年生もどうしたものかと顔を見合わせる。やがてフルートの的場佐知子がやんわりと口を開いた。

「確かに私たちは上手くないかもしれないけど、それを後輩から言われるのは何か違うと思うんだけど。あとヘラヘラしてるっていうけど、ちゃんと練習もしてるよ」

「練習してるって言っても上手くなってなかったら意味ないじゃん」

「先輩には敬語を使いなさい」

「そんな状況じゃないでしょいま」

小島と渡辺の再来になりそうなところで前田が「冷静に」と割って入る。続いて光田が溜まっていたものを全て吐き出すように一気に語り出した。

「アタシ、今までコンクールで銅賞って取ったことないんですよ。すごい恥ずかしいんですよ、最下位なんていう屈辱、味わったこともないしこの先も味わいたくないんですよ、なのにパーカスの先輩らはロールすら出来ないし、金管はリップスラーもろくに出来てないしクラリネットはリードミスばっかするし指回ってないし音広がってるし、そもそもリズム音痴ばっかだしろくに初心者の後輩も育てられてないし、そんなんで和気藹々とやられてみてよ、腹立ってしょうがないんだって」

具体的な指摘を受けて的場にも返す言葉が見当たらない。すぐに村田も自分の思いをたたみかける。

「うちのパートは先輩がいなくて、手本になる人も指導してくれる人もいないんですよ、小島とか上条とか、初心者にはアタシと西堀と聡子が教えてるけど、経験者はやっぱ他のパートの先輩を手本にするしかなくて、先輩達が上手くなっていけばこっちもやべえなって思って刺激になるし、なのに先輩達が全然しっかりしてないじゃないですか、だから何なんだろうこの人たち、って思うわけ」

二人の意外と熱い思いに、思わず緒川小百合が泣き出した。

「ごめんね、本当に情けない先輩でごめんね」

小百合さんは問題ないじゃないですか、と同じトロンボーンパートの一年生宮内篤子がなだめるも、緒川の涙は止まらない。この涙をきっかけに一瞬素直に反省しかけた二年生たちも一斉に反発を始めた。もっと他に言い方あるんじゃないの、なに生意気いってんの、上手くなりたきゃ勝手に練習してろ、云々。

さすがにそりゃあないぜオマエら、と思ったのか渡辺が二年生を一喝する。

「ちょっと待ちなよ、あの子らの言うことも確かにそうなんだよ、うちらは下手だ！」

そしてオイオイと何人もの二年生が泣き出した。

言いたいことを吐き出した小島、村田、光田も突然の涙涙に唖然とするしかない異様な

光景であった。伊野拓也は一瞬眠りに落ちていたが、不穏な空気を感じ取って目覚めたところであった。戸崎もビックリしたように二年生たちを眺めている。

そんな中ただ一人、驚きを通り越して胸に秘めた破壊衝動が今目覚めんとする部員がいた。

なんなんだこのクソみたいな展開は。アホか。こいつら全員アホか。意味のわからない号泣大会に至るまでに一時間も経過しているじゃあないか。中本淳は限界を迎えた。

シクシクと涙する声だけが響く音楽室に突如「ゴオン」と大きな衝突音が響いた。うつむいていた皆が弾かれたように音の来たほうを見上げると、中本が机を蹴り倒して仁王立ちしている。主なこれまでの発言者や涙する二年生をにらみつけながら、中本は力の限りに叫んだ。

「ふざけんなバカ野郎！」

あまりの怒気に、その場にいた全員が凍りつく。山上だけは中学時代から見慣れている光景のようで、おいおい、などといってやんわり制しようとする。しかし中本の耳には届かなかった。

「おめえらチンタラチンタラやりやがってあげくにピーピーわめきやがるわガキかよバカッ、小島はくだらねえことでケンカ売るな、で二年は泣くな、でお互いとっとと謝ってあとは俺に早く楽器を吹かせろ、解散！」

「おい淳っ」

一方的に解散を告げると、中本は山上の制止も聞かずに音楽室から出て行った。残された部員達はしばし唖然とし誰もが言葉を発せずにいたが、沈黙を破るように突然小島が笑い出した。

「淳、最っ高に男だね」

そして真顔に戻ると、おもむろに立ち上がり二年生に向かって「ご迷惑をおかけしました」と神妙に頭を下げた。すると渡辺も立ち上がり、頭を下げている小島の前へ進んだ。決定的な何かが起こってしまうのではないかと周りが緊張に包まれる中、ニカッと笑った渡辺が右手を差し出し「こっちも悪かった」と声をかけた。頭を上げた小島もニカッと笑い、たまにはこういうのもアリだよね先輩、と言って渡辺の右手を握った。もう二度とゴメンだね、と返した渡辺が二年生のほうを振り返り、「さー、練習しよ」と晴れ晴れとした声で呼びかけ、場の空気は一気にゆるんでしまった。熱い思いをぶちまけた光田も村田も、苦笑いするしかない展開だ。

どうしていいかわからない空気に、大きなあくびが響き渡った。「なんじゃあこりゃあ」あくびをしながら虚空に向かって問いかける広田の声は、その場にいた全部員の声だった。

その後前田智子による相変わらずの優等生的な総括をはさみ、「地区音の乱」は終結し

た。

拓也と山上、そして上条の三人が楽器を取りに部室へ向かうと、独り黙々と練習に励んでいた中本淳がニヤリとしながら呟いた。

「お、ようやく終わったかクソ会議」

終わったかじゃねえよ、と上条が蹴りを入れる真似をする。さきほど烈火のごとく叫んでいた中本は、今はいつものように軽いノリである。おそらくあれは半分演技だったのであろう。まあ死人が出なくてよかったよ、と山上も他人事のように声をかけ自分の楽器を手に取る。面白いもん見せてもらった、とケースから楽器を取り出しながら拓也も声をかけた。一応、中本が退出した後の経過を山上が伝えると、

「まあ何はともあれあんなことで時間使ってる場合じゃねえからな。俺この曲は結構気合入ってんだよ」

そういって中本が指差した楽譜はヴァンデルロースト作曲の「フラッシング・ウィンズ」という曲であった。

「俺もこの曲はしっかり仕上げたいな。初めて吹奏楽にやる気出てきてんだよ」

と拓也も同調する。

「アタマのファンファーレとかかなりキツイけど、いい曲だからな。やりがいあるよ」

「サックスだって結構重要だと思うぜ」

山上と上条も、この曲には少なからず燃えている。

「明日からまたゲルマン合奏だからよ、つつかれねえように今日のうちに課題は全部やっつける」

そう宣言すると中本はホルンと譜面を持って部室を出た。

あいつ意外とマジメなんだな、と上条が呟くと、マジメになっちゃったなあ、と昔を懐かしむように山上が答えた。後から続々と部員がやってきたので、残された男衆三人も手早く部室を出て教室へ向かった。そして各々、いつになくマジメに練習に励んだのであった。少しづつ彼らも変わって来ようとしていた。それだけの魔力が、「フラッシング・ウィンズ」にはあったのかもしれない。

その日は二人とも街のほうへ用事があったので、珍しく拓也と戸崎聡子は一緒に帰ることになった。二人とも自転車を押して川沿いを歩いていく。

「いやーそれにしても今日のミーティングはきつかったなあ」

「ほとんど寝てたくせに」

「えっばれてた？池田君直伝の寝てないように見せる寝方で寝たんだけど」

「いやバレバレでしょ、ってか池田君って誰」

「池田君はさておき戸崎は正直どう思った」
「なにが」
「光田と村田がなんか熱く語ってたじゃん」
「あーまあ気持ちは分からないでもないけど」
「よくも周りの先輩の音とかチェックしてるよなって感じだったよ、俺わかんねえから」
「まあねえ人それぞれ思うところがあっていいんじゃない」
「戸崎は先輩たちのことどう思う」
「別に不満はないよ、それぞれ個性的な音しててていいと思う。テクニックは練習すればそのうち身につくしね」
「ははあ」
「よくわかってないでしょ。例えばトロンボーンだったら、あっちゃんが一番ウマイとは思うんだけど」
「あっちゃんって誰だ」
「宮内篤子（みやうちあつこ）」
「あっちゃん…」
「そこ食いつかなくていいから。で、あっちゃんは確かに上手いんだけど小百合先輩にはあっちゃんにはない魅力があるわけ」
「美人だ」
「そういうことじゃなくて」
「ははあ」
「小百合先輩の魅力はあの柔らかい音色なわけ。それこそ性格が音に出るっていうか。それに比べるとあっちゃんのはちょっと音が硬い」
「へえ」
「素子先輩もテクニックはそんなにないから細かい音符は本番直前にならないと仕上がらないけど、なんだかんだで仕上げてくるでしょ。それにあの人は長いメロディを歌いこむときにすごく素直で綺麗な音を出すでしょ」
「女王に素直な音が出せるとは知らなかった、そもそも素直な音ってのがわからんが」
「まあ初心者だしね、わからないか」
「俺だってそれなりにわかってるよ、広田先輩と俺の音が違うのは分かる」
「そう、それ！それがとても重要なわけ」
「同じ音のほうが音が揃ってていいんじゃねえの」
「それじゃつまらないでしょ。皆に個性があるから面白いんだよ」
「大人だのう、戸崎」
「伊野君も大人になりなさい、楽しいよ周りの音聴くのは。低音の特権だからね」
「低音の特権」

「楽譜が簡単じゃん結構。周りを聴く余裕は他のパートよりあるでしょ。それに音楽作りの基礎は低音からなんだよやっぱ」
「低音ってオマケみたいなもんだと思ってたけど」
「伊野君の好きなロックだってベースが抜けたら音スッカスカじゃない」
「ああ確かに、ジョンスペンサーとか聴くと違和感あるもんなあ」
「そのジョンなんとかは知らないけど、そういうこと。で、佐知子先輩とか素子先輩とか、メロディが多い楽器に吹きやすい空気を作るのも低音の仕事なわけ」
「ええっそうだったのか、責任重大だな」
「だから面白いんじゃん低音」
「なんだか難しいけど、フラッシング・ウィンズに当てはめるとなんとなくわかるな」
「あの曲は本当に良く出来てる」
「そうなのか」
「そうだと思う」
普段寡黙に練習に打ち込むことが多くあまり自分のことを話さない戸崎から、彼女の考えを聞けたことに拓也は少し驚くと同時に嬉しさを感じた。今日はなんだか色々ありすぎた日だったが、明日からまた新しい目線で部活を楽しめそうな気がしてきた。
その後も部活の話からクラスの話、とりとめもない話をしながら街へ向かって急な坂を登った。坂を登りきった頃には、夕日が沈んで街は少し暗かった。駅の近くの賑わったところで二人は別れた。

少し時間はさかのぼり、戸崎と拓也が珍しく話しこんでいた頃、こちらも同じように一緒に下校する一年生二人の姿があった。ユーフォニアムの小野田由里とフルートの鈴木（すずき）里美（さとみ）である。
二人は学校からも街からも遠いところに住んでいて、同じバスに乗って帰る。今は学校近くのバス停でバスの到着を待っているところだ。
「今日は大変だったねえ、ちょっと怖かったよ」と一日が終わって心底ホッとしたように小野田が話しかける。
「そうだね」と答える鈴木の声は聞こえるか聞こえないかの境目といった感じで非常にか細い。おしとやかというよりは何かにおびえたような感じの子である。背は小野田よりも随分と高く、動物にたとえるならキリンだ。
「あたしは初心者だしユーフォの先輩もいないけど、広田先輩とか緒川先輩がよく一緒に練習してくれたり教えてくれたりするから、光田さんたちからあんなに批判が出てビックリだよ」
「私は驚かなかった、批判されて当然だもの」
えっ、と意外な答えに小野田が鈴木を見る。小野田はかなり背が低いので、思い切り見上

げるような形になった。
「私だってもっと上手くなりたいけどプロの先生に教えてもらう時間も取れないしお金もないし、的場先輩がもっと引っ張ってくれないと困るな」
「そうなんだ」
「だから光田さんと村田さんの言ってることはよくわかるな、小島さんのはただの好き嫌いだと思うけど」
「里美ちゃんがそんな風に考えてたとはねえ、あたしゃ気づかなかったよ」
なんとなく喋り方がちびまる子ちゃんに似ている小野田であったが、鈴木里美は口元にささやかな笑みを浮かべただけで遠くを見ている。
「でも私はあの人たちみたいに面と向かって先輩には言えない」
「里美ちゃん優しいから」
「臆病なだけだよ」
「いやそんなことはないよ、アンタは芯のあるそりゃあしっかりした子だよ、うんうん」
「そんなことないよ、本当に。あの人たちがうらやましかった、あんな風に言えるなんて」
「うーんでも言い方ってもんがあるよねえ」
「それはそうなんだけど」
悩める二人の乙女の前に、キィと音を立ててバスが止まり、二人はそれに乗り込んだ。けやき坂高校は公立高校ということもあり五時には学校から出なくてはいけない。この時間のバスは比較的空いていて、今日も二人は並んで座ることが出来た。
「それにしてもあれだけのものを見せられると、来年は彼女達が中心になっていくのかなって気がするよ」
「そうかもね、でも中本君も凄かった」
「そうだねえ、男子も結構中心的になっていくかもねえ、伊野君はちょっと違うけど」
「伊野君って男子の中ではおとなしいほうな気がする」
「そんなことないよ、パート練習のときとかずっと喋ってるからねあの人。全然練習しないんだからあたしゃ心配だよ」
「でも音すごく良くなってるよ、初心者だとは思えないくらい」
「そうなんだよねえ、要領がいいのか才能があるのか、気がつくといい音で吹いてるんだよ」
「的場先輩から聞いたんだけど、前に先輩が昼休みに練習しようと思ってお弁当食べた後に部室に行ったんだって」
「うん」
「そしたら伊野君と上条君が二人で練習してたんだって」
「えっそんなことしてたのあの人たち」

「だから伊野君も上条君も、真面目なんだなあって思って」
「いやーまさかそんなところで練習してるとは知らなかった、そりゃあ放課後練習しないわけだよ」
「あんまり頑張ってるのを見られたくないタイプなのかもね」
「思春期だねえ」
彼女達もどっぷり思春期なのだが、小野田は自分のことは棚に上げた。やがて鈴木里美が降りるバス停が近づいてきた。
「里美ちゃんはこれからまた練習？」
「うん、明日合奏だし」
「親とはどうなったの？」
「前ほど言われなくなった。コンクールも見に来てたし、応援してくれてるみたい」
「それは良かったねえ、里美ちゃんも伊野君たちに負けないくらいこっそり練習して、どんどん上手くなっちゃえ」
「ありがとう、由里ちゃんも一緒に頑張ろうね」
「まっかせなさい」
優しい笑顔を浮かべて鈴木里美はバスを降りた。降り際にじゃあまた明日、と言ったように聞こえたがエンジン音にかき消されるくらいの音量だったため小野田由里には本当に彼女がそう言ったかどうか確信はなかった。でも多分言ったんだろうな、里美ちゃんはしっかりしてるから、そう思いながら窓から手を振る小野田を乗せて、バスは再び走り出した。

しっかりとフルートを胸に抱いて、鈴木里美はうつむきながら家路を急いだ。

翌日から、久々に田口の指揮による合奏が始まった。いつもは合奏時間前に現れる田口だが、この日は十分ほど遅れて音楽室へ入ってきた。表情は暗く、最前列に座る的場佐知子などに先生大丈夫ですか、と声をかけられるほどに目に見えて憔悴していた。大丈夫だよ、と答えてからゆっくりと深呼吸をし、スコアを指揮者用の譜面台に置いたところで前田から起立、と号令がかかった。
指揮棒を構えたときにはすでに田口の顔から疲れは消えている。イチ、ニイ、サン、シという田口の合図とともに、「フラッシング・ウィンズ」の合奏が始まった。
合奏を進めるにつれ、大きな変化が田口に伝わってきた。ついこの間までは、いつものけやき坂だったのに―今、田口の目の前で演奏する生徒一人一人の集中力はこれまでに田口がこのバンドで経験したことがないものだった。相変わらず小節ごとに指示を出すねちっこい田口の指揮にも、グイグイと付いてくる。何があったか知らないがこれはいいな、と思いながらも田口の耳はどうしてもある生徒の音を拾ってしまう。
宮内篤子。

一年生ながら入部当初から二年生を凌駕するテクニックと、何よりそのズバぬけた音楽的センス。ここまで自分と「ハマる」生徒は今まで見たことがなかった。全国大会に出てくるような強豪校にも、ここまでの人材はそうそういない。彼女をどうするか。彼女の音を聴いてからこれまでずっと悩み続けてきたが、彼女のためにももう先延ばしには出来ないと思った。

「じゃあ今日はここまで。みんな今日はどうしたんだ？凄く良かった」

珍しく飛び出した田口からの誉め言葉に、各々目を合わせて思わずニカッと笑った。中本にいたっては小さくガッツポーズまでしている。

「おいおい皆して何ニヤニヤしてんだ、明日からもこの調子でビシバシ行くぞ」

望むところだ、と勢いあまって答える中本に、おまえはタンギングの練習をしろ、と声をかけながら田口はその日の合奏を終えた。

合奏終了後、楽器の片付けのタイミングを見ながら、田口は帰ろうとする宮内篤子に声をかけた。

「なんですか」

「ちょっと社会科準備室まで来なさい」

「先生それはまずいんじゃないでしょうか、奥さんいるのに」

「何を妄想してるんだオマエ。そういうんじゃない、大事な話だ」

どうも冗談ではなさそうだ、と宮内は田口の後を付いて行った。

話は今年の四月に遡る。体験入部期間にも関わらず、早々と何人かの生徒が吹奏楽部への入部を希望していた。全員が、中学校または小学校から吹奏楽を続けている経験者だった。その中の一人が宮内篤子だった。

宮内は小学校からトロンボーンを始めた。小学校には吹奏楽部はなく、代わりに金管クラブがあった。いわゆる英国式とも呼ばれるブラスバンド・スタイルの編成だった。ブラスバンドにも造詣の深かった田口は彼女のその経歴に興味を持ったが、何よりも惹かれたのは彼女が生み出す音楽そのものだった。少し硬いかな、という音質ではあったが、音楽の場面に応じてそれは柔軟に色を変えていく。まさに田口がやりたい「色彩豊かなグラデーションのような一連の音楽」を目指すのに、どうしても欠かせない人物だと確信した。

しかしそのような逸材がなぜ万年銅賞のけやき坂高校吹奏楽部に入ったのか。一般バンドで大人と一緒に演奏するという選択肢もあったし、何よりプロの先生について音大を目指してもいいくらいだ。そのようなことを、梅雨のある日、田口は本人に尋ねてみたことがある。宮内の答えは明確だった。

「私がここに入りたかったのは、田口先生がいるからです。先生がいるからこの高校を受験しました」

田口がまだ若く、けやき坂高校の教員になる前のこと。彼は地域の一般バンド「カラーズ・ウィンド・アンサンブル」で指揮をしていた。そのバンドには、地域の高校を卒業したばかりの若者が、大学の吹奏楽部と折り合いが合わずに流れてくることが多かった。それだけにクセのある者が揃っていたが、若い割に実力は申し分なく、ただの地域のバンドでは収まらない活動を展開していた。田口指揮の元、全国大会まであと一歩のところまで迫ったこともあった。

そしてそのバンドが、当時小学生三年生だった宮内篤子の学校へ「音楽教室」と銘打って訪問演奏をしに来たことがあった。宮内が金管クラブに入って間もない頃である。

宮内篤子は、クラシック音楽好きの両親に一人娘として育てられた。どうやら両親は二人とも吹奏楽やら管弦楽やらを経験してきたらしく、家にはピアノ、トランペット、クラリネット、チェロがあった。幼い頃の篤子が最も気に入ったのは、たまの日曜日に父が弾いてくれるチェロだった。父親は、弦楽器が好きならヴァイオリンを習わせようかと考えたが篤子は嫌がり、結局ピアノを習った。それは中学校を卒業するまで続いた。

さておき篤子は小学校で金管クラブに入り、形の面白さでトロンボーンを選んだ。高校時代にトランペットを吹いていた父親の手ほどきで、篤子のトロンボーンの腕前はみるみる上昇していった。また親の影響で沢山のＣＤを聴いて育ってきた篤子にとって、当時の金管クラブの顧問の合奏は、やや退屈なものだった。

そんな中やってきた田口のバンドの演奏は篤子にとって衝撃だった。小学生にもわかるようなポップスを中心に演奏をしてくれたのだが、一曲、その年のコンクールで演奏したというラヴェルの「ダフニスとクロエ」が演目に入っていた。そしてその曲の演奏にその音楽に、篤子はもっとも衝撃を受けた。楽器を始めたばかりのややクラシックオタクの小学校三年生という何ともヘンテコな人生を歩む篤子にとって、田口の指揮棒から紡ぎだされる音楽は、光り輝いて見えた。そして何より田口そのものが輝いて見えたのであった。

これが二人のファースト・コンタクトであったが、もちろん田口はそこに篤子がいたなどとは知る由もなかった。その後も篤子は田口が指揮するそのバンドの演奏を何度も聴きたがったが、翌年、そのバンドの定期演奏会に行くとそこにはもう田口の姿はなかった。

そして中学校で吹奏楽部に入った篤子は、友人と聴きに来ていた吹奏楽コンクールの地区予選、高校の部において数年ぶりに田口の姿を目撃する。あの時と違ってバンドは驚くほどにレベルの低いバンドであったが、それでも田口の指揮棒からは彼だけの音楽が鳴っていた。それを篤子は客席で感じ取り、泣いた。

「私がここに入りたかったのは、田口先生がいるからです」

それはつまり、篤子にとって「あの」田口と「あの」サウンドを紡ぎ出したいという、強い意志の現れだった。

ひとしきり昔話を聞いた田口は、そうかあのときの小学生の中にそんな風に音楽を感じていた子がいたとは、と驚いたものだった。そして彼女の逸材っぷりにも納得であった。彼女をここまで導いてきたのは、過去の自分だった。そう思うと彼女の人生も他人事とは思えない。

社会科準備室には他の教員は誰もいなかった。けやき坂高校の社会科教員は年寄りが多く、特に部活の顧問もすることなく生徒指導をすることもなく残業をすることもなく、放課後はサッサと帰ってしまう。

普段は日本史の教員が使っている椅子を宮内篤子に勧め、田口は面と向かうように自分の椅子に腰掛けた。

「なんか…静かですね」

「もうすぐ下校時間だしな」

お茶でも飲むか、と立ち上がりかける田口を、結構です、と宮内が制する。

「落ち着かないのでもう結論から教えてください、何の話でしょうか」

「言う前に、約束だ。今から言うことは、本来生徒に言ってはいけないことだ。だから絶対に誰にも言ってはいけない」

「家族にもですか」

「宮内のご両親なら問題ないだろうが、決して他の人には広まらないように」

「わかりました」

「もうひとつ。『なんで』と言わないこと」

「う、わかりました」

「そして最後の約束だ。この話を聞いても、決して抗議しないこと」

「それはわかりません」

「もう決まっていることなんだ。だから抗議しても変わらない」

宮内の顔がキュキュ、と引き締まった。目が釣りあがって怒っているようにも見えるが別に怒っているわけではない。

そして田口は禁を犯した。

「俺は今年でこの学校を離れなくちゃならない」

「えっ」

あまりに意外な出来事に、篤子は頭が混乱した。ずっとこの人を追いかけてきたのに。やっと一緒に演奏できたのに。もう終わりなの？たった一年？小学校からずうっとこの人の指揮だけを追いかけ続けて、たったの一年だけ？

長い沈黙が流れた。気づくと篤子は中学生の頃のように涙を流していた。

「嫌だ…先生、嫌だ」

「申し訳ないがこれだけはもう変えられない。先生はそういう仕事なんだ」
「嫌です、嫌です」
「宮内の気持ちは、分かってる。だから本当は生徒に言っちゃあ駄目だったんだけど、伝えておくべきだと思った」
「私は…どうすればいいんですか…」
「冷たく聞こえたらすまないが、それは俺には決められない」
「それってひどくないですか、だったら何も言わずにいてほしかった」
「それじゃあ駄目なんだよ。オマエは俺を慕ってこの部活に入った。でも離れなくちゃあならない。俺がいなくなった後、オマエには部活がどう見える？」
「何も残らないですよ。何も残らないです」
「そうじゃないんだよ宮内。オマエには沢山の仲間がいるじゃないか。そのことに早く気づいて欲しい。だから早く伝えたんだ。もう一度周りを見渡して、皆と一緒に部活を続けていって欲しい」
しばらく黙ってうつむいていた宮内は、搾り出すような声で無理だと思う、と言うと勢いよく立ち上がり、涙を拭いながら社会科準備室を出て行った。
無理じゃないよ、自分次第だ。残された田口はそう心の中で呟いてインスタントのコーヒーを淹れた。心の奥底を映し出したように暗い液体の表面に、自分の顔が見える。俺の顔はどんな顔に見えていたんだろう、と思いながら迷いを払うようにグイッとコーヒーを飲んでみた。今まで飲んだどのコーヒーよりも渋く、苦かった。

その後けやき坂高校吹奏楽部は顧問田口のもとメキメキとサウンドを向上させていき、部員の間にも自信が見え隠れしてきた。宮内篤子も、何事もなかったかのように練習に参加し続けた。胸の内にどのような葛藤があったかは計り知れない。
そして気づけばあっという間に十一月二十三日、地区音の本番の日がやってきた。会場は多摩教育センター。ほかの地区がプロでも使うような大きなホールで演奏する割にはこちらは少し見劣りがする会場であるが、地区のレベルを考えれば妥当である。
けやき坂高校の演奏順番は三番で、相変わらず朝が早かったが、コンクールでの出来を考慮すればこれもまた妥当であった。第七地区の学校の殆どは、それぞれにカラーがあるにせよ演奏レベルの点ではどんぐりの背比べである。そんな五十歩百歩の状態で、順番が後ろになるにつれ演奏の上手いバンドになるよう配置しようとしたのだから運営側も大変だったであろう。
夏のコンクール同様、特に期待のこもっていない拍手に迎えられ、けやき坂高校のステージが始まった。
しかし一曲目の「フラッシング・ウィンズ」が始まった途端、客席がどよめいた。けや

き坂ってこんなに上手かったっけ、と今年から瀬野川高校を指揮している山之内（やまのうち）は驚きを隠せなかった。あのコンクールからたった三ヶ月でここまで上達させるとは、田口浩之、噂に違わぬ名指導者であることだなあと勝手に感服したものである。

山之内は三年前から瀬野川高校の教員として勤めていたが、正顧問となって吹奏楽部の指揮を始めたのが今年からである。指揮者としての能力は低いが、学生時代からこれまで数々の吹奏楽の演奏を聴き倒してきたマニアックリスナーであり、その知識は地区内随一とも言われている。そんな山之内をして感嘆せしめるほどに、けやき坂高校の成長は著しかった。

続く二曲目のボサノヴァ・ナンバー「イパネマの娘」も無難にこなし、けやき坂高校の出番は終わった。

コンクールの際には他の団体の演奏を聴く部員も少なく、中には表彰式までホールの外でしゃべり続けていた一年男子のような輩もいたが、今回は誰一人として欠けることなく、とあるバンドの演奏を聴いた。

そのバンドの名は、全国に轟いていた。第七地区だけではなく東京都代表レベルのバンド、私立七尾高等学校吹奏楽部である。この日の出番はもちろん最後、大トリを務めていた。

この地区音が始まる前から、けやき坂高等学校吹奏楽部の一年生の間でも七尾高校の噂は幾度となく話題に上った。顧問の田口からも、上級生からも、口すっぱく「必ず七尾高校の演奏を聴くこと」と言われていたからである。その演奏を聴くと、鳥肌が立ち、思わず涙が流れてきて、自分達の力量不足を痛感するあまり退部者が続出するという。

もちろん七尾高校の存在はどの部員も知っていた。けやき坂高校を受験する際の「すべり止め」としてほとんどの生徒が受験していたからである。

しかし「全国大会」の存在すら知らない者が大半をしめる一年生の中で彼らの演奏を聴いたことのある部員はほとんどおらず、退部にまで追い込まれるほどショックを受けるなどとそんなバカな、と彼らは半信半疑であったが、いささか興味は沸いた。結果として全部員が七尾高校の出番を今か今かと待ち望んでいたのである。

そしていよいよ七尾高校の出番となった。客席は満員で、立ち見まで出る始末である。七尾高校の演奏が始まるまでおとなしく他の学校の演奏を聴くほど良く出来た生徒ではなかったけやき坂高校の部員達は、ほとんどが客席の一番後ろで立ち見をするハメになった。

七尾高校の一曲目はけやき坂高校と同じヴァンデルローストの作品、「スパルタクス」。紹介アナウンスが入り聴衆が固唾を呑んで見守る中、「ドシャァン」という音とともに演奏が始まった。

いきなりの大音量、そして一気に場の空気を変えるエキゾチックなメロディ、そして何

よりその演奏レベルの高さにけやき坂高校吹奏楽部の一年生は一人残らず衝撃を受けた。
曲が進むにつれ、グイグイとその世界に惹き込まれていく。壁にもたれて半ば期待せずに腕組みをしながら聴いていた拓也も、手のひらに汗をかいてしまうほどの迫力だった。
隣に立つ山上を見ると、なぜか口を半開きにして阿呆のような顔をしている。どうやらトリップしてしまったようだった。おおよそ十五分にもおよぶ演奏が終わると、会場からは大きな拍手が送られた。その拍手を遮るかのように間髪入れず演奏されたのはラテン・ナンバー「エル・クンバンチェロ」。
トランペットがこれでもかという大音量で咆哮すると、会場の熱気は頂点に達した。「スパルタクス」を凌ぐあまりの迫力に、先ほどまでトリップしていた山上は今や溢れ出る涙の海に溺れそうになっていた。あの山上がである。こいつにも感情があったんだな、と思いつつも拓也も胸の奥から押し寄せてくる興奮の波に、思わず叫びだしそうであった。
そして熱気を保ったまま、曲はフルート・ソロへとなだれ込む。聴いただけで「これは難しい」とフルート以外の楽器奏者でも分かるほど、テクニカルなソロだ。それをおそらくまだ二年生であろうと思しき女子生徒が涼しい顔をして吹いている。これほど涼しい顔で楽器を吹く人間には、けやき坂高校では数百年に一度くらいしか出会えないだろう。
しかもとてつもなく凛とした美人である。拓也の目だけでなく、緒川小百合以外の女性は目に入らないであろう上条の目をも釘付けにするほどであった。
とにもかくにも七尾高校は演奏、演出、すべてにおいてパーフェクトであった。文化祭での上条の舞など屁の極地である。けやき坂高校は一年生だけでなく二年生も含め、多くのものが涙やら涎やら鼻汁やらを流しながら帰路に着くこととなったのである。

会場がけやき坂高校のほとんどの部員が住む地域から遠く離れていたこともあり、奇しくも集団下校のような風景になった。顧問の田口は他校の先生方との懇親会とやらに顔を出してくるらしく、一緒には帰らなかった。
帰りの電車内、やはり会話の中心は七尾高校の演奏である。そしてやはりというかなんというか、自信を失いもう楽器を辞めると言い出す一年生を二年生がなだめるという構図になっていた。
そんな中、さほど興味がなさそうなのが宮内篤子である。彼女にとっては、七尾高校は確かに出だしこそ衝撃は受けたが別段良いバンドだとも思われなかった。しかしそういった事は口には出さない。正直頭の中はそれどころではなかったからだ。
そんな篤子の胸中を知ってか知らずか、いや知る由もないのだが、自然と会話が篤子の話になっていった。きっかけは中本の「俺ら誰もあのバンドに入れねえよな」というさりげない一言だった。それに広田が答えた。
「一年だけじゃないよ、うちらも誰もあのバンドには入れないって。あ、でも一人入れる

人いるよ」
「誰ッスか？」
「宮内篤子様」
急に自分の名前が出され、篤子はしばらくキョトンとしていたが、我にかえると「そんなことないですよ、それに入れたとしても入りません」とすました顔で言ってのけた。
それに対し周りからはおお、と何のおおなのかわからないおおが発せられたが、すぐに広田が抱きついてきた。「宮内さん、アンタそんなにけやき坂を愛してくれてるのだね！」いや違うそうじゃないと思いつつも口に出すわけにはいかず、篤子はただアハハと乾いた笑いを返すしかなかった。
街の駅に着くと、二年生主催で急遽打ち上げを行うことになった。「アタシ達も頑張ろう！」と七尾高校におおいに刺激された渡辺素子の発案で、駅近くのファミレスに行くことになったのだ。
ほとんどの部員は従ったが、今夜は早く家に帰りたかった宮内篤子と、早くＴＶゲームの続きをしたかった伊野拓也は打ち上げには参加せず、帰宅することにした。

二人とも駅に自転車を置いていたので、途中まで一緒に帰ることにした。拓也と篤子は、戸崎聡子と同様に同じクラスメイトでもあるので特に会話に困ることもない。併走しながら帰るうちに、ところでさ、と拓也が急に話題を変えた。
「ん」
「宮内ってやっぱ来年部長やったりすんの」
「はあ？全然考えたことない」
「いやあさすがの俺でも宮内がうちの学年で一番上手いってのはわかるしもしかしたらと思って」
「上手い人が部長やるわけじゃないよ」
「へえ」
「アンタだって中学のとき何か部活やってたんでしょ、何となくわからない？」
「俺は中学んときは帰宅部なの」
よくそれで吹奏楽選んだね、と呆れたように返しながら篤子は少し笑った。しばらく二人は無言で、拓也の自転車のキイコキイコという音がやけに響いていた。やがて拓也がまた急に問いかけた。
「もしかして宮内、部活辞めようと思ってない」
この男は普段ホゲエとしているくせに妙に感が冴えているな、と思いながら「だったらどうする」と篤子は逆に質問してみた。
「どうもしない」
「どうもしないのかよ」

「引き止めたいんだけど俺の座右の銘は人生色々、だからなあ」
「それって座右の銘なのかね」
「わからん」それっきりまた会話は途絶えた。
まあ残ってくれたら心強いよ、と言って拓也は自宅の方向へハンドルを切り、二人は別れた。去ってゆく拓也にじゃあね、と声をかけて、篤子もまた自宅へと急いだ。

篤子が家に帰ると、母が食事の支度を終えかけたところだった。ちょうど良かったわねえ、と言いながら食器に料理を盛り付け、テーブルへと運んでいく。
この日は日曜日だったので、父も家にいた。親子三人でテーブルを囲み、ちょっと時期が早めのシチューやら母の得意なカボチャの煮付けなどを食べた。今日はどうだった、という母の問いかけに、まあまあ、と返す。両親ともに娘の部活動に興味津々のため、食事中は部活の話に終始した。適当に会話を進めながら、篤子はいよいよ心を決めた。
食べ終わってすぐにリビングのソファでくつろぎ始めた父に向かって「ちょっと大事なご相談があるのですが」といやにあらたまって言う篤子に、「なんでございましょうか」と言いながら再び父はテーブルに着いた。「どうかしたの」と緑茶をずずず、とすすりながら母が心配そうに篤子を見つめている。
父と母を交互に見て、ふうう、と大きく息を吐き出し、篤子は口を開いた。
「転校したい」
母・恵子（けいこ）はすすっていた緑茶をぶばっと噴き出した。おいおいばっちい、いや熱い、などと暴れた父・博康（ひろやす）がバランスを崩し、うわあい、と椅子ごと後ろにぶっ倒れる。篤子は天を仰いだ。

会議は踊る、されど進まず

地区音が終わった翌日の月曜日。四月に行われる定期演奏会の選曲をまだ始めていないため、けやき坂高校吹奏楽部の練習は個人練習のみに終わった。二年生によると、毎年この時期はこの調子で個人のレベルアップに励むのだという。
他校の生徒は、この時期を使って二月に行われるアンサンブルコンテストのための練習をしているところも多いそうだが、けやき坂高校吹奏楽部は長年アンサンブルコンテストには出場していなかった。
たとえ出場したところで、個人技術の低いけやき坂高校では、人数が三名から八名ほどで演奏するアンサンブル形式ではとても人前で披露できるような演奏は望むべくも無かったからである。
顧問の田口も出たいやつは出ろ、くらいのスタンスでいるので結局誰もアンサンブルを

組むことはしなかった。今年も同様である。
そんな月曜日の練習終了後、部長の前田智子が一年生全員を音楽室にそのまま残らせた。何が始まるのかとそわそわする一年生の中で、山上がそろっと逃げ出そうとしているのを中本が止めたりしている。
「ええと、皆揃ったかな。はいではよろしくお願いしまあす」
何がよろしくなのか分からず、よよよよよろしくお願いしまあすとまばらな返事が発生する。
「地区音も終わったし、そろそろ定期演奏会の選曲に入らなければいけません。二年生が関わる行事はこれが最後になります」
これが最後、という言葉が意外と胸に刺さり、一年生の間に緊張が走る。
「そこで、今度の定期演奏会から、一年生にも運営を手伝っていただきます」
おお、ついに、とにわかに場が沸きあがる。
「一緒に定期演奏会の運営をしながら、代々受け継がれてきたけやき坂高校の伝統を皆さんに伝えていきます。そこでえ」
一年生全員が次の言葉を待つ。なんとなしに前田智子もこの状況を楽しんでいる様子である。
「来週の月曜日までに全ての次期役職を決めていただきます。一人一つは必ず役に就くこと」
といって前田はノートに手書きしたものを職員室でコピーしたと思しきわら半紙を全員に配った。そこにはけやき坂高校吹奏楽部の全てを司る各役職の名前が記載されていた。
部長、副部長、演奏会実行委員（選曲も含む）、会計、譜面管理、渉外、渉内、広報、木管セクションリーダー、金管セクションリーダー、パートリーダー、そして打ち上げ係。
最後の打ち上げ係だけは浮きまくっていたが、おそらく名だたる役職と肩を並べるあたり、相当重要な役職なのであろうと推測された。
そしてもう一つ一年生が気になったのが木管セクションリーダーと金管セクションリーダーだ。彼らが知りうる限り、そのような役に就いている二年生はいない。サックスの西堀友香が、これって何ですか、と前田に尋ねる。
「ええとこれはね、あなた達の代から新しく出来る役職で、文字通り木管と金管、それぞれのセクションを束ねる人。コンクールの時に田口先生が木管分奏とか金管分奏とかしたでしょう。あれを仕切る人ね。これは田口先生の発案なの。指揮者がいなくて合奏が出来ない日にもセクションごとに合奏が出来るように、って」
突然の重要な役職の登場に、誰も言葉が出ない。私たちだけで合奏なんて出来るわけないじゃない、と西堀は思ったが、何か胸の奥から沸きあがってくるものに心が躍り出しそうでもあった。

「じゃあ今から各役職の説明を始めるからね、ちょっと待ってて」
そういうと前田は音楽準備室へと走っていった。やがて、もう帰ったと思われていた二年生のうち何名かが前田の後をついて一年生の前へとやってきた。
部長の前田智子、副部長の渡辺素子、演奏会実行委員長の的場佐知子、広報の広田裕子、打ち上げ係の緒川小百合などである。
こうして改めて役職というフィルターを通してみると、先輩たちもなかなか先輩らしいなあなどと拓也が考えていると、じゃあまずは私から、と前田が部長の仕事について説明を始めた。そしてこの後、各役職について一時間ほど話が続いた。最後となった打ち上げ係の緒川小百合の話などは皆ほとんど話半分で聞いていた。
「と、いうわけでこれらの役職を来週の月曜日までに決めてきてね。ミーティングは学校の前の生涯教育センターで無料で会議室を借りれるから、その辺りでやってください。では解散」
前田の解散の合図で、二年生が一斉に帰宅を始めた。誰が部長になるのかねえ、などと言いながら無邪気にケラケラ笑って家路に着く彼らを、一年生は呆然と眺めていた。やがて山上に音楽室の鍵を預けて、前田までもが帰ってしまった。

「めんっどっくせえええええ」初めに口を開いたのは小島だった。続いて他の部員からも口々に嘆息が漏れる。ただただ面倒くささに打ちひしがれるばかりの部員に向かって、しばらく静観していた山上が「とりあえずやるしかないんだからおまえら落ち着け」と声をかける。その声に皆がようやく静まる。
「じゃあとりあえずさあ、皆それぞれやりたいこと考えておこうよ。で、とりあえずその生涯センターの会議室を押さえてきてよ上条」と村田が仕切り始めた。
まじかよ、なんで俺が部屋取りにいかなきゃいけねえんだよ、と渋る上条に「緒川先輩に君の活躍を伝えておこう」と拓也が耳打ちする。その瞬間、ハイ行かせていただきます、と上条は快諾し、今日のところは解散となった。
そうは言っても結局のところ上条が涙を流さんばかりの勢いで懇願するものだから、拓也と山上、そして中本も一緒に会議室を借りに行くことになった。女子ばかりの吹奏楽部にあって四人しかいない男子部員の結束は固い。

「おまえやっぱ部長やんの」
学校からの道すがら、中本が山上に問いかけた。やらん、と山上が短く答える。
「なんだおまえ本当に中学んとき部長だったのか」
と上条が会話に加わる。一応、とまた短く山上は答えた。じゃあ俺部長やろうかな、という中本に「おまえにはやらせない」と三人が猛反対をした。
「でも村田とかに仕切られるとめんどいな」と拓也が呟くと、残りの三人も異口同音に

「それはそうだ」と口を揃えるのであった。そう簡単には結論が出なさそうな学年であることだなあ、とそれぞれが感じながら、生涯教育センターにて明日の会議室を借りる申請は無事終了した。

まあこんな田舎でわざわざ会議室借りるのなんてけやき坂の学生ぐらいだよな、と上条が言うと、まったくだ、と残り三人も同意した。秋も深まった瀬野駅一帯は、なんとも寂しい空気が漂っていた。

翌日の練習終了後から、さっそく次期役職決めの会議が始まった。なんとなく、議長は山上になった。宮内篤子を除いた一年生全員が生涯教育センターに顔を揃えていた。宮内は今日、練習にも顔を出していない。

畳張りの、会議室というよりは長い宿直室のような会議室にテーブルを中心としてぎゅうぎゅうと詰めて全員が座る。

「じゃあ立候補制にしようか」と山上が始めると、いや推薦のほうがいいのでは、という意見も出てきた。結果、上の役職から順に推薦で行うことになったが、意外なことに村田や光田、さらに小島も部長に山上を推薦した。

「ちょっと待ってくれ、俺は部長はやらん」

「だって山上君中学校のとき部長やってたんでしょ」

「関係ない」

「関係なくはない」

「とにかく無理だって」

「推薦されてるぐらいだから無理じゃないってば」

「嫌だ絶対嫌だ」

女子三人に次々と攻め立てられながらも、山上城は堅固であった。結局、部長の選出は後回しにすることになり、それに伴い副部長の選出も後回しになり、パートリーダーは各パートの話し合いで選出することだけを決めて一日目の会議は終了した。帰りに翌日の会議室の借用申請をするのは男子四人である。

翌日水曜日、二日目の会議。本日も宮内篤子は欠席したが、それでも何とか話し合いの形だけは整えなければいけない。

前日もろくも崩れ去った議長制の反省を活かし、この日は一人一人順番に、自由な内容で発言していく形をとった。自薦でも他薦でも何でも構わないから何か思うところを言え、という形式である。

ところがそうはいっても宮内を除いても十七人もいる学年である。話が無駄に長い者もいれば、発言するまでにゆうに五分はかかる者もいたりして、結局全員の意見を聞くことは叶わず、あっけなくタイムアップとなり二日目の会議は終了した。合間合間に何かと口

を突っ込みたがる村田や光田の影響も大きかった。珍しく小島は一言も発さなかった。
帰りに翌日の会議室の借用申請をするのはもちろん男子四人である。何も決まらない会議の中で、会議室の借用申請をする担当だけはあっさり決まっているというのが不思議である。さすがに上条も借用書に慣れてきた。
宮内篤子が二日も練習を休んだので、同じクラスの戸崎聡子と伊野拓也にはあれやこれやと質問が飛んだが、授業には出席しているし体調も特に変わった様子もないので、明日戸崎が宮内本人に話をしてみる、ということで一応落ち着いた。戸崎も拓也も、なんとなく宮内篤子の行く末は分かっていたのではあるが。

翌日木曜日、三日目の会議の日。
授業の合間に、戸崎聡子は宮内篤子に話しかけてみた。
「あっちゃん知ってると思うけど、今部活で来年の役職決めやってる」
「ごめん、二日も休んじゃって」
「いつ来る？」
「もうほとんど決まりそう？」
「今日はまだダメだと思うよ。たぶん全部決まるのは明日。一応最終日だからね」
「じゃあ明日は顔出すよ」
「そっか」
「うん」
「あっちゃん後悔しない？」
思いもかけない言葉に、篤子は一瞬ギョエッとしてしまう。まさか伊野が野生の勘を働かせて色々と吹聴しているのだろうか。その伊野を見ると、ウォークマンでカセットテープを聴きながら寝ている。
「伊野から何か聞いた？」
今度は聡子が一瞬ギョエッとする番だった。なんだなんだ二人の間には何か隠し事があるのだろうか。まったくそんな素振りも見せずに実は付き合っていたとか。だったら伊野が何かを握っているのも納得なのだが。その伊野を見ると、「何聴いてるの」と近寄ってきたロック友達にお得意のロック談義をカマしていた。
「何も聞いてないけど」
「何も聞いてないわりには何かこう、鋭いね」
「野生の勘かも」
あんたも野生なのかよ、これだから低音族は、などと思いつつも篤子は驚きを隠せない。
人間、見られていないようでいてよく見られているもんだ。
「多分その勘は少しだけ当たり」
「少しだけ？部活辞める以外にさらにあるわけ」

「部活を辞めようとしてるのは当たり。まあまだ先輩にも誰にも言ってないからいつまでいるのか分からないけど。それ以外の部分は追々、機会があったらね」
ちょっとトイレ、と言って篤子はその場から立ち去った。これ以上話すことはないということだ。
「部活を辞める」と実際に篤子の口から聞くとやはり寂しいものがあるが、聡子はなんとなくそんな気がしていたので特に衝撃的、ということもなかった。ただなんとなくそのまま席に戻るのも嫌な気がして、珍しく教室で拓也に絡んでみた。
「ちょっと伊野君」
あまりに珍しい光景に拓也のロック仲間が思わず席を譲る。譲りつつも千載一遇のチャンスとばかりに「戸崎さんに話しかけられるなんていいなあ伊野、いやあ戸崎さんっていいよね、ロックな姉御って感じで僕は好きだなあ」とそれはもう饒舌に話しかけるのであるが、消えろバカ、と一言であしらわれてすごすごと他の仲間の元へと帰っていった。
「もてるねえ戸崎」
「あんたもふざけたこと言ってるとサックスのストラップで鼻フックするよ」
「すみませんでした」
「あっちゃんと話してみたんだけど」
「見てたよ」
寝てたうえにロック談義してただけだろ、いつ見たんだよ、と聡子は思ったがこの際まあいい。
「あんた、あっちゃんが辞めるの知ってた？」
「初耳」
「うそつけ」
「マジマジ。辞めるかなとは思ってたけど」
「なんかうそ臭いなあ。二人はどうなわけ？」
「どうって何が」
「だから付き合ってんのかっていう」
「なにそれ初耳」
「そういうときは初耳って使わないでしょ」
「マイブームなんだよ」
「考えてみればあっちゃんが初耳がマイブームの男と付き合うわけないか」
「なんだとう、それはわからんではないか」
「わかります」
「初耳だ」
疲れた。初耳がマイブームになってしまった伊野拓也がこんなに手強い相手とは。
「じゃあとにかくあっちゃんが辞めるってのは内緒にしてね。明日は会議来るらしいか

ら」

「それは…修羅場だなあ」

ほかのメンバーがキャインキャインと吼える様子が目に浮かび、拓也は露骨に嫌な顔をした。

「好きにさせてやればいいのによ」

「まああっちゃんを頼ってる人も結構いるからね」

宮内篤子が皆に「辞める」と言ったときどんな重苦しい空気が場を支配するのだろう。考えただけで気が滅入ってくる二人であった。

そしてその日の練習終了後、三日目の会議。宮内篤子の欠席については、戸崎から「体調不良のため」と伝えられた。「授業中から具合悪そうだったから」と拓也も話を合わせる。

皆が納得したかどうかは知らないが、何はともあれあと二日で全ての役職を決めなくてはならない。この三日目は、まずは役職ごとの立候補を募り、同時に立候補後には他の役職について誰かを推薦する、というシステムを採用した。初めからこうしておけばよかったのだ、というくらいの画期的な名案であるように思われた。システムの提案者はなんと小島である。さすがは小島、校則を破ってケンタッキーでアルバイトしているだけのことはあるなあ、と皆が感心したものだ。結果、スムーズに次々と各自の役職が決まっていくこととなった。

鈴木里美は譜面管理。理由は「それくらいなら出来そうだから」。

小野田由里も譜面管理。理由は「鈴木と小野田はワンセットだから」。

村田麻紀と光田恵は立候補により演奏会実行委員となった。最も多くの人員を必要とするこの役職にはその他に数名が加わり、上条英雄も参加することとなった。

本人は狂信的に愛する緒川先輩と一緒に打ち上げ係をやりたがったのであるが、周りがそれを許さなかった。なんといってもこの学年の重要なソリストである。選曲にも関わらせる必要があると皆が判断したのだ。

上条はことのほか嘆き悲しみ最後まで抵抗したが、盟友伊野拓也が「君の活躍は必ず緒川先輩に伝えようぞ」と言って打ち上げ係に就任したため、なんとか涙の洪水を友情と信頼のダムによって堰き止めた。

小島美紀は会計。部活に毎日顔を出すかどうかが不安ではあるが、アルバイト経験を買われた結果である。

戸崎聡子は渉内と広報を兼務した。渉内は立候補であるが広報は推薦である。実は美術の腕も学年随一で、先日の文化祭でも見事な油絵を披露した戸崎には、演奏会宣伝ポスターの絵を描く、という仕事が課せられた。

西堀友香は立候補で木管セクションリーダーとなった。ほかに誰もやりたがらなかったのでこれはなんとなしに決まってしまった。

そのような形でほぼすべての役職が決定した。残るは部長と副部長と金管セクションリーダーであったが、推薦された山上剛が部長職を頑なに拒んだため、この日は結局決まらなかった。山上の出方次第では中本淳が部長になってしまいそうな勢いである。

そして金管セクションリーダーには、全会一致で宮内篤子が推薦された。しかし本人の姿はないのでこれも決められなかった。

こうして三日目の会議は終わった。「あいつらと一緒に実行委員とか嫌だよう」とまだ駄々をこねる上条の尻を蹴り飛ばし、男子四人は明日、最終日の会議室を申請した。

「おまえもういいじゃん部長やれって」と中本がほとほと疲れた顔で山上に投げかける。

「嫌だ。絶対に嫌だ」山上も頑として聞かない。

おまえは部長にトラウマでもあるのか、と拓也が聞くと、山上はトラウマってどういう意味、と返してきた。そう、山上は決定的に馬鹿であった。しかしそれを上回るほわわん、とした雰囲気がこの学年の部長にふさわしい気もする。そんなことを考えながら「打ち上げ係ひゃっほい」と小躍りしてしまう拓也であった。

上条が「抜け駆けは断じて許さんぞ」と拓也をけん制した。拓也はもちろん抜け駆けする気はないが、状況によってはそうなってしまうかもしれないしこればっかりは緒川先輩の趣味の問題であって俺に惚れてしまう可能性も無きにしもあらずんば虎子を得ず、などと言いながらニヤニヤしていると上条が涙目になっていたので可哀想になってやめた。山上と中本がからかいながらも「大丈夫だって」と上条を慰める。四人の平和はいつまでも続くものと思われた。

翌日金曜日、四日目の会議。練習中に前田智子から一年生に最後まで諦めずにしっかりと考えてね、とエールが送られた。だいたいの話は伝わっているものと考えてよい。

そしてこの日、一年生が会議室に揃って間もなく、宮内篤子が予告どおり会議に現れた。初めこそあっちゃんどうしたの、具合大丈夫、といった声で会議室は騒然となったが、宮内篤子が遠慮がちに席に着くと間もなく静かになった。

皆、腹の内で部長は山上、副部長は中本、金管セクションリーダーには宮内、と決まっているので特に話すこともなく、沈黙が流れた。

やがて沈黙に耐えかねて山上が口を開いた。そういうところも部長に推薦されてしまう要因ではあったのだが、山上は気づいていない。

「宮内さん、皆で話し合って宮内さんに金管セク」

「わたし退部します」

「え」

山上が固まった。山上だけではない、その場にいた全員が固まった。戸崎と拓也は来た

ぞ、と心の中で身構え、俯いた。
「いや確かに宮内さん抜きで話し合いして金管セクションリーダー、ってさすがにそれはショックかもしれないけどあのその」山上はどうまとめて良いかわからずその後もあのそのを繰り返していたが、あのその言っていても仕方がないと気づき、やめた。
「ええと宮内さん、詳しく」落ち着きを取り戻した山上が問いかける。
「ごめんなさい、詳しくは言えないんだけど、事情があって辞めないといけなくなった」その事情を話してくれよ、と中本が突っかかる。
「別に皆のことが嫌になったとかじゃないの、ただこれはもう親とも話して決めたことなんだけど…」
なかなか言いづらそうな宮内の話の続きを、皆が固唾を飲んで待つ。
「わたし転校することにしました」
えええええ、うそおおおおお、なんでえええええ、と室内が驚きの叫びで満たされる。
さすがに戸崎も拓也もそこまで読んでいなかった。目を合わせ、
「おおおおまえ聞いてたか」
「いやいやいやいやあんたこそ」
「はははは初耳だあ」
皆の中にはあまりのショックに泣き出すものまで現れて会議室は混乱の極みに達した。それを見てあわてて宮内がなだめにかかる。
「ごめんね、ほんと急になっちゃって本当にごめんなさい、でももう決めちゃったの」
「いつ転校？」混乱の中でも意外と落ち着き払った山上が尋ねる。
「一応、四月からは別の学校」
「どこの学校に行くの」
「まだ決まってない。編入試験があるから」
「どこ受けるかは決まってるんだ」
「決まってる」
そうか、と言ったきり山上はしばらく黙考した。場はまだ少し混乱している。
「そんなんねえよ、何の相談もなしによ」中本がふてくされた様に吐き捨てる。
ごめん、と言ったきり、篤子もこれ以上話すことがなかった。いつまでも沈黙が続くかと思われた。やがて山上が静かに話し始める。
「みんなこれはね、しょうがないよ。本人も多分相当悩んだと思うし転校ってのはまた驚いたけど、それなりの事情もあるんだと思う。だから、送り出してあげよう。四月の定期演奏会には出られないから、もう一緒に本番を吹くこともないけれど」
皆それぞれ、山上の言葉を受け止めようと必死に考える。しばらくの静寂の後、そうだね、仕方ないね、などといった言葉がポツリポツリと出始めた。
　そしてそれまであからさまに不機嫌な顔をしていた中本が、自分の中で折り合いがつい

たのか、突然立ち上がった。
「だったらよ、辞める前にもう一度練習来いよ。最後に一緒に吹こうぜ！」威勢よく言い放ったあとに、と俺は思うんだけど、と周りの反応を伺う。
「賛成！」会議室に響き渡る大声で小島が呼応した。それに釣られて周りからも一斉にやろう、賛成、中本かっこいい、などと声が上がる。
ありがとう、と呟いて篤子は泣いた。

この会議の進行などから鑑みて、部長山上、副部長中本という体制が最も適していると誰もが判断した。中本に異議はない。山上だけがまだ承服しかねていた。
大感動のフィナーレの後だというのにまだ山上がウンと言わないのは余程のことがあるのだろうと思われたが、もはや拓也は限界だった。早く終わらせてモスバーガーを食べたい。
「皆山上を部長に推薦しているけどさ、こんだけ嫌がっているわけだよ」唐突に拓也は語り始めた。
「おお伊野、やっと理解者が」
「山上ちょっと黙ってて。でさ、みんなどうよ、ちゃんとコイツをフォロー出来るか？コイツはトラウマの意味も知らない馬鹿で、合奏中は眠るし、基本的にほわほわだぞ」
「でもこの四日間、いざってときにはリーダーっぽかったじゃん」と小島が反論する。
「いざっていうときにならないと動かないとも言える。淳だけじゃ無理だと思うよ。皆でフォローしていかないといけない。で、皆にこの馬鹿を背負うだけの覚悟があるかっていうことですよ」
「おまえそんなに馬鹿馬鹿言うなよ」山上が落ち込む。
「フォローしていくと誓える人、挙手！」落ち込む山上を放っておいて拓也が挙手を求めると、わらわらと手が挙がり、最終的には全員挙手をしていた。
「どう山上、これで」
ニヤリとしながら問いかける拓也を恨めしそうに見て、わかった、と観念したように山上は呟いた。
「ああ？聞こえねえんだよ部長さんよお」と声を張り上げる中本は満面の笑みを浮かべている。
「わかった、やります、俺が部長やりますってば！」と山上が叫び、室内はわっと喚声と拍手に包まれた。拍手の中で「言っちまった…」と肩を落とす山上に、涙を浮かべた宮内篤子がそっと声をかけた。
「ほんと、いい学年だと思うよ」

結局、これといった該当者がなく、勢いに抗う気力もなかったこともあって、空席とな

ってしまった金管セクションリーダーも山上が務めることになった。

これを以って四日間続いた会議は終了し、次期役職が全て決まった。もう会議室の申請をする必要もなくなった男子四人は、打ち上げと称していつものように瀬野駅そばのモスバーガーで猥談を繰り広げた。

週明けの十一月二十九日、一年生各役職の決定報告とともに、宮内篤子の退部が、上級生、そして顧問の田口浩之にも認められた。田口は宮内に本当にいいのか、と尋ねたが、晴れ晴れとした顔の宮内を見ると、引き止めることは出来なかった。

退部が認められた翌日、宮内篤子がおよそ一週間ぶりに楽器を持って音楽室に現れた。その日はいつもの個人練習は一旦中止になり、急遽一発勝負の合奏が始まった。本番同様の合奏で、途中で指示が入ったり演奏を止めたりすることはない合奏だ。

宮内篤子と過ごす最後の四分間。田口が指揮棒を降ろす。低音とティンパニによる導入から、高らかにファンファーレが鳴り響く。観客も誰もいない、いつもの音楽室で、このバンドにとって最後の、そして最高の「フラッシング・ウィンズ」が始まった。

第十七回定期演奏会（上）

宮内篤子が部を去り、十二月に入って間もなく、定期演奏会の準備が始まった。今年の定期演奏会は四月六日の土曜日に行われる。入学式の二日前、始業式の三日前である。

まずは年内に楽譜を一通り演奏してみる、ということを目標に、準備は演奏会実行委員による選曲から始まる。本来であれば演奏会のコンセプトなども出したいところではあるが、いかんせん今のメンバーにそこまでの知恵はなく、ただ演奏したい曲を皆で持ち寄るにとどまっている。

けやき坂高校の定期演奏会は毎回三部構成で行われている。また比較的本番まで日程の余裕があることも手伝って、演奏会の最後には管弦楽の大曲を吹奏楽用に編曲した、尺の長い曲が演奏されることが多かった。

いつの頃からこのような構成になったのか現役部員の知るところではなかったが、先輩達から伝えられた伝統に基づいて今年も三部構成、最後は管弦楽のアレンジ曲でいこう、と決まった。特に今年の二年生は例年に比べ保守的で、何か新しいことをしよう、という発想が基本的になかったので、まあこれで良いのであった。全曲譜面を正しく吹けるかどうかは二の次である。

新しく演奏会実行委員に加わることになった村田や光田、そして上条など一年生には実際のところさほど発言権はなく、主に第二部のポップス曲の選曲担当になった。

選曲の第一段階は、ひとまず多くの曲をリストアップしてみることである。一部と三部

のリストアップは二年生に任せ、一年生は部室の隅で埃を被っている「ニュー・サウンズ・イン・ブラス」というポップスCDを数枚、一通り聴いてみることにした。

適当に手に取ったCDを部室備え付けのCDラジカセで再生しながら、「これ全部聴くのしんどいなあ」と村田がこぼした。どちらかというとクラシカルな方が好きな村田にとっては結構な苦行であった。

反対にキラキラと目を輝かせて楽しそうに聴いているのが上条である。最近はチャーリー・パーカーにハマっていたりする上条は、クラシカルは苦手なのでこちらの方がしっくり来ているのだ。

「ハリウッド万歳とか二部のオープニングにいいんじゃない」

「泣かせるバラードも欲しいよね」

などと皆が意見を交わす中、気づくとポータブル・プレイヤーでCDを聴いていた上条が一枚のCDケースを持ってうずくまり、なんだかふるふるしている。

「ちょっと上条、大丈夫？」と村田が声をかけると、ゆっくりと振り向いた上条の顔には満面の笑みが浮かんでいた。顔のパーツがいちいち濃いうえにその全てが喜びに満ちているのだから気色悪いことこのうえない。ここはラテンの国か、と思いつつ、なんだよきめえな、と村田が毒づくと、上条は勢いよく立ち上がり、叫んだ。

「俺、この曲やる！」

てめ何勝手に決めてんだよ、と言いながら上条が持つCDを村田がひったくる。

「タカラジマ、やる！」

片言の南米人かおまえは、と心で突っ込みながら、確かに宝島は二部のトリにいいな、と村田も思った。加えて光田までもが「アタシもやりたい！」と叫びだしたので、これは先輩に提案してみようか、ということで皆の意見が一致した。

「宝島」は元々は日本のフュージョン・バンド「T-SQUARE」の曲だが、金管が活躍する華々しいラテン・ポップスに吹奏楽アレンジされていた。まさに上条カラーの選曲とも言える。

ただし難点として途中のサックス・ソロがあった。一聴しただけで「こんなん吹けるかい！」というとてつもなくファンキーなソロがある。それを誰が吹くのか。ソロは基本的に上条に任せているが、ここまでテクニカルなソロを吹けるとは、村田には到底思えなかった。かといって西堀ではパンチがないし、小島では上条以上に無理がある。

「ソロはもちろん、俺がやる」

村田の悩みを見透かしたかのように、上条が宣言した。

「いややるっったってこれは難しいよ。聡子ちゃんにこの曲だけアルト吹いてもらおうか」

「だから俺がやるって、大丈夫だって」

「いやほんとマジむずいよこれ、あんたフラジオとか音出ないでしょ」

「フラジオってのは知らんがとにかく練習するから」
フラジオというのは一種の特殊奏法で、通常よりもはるかに高い音を出すテクニックのことだ。フラジオも知らないやつに任せられるか、と村田は思ったが、これまで数々の不可能を可能にしてきた上条のミラクルを間近で見てきたこともあり、まあなんとかなるかもなあ、という気がしてきた。
「まあいいや、もし本当にこの曲やるって決まったら頼むよ」
村田からお許しを得ると、上条はヨッシャアアアと叫びながら脱兎のごとく部室を飛び出していった。どうやら気が済むまで校内を走り回る気らしい。残りの選曲は、他の部員で行うしかなかった。アホは放っておくに限る。

翌日、一年生と二年生の演奏会実行委員が顔を揃え、リストアップした膨大な曲の中から本格的な選曲に入っていった。
選曲は練習終了後、生涯教育センターの会議室で行われた。一年生はまたここかよ、と鬱々たる気持ちになったが、ほかに手ごろな場所もないので仕方がない。畳張りの会議室での選曲会は三日も続いた。もちろん会議室の申請は、上条が抜かりなく行った。
三日目には顧問の田口も参加した。なかなか演奏会最後のアレンジ曲が決まらなかったからである。
結果、田口の補助もあり今年の定期演奏会の曲目が決定した。一部は今年のコンクールで演奏した課題曲「アップル・マーチ」と、アメリカの人気作曲家アルフレッド・リードの「第二組曲」という二つの吹奏楽曲。
二部は「ハリウッド万歳」「ホール・ニュー・ワールド」そして上条が震えた「宝島」のポップス三曲。
そして最後の三部はコンクールでも「イーグル・クレスト」という曲を演奏したアメリカ人作曲家バーンズの「アルヴァマー序曲」で始まり、最後はショスタコーヴィチの交響曲第五番の終楽章を演奏することとなった。
アンコールはボズ・スキャッグスの「ウィ・アー・オール・アローン」、そしてジェリー・ビリックのマーチ「ブロックM」である。「ブロックM」は先日の地区音でも瀬野川高校が演奏した曲で、同バンドの十八番であるが、毎年定期演奏会のアンコールはお互いにこの曲を演奏し、「どちらがより速く演奏できたか」を競っているので、選曲会をせずともハナから決まっていた。
こうしてけやき坂高校吹奏楽部第十七回定期演奏会の曲目は正式に決定し、目標どおり年内には全曲とも一回は合奏をすることが出来た。もちろん初回の合奏であるから結果は散々で、部員は各々、このままで無事に本番を終えることができるのだろうか、と憂鬱な気持ちで正月を迎えることとなったのである。

「おげえ、おまえんとこあのレベルでタコ５やんのかよ」平井伸二（ひらいしんじ）は一度口に含んだ雑煮の餅を吐き出しながら言った。
「決まっちゃったんだから仕方ないじゃん」
元日恒例、家族揃っての朝食の席であった。外は晴天ながら凛とした寒さが大気を支配して、まさに正月日和といったところだ。朝食を取った後、家族全員で鎌倉の鶴岡八幡宮に初詣に行くのが平井家の決まりであった。
「しかもあたしティンパニになっちゃって」萌子（もえこ）がそう続けると、兄の伸二はまたもや餅を吐き出しそうになる。
「うそっ、もやしっ子には一番似つかわしくない楽器だぞ。しかもタコ５の終楽章」
「わかってるよ」
平井萌子はけやき坂高校吹奏楽部パーカッション・パートの一年生である。風に揺れる柳のような細い身体で声も小さく、とにかく部内でもとりわけ存在感のない生徒でもあった。兄の伸二は都内の大学に通っている二年生で、今がまさにお気楽人生の真っ只中である。
「なんで萌子にティンパニやらすんだ先輩さんたちは」
「いやほんと先輩達どうしようもなくってさ、恵ちゃんは色々な楽器やらなきゃいけないしってことで消去法であたしがティンパニに」
けやき坂高校吹奏楽部パーカッションパートの二年生は三人いたが、光田恵や平井萌子が言うように、本当にどうしようもない部員であった。何を叩かせても上手くいかない。鍵盤楽器を叩けるのが一人いるくらいで残りの二人はタンバリンもトライアングルもまともに演奏できない駄目っぷりなのである。
　そんな中、光田と同じく中学から吹奏楽部でパーカッションを続けていた平井も、この定期演奏会から重要なポジションを任されることになった。その極めつけが、プログラムの最後に演奏する大曲、ショスタコーヴィチの交響曲第５番、略してタコ５の終楽章でのティンパニであった。
「なんだかおまえも苦労してるなあ」
「でもお兄ちゃんみたいに途中で辞めたりしないから」
「ほっとけ」
平井萌子の兄、伸二も中学・高校時代は吹奏楽をやっていた。高校は都内の私立高校に通い、その強豪吹奏楽部で部長まで務めたという、将来を嘱望されたトランペッターであったのだが、最後のコンクールが差し迫ったある日、部員が学校外で傷害事件を起こしてしまった。部のコンクール出場そのものが危ぶまれたが、伸二が責任を取る形でその部を去った。結果として部はコンクールに出場したものの、強力なリーダーシップで部を引っ張っていた平井伸二を失ったバンドはもろく、内部崩壊の末に全国大会への切符を逃した。

平井萌子が吹奏楽を始めたのは、そんな兄の背中を追ってのことだったが、本人の希望も虚しく、歯並びが悪いから、という理由でトランペットは吹かせてもらえず、パーカッションを担当することになった。

楽器は違えど兄の音楽に対する情熱的姿勢とその卓越した技術は萌子にとって最も身近な憧れの存在であり、兄の退部を聞いた時はやはりショックだったことを覚えている。なぜ兄が部活を辞めたのか、理由は未だに教えてもらっていないが、ただ目標を失った気がした。

一方で部をやめた伸二はそれから一度もトランペットを吹かずにアルバイトと勉学に勤しみ、名門私立大学に入学。サークルには属しておらず、アルバイトで貯めた金をクラシックのＣＤや演奏会につぎ込む生活を送っている。部屋はクラシックのＣＤで埋め尽くされており、耳だけは昔よりも肥えている。

そんなＣＤだらけの部屋の一角で、寂しく誇りを被ったトランペットのケースが、またいつか来るかもしれない出番をただ静かに待っているのだ。

「吹奏楽部にはよくあることだけど、だいたい終楽章だけってのが気に食わない」
と伸二がケチをつけ始めた。これもこの兄妹にあってはよくあることだ。
「一、二、三楽章とあったうえでの終楽章だろ、それを全部すっ飛ばしていきなり終楽章からやるってんだから、その前の三楽章分のドラマを全部詰め込んだティンパニが鳴らないと、音楽が始まらないってもんだよ」
「おまえは本当に理屈っぽいな」
とおせちをつつきながら父親が割ってはいる。
平井伸二と萌子の父、幸三（こうぞう）はフリーのトランペット奏者だ。以前は伸二を自分と同じプロのトランペッターに育てたいと考えていたが、息子が自身の人生からトランペットを消し去ってしまい、それも叶わぬ夢となった。今は娘である萌子が部活動を楽しんでくれることだけを祈っているという塩梅である。
「伸二はあれこれ言うけどな、大事なのは情熱だよ萌子。ドント・シンク・フィールだ」
「それブルース・リーじゃねえか」
伸二がトランペットをやめたときには色々あったようだが、今は幸三と伸二は仲が良い。家族の中に本気でクラシックの話を出来る相手がいるということが幸三にとっても心地良いようだ。妻の祥子（さちこ）はジャズには詳しいがクラシックには疎い。
「いいか萌子、フィールだぞフィール」
そういい残すと、幸三は席を立った。初詣のために紋付袴に着替えるのである。どこか風変わりなオッサンであった。

食後しばらくして胃を落ち着かせてから、平井家は電車に揺られて初詣に出かけた。駅

からしばらく歩いて鶴岡八幡宮に到着すると、さすがの混み具合で、簡単には前に進めない。

にっちもさっちもいかない状況の中で、再び話題は萌子の部活の話になっていった。伸二兄ちゃんとしては色々と教えたい年頃なのである。

「そういえば光田ってのはその後どうなったんだ」

「ああ恵ちゃんはねえ、前みたいに先輩と喧嘩することはなくなったよ」

「ふむ」

「でも私に楽器教えてくれるのは恵ちゃんだし、先輩にも平気でダメ出しするからね。どっちが先輩だかわからない」

「そうかあ。萌子はその光田ってのに教えられるばかりでいいのか？」

「そうだねえ、今のところは恵ちゃんみたいに何でも叩けるようになりたいなあ」

「いかん、いかんよ、それでは。そんな低いところを目指してちゃいつまでたっても上達しない、何より音楽が生まれない」

「何それ」

「萌子には萌子の音楽があるんだ。それを追いかけるべきなんだよ」

「おっ、たまには良いこと言うねえ伸二君」

祥子と日野皓正について語っていたはずの幸三が割って入る。

「そうなんだよ萌子、ディド・イット・マイ・ウェイだよ」

「今度はシナトラかよ」

なんだかこの親子の会話には付いていけないなあ、と思う萌子であった。

その後も色々と話した気がするが、初詣の列はまだ数メートルしか進んでいなかった。先輩達がいなくなって後輩が入って…来年、あの部活はどうなるんだろう。恵ちゃんみたいに上手い子が入ってくるといいけど、それはそれで恵ちゃんとぶつかったりするのかなあ、嫌だなあ、などと考えていると、この長い初詣の列が、この先の部活の前途多難さを暗示しているような気がしてきて、萌子はぶるると子犬のように震えた。周りから見れば柳が小刻みに揺れているようで、ちょっとおかしな光景だったかもしれない。

「自分の音楽ねえ」と誰にも聞こえないように呟いてから、萌子は雲ひとつない青空に白い息をほっと吐き出した。

年が明けるとすぐに、けやき坂高校吹奏楽部の練習は再開された。二年生の中には年末の初見合奏のひどさにショックを受けたのか、休みの間に自主的に練習してくるものや譜面を読み込んでくる者もいて、一九九六年の練習はまずまずの滑り出しを見せた。

一曲一曲、地道ながらも少しづつ形になっていく。部内にも特に問題もなく、一月は田口指導の下、順調に練習を積み重ねた。

高校生の一ヶ月での成長は早い。一月の終わりには、あっという間に全曲が一通り止まらずに演奏できるようになっていた。もちろんミスや譜面どおり演奏できていない場所はまだまだ多かったが、この調子であれば四月の定期演奏会にはそれなりの演奏を披露できそうな状況であった。

そんな一月が過ぎ、厳しい寒さとともに二月が訪れた頃。招かれざる色々な異物も一緒に訪れ始めた。現役生、特に一年生にとって最も苦手な存在、ＯＢ達の大量訪問の幕開けである。

推薦で進学が決まった三年生や、昨年までけやき坂高校に在籍していた卒業生など、比較的学年の近いＯＢが週に一度は入れ替わり立ち替わり顔を出すようになっていた。

けやき坂高校吹奏楽部はすべての行事を一年生と二年生だけでこなすのだが、定期演奏会の第三部のステージだけはＯＢの賛助出演が認められている。そこで、現役だけでは上手くまわらないパートはＯＢに救援を求めることになる。もちろん、呼ばれてもいないのに自分から賛助を申し出てくる厄介なＯＢも存在する。それでも実力不足の否めない現役生からすると、たいていのＯＢ賛助は有難いものなのであった。

また、定期演奏会の第二部であるポップスのステージは、毎年ＯＢが指揮をすることになっていた。田口が赴任する前からの伝統であるらしい。

今年は、三年生の笹野滋（ささのしげる）が指揮を務めることになり、彼も二月から顔を出していた。笹野はまだ進学が決まっていない。音楽大学を目指しているという噂もあったが、真偽のほどは不明である。そんな彼を二部の指揮者に指名したのは他でもない田口であった。

笹野は昨年まではサックス・パートのパートリーダーであり、音楽の知識も豊富で、何より田口も認める音楽センスと、細かな音を聴き分ける天性の耳を持っていた。田口も随分と彼を可愛がったのであるが、彼の独特の他を寄せ付けない張り詰めた空気感になじめずに部を去る後輩は後を絶たず、結局サックス・パートは笹野を含めた当時の二年生だけになってしまった。そして村田や西堀、そして上条などが入部する頃にはサックス・パートには二年生がいない、という状況になったのだ。先輩のいない彼らが苦労している元凶は笹野だったとも言える。

そういった調子で、二年生とは面識のあるＯＢが多く練習に訪れ、その度に二年生は「ああ～先輩いィ～」などと騒ぎ立てる。

一年生の中本などは「誰だよアイツは」などといいながら誰彼構わずメンチを切っていたが、何度も音楽室を訪れる顔なじみのＯＢにはコロリと懐いてしまうのであった。そういった状況で、しばらくは平和な交流が続いた。

そして二月も中旬に差し掛かったある日。その日は二部の合奏で、笹野が強烈なダメ出しを部員に与えながら「宝島」の指揮をしていた。

「おい上条、このソロやりたいって言ったのオマエらしいな」

「はいっ、すみません」
「いや謝るとかいらないから、とりあえず譜面どおり吹けるようになれよ」
「はいっ、すみません」
「あともっとファンキーに吹けよファンキーに。ファンキーわかる？わかんない？まあいいや」
などというやり取りを全部員が固唾を飲んで見守る中、音楽室後方の扉がバアンと勢い良く開かれた。笹野も部員も驚いて一斉に音の出た方を見る。するとそこにはまさに「ファンキー」としか言いようのない、サイケデリックなプリントのシャツにピンクのベルボトム、そして緩いパーマをあてた茶髪の色メガネ男が立っていた。
「ハッロー、エヴリィバアディ！」
静まり帰る音楽室。二年生は顔が引きつり、一年生は呆気にとられ、笹野は一度嗚呼、と天を仰いでからその男に顔を向け、呟いた。
「滝本（たきもと）先輩…」
「たっ、滝本先輩！」
二年生からも絶望を含んだ声で彼の名が叫ばれる。困惑、迷惑、さわらぬ神にたたりなし、といった雰囲気が二年生、そして笹野を包む。一年生にも不穏な空気は伝わってきた。その一年生の中から目ざとく上条を見つけた滝本は合奏中であることをあえて無視してか、ズカズカとバンドの間を縫って上条の傍らへやってきた。
「今ソロ吹いてたのはユー？」
「ユー…あ、そうです」
「わちょう」
謎の掛け声とともに、滝本は上条の身体に蹴りを放った。
「わっ何すんだよてめえ！」
楽器とともに倒れこんだ上条が叫ぶ。
「ユー楽器は大事にしなよ、ちょっと貸せ」
そういうと滝本は上条の手からサックスをもぎ取り、首からストラップをももぎ取ると手早く楽器をセッティングした。
「リッスン・トゥ・ミー」
そういうや否や、滝本は先ほどまで上条が吹いていた（吹けていなかったが）宝島のソロを吹き始めた。その演奏はまさにファンキーで、サックスとはこういうもんだぜと言わんばかりに唸りを上げる。同じ楽器とは思えないほど上条とは次元の異なるサウンドを聴かせる滝本に、他の部員の目も釘付けとなった。笹野だけは俯いてこめかみの辺りを押さえている。結局滝本は上条が担当するソロパートを、譜面も見ずに全て完璧に吹きこなした。
最後の一音までまるで薔薇が舞うがごとく華麗に吹ききった滝本は、唖然として静まり

かえる部員を見渡し「ほれほれ」と両手を動かし拍手を煽った。どこからともなく拍手が巻き起こる。「な」と言いながら上条に楽器を返した滝本は、右手を高く上げて自分の名を名乗り始めた。

「けやき坂高校吹奏楽部サックスパートOB、滝本有理（たきもとゆうり）です、現在ピカピカの大学二年生、彼女募集中だよぉ～ん」

といって色メガネを外した滝本は、上条に似て顔のパーツがいちいち濃かったが、なぜか上条とは異なり超絶にイケメンであった。一年生女子の間からきゃあきゃあと喚声が沸きあがる。滝本のキャラを昨年よく知った二年生は、一同やれやれといった表情だ。

「滝本先輩、とりあえず後ろでおとなしく見ててください」

滝本が薔薇の花びらだとすれば笹野は薔薇の棘だ。彼が敬意のかけらもなく声をかけると、オーケーオーケー、と呟きながら滝本は音楽室の後ろに積まれていた手ごろな椅子を取り、腰掛けた。

「えっと二年生の皆はもう知ってると思うけど一年生は始めてかな。僕の二つ上の先輩の、滝本先輩です。ビックリしたと思うけど、ああいう人です。慣れてください」

笹野が改めて一年生に滝本を紹介すると、二年生から笑いが起きた。その後「宝島」を含む二曲の合奏をして、この日の練習は終わりとなった。

現役生や賛助のOBが楽器の片づけをしている中、現役時代に同じパートの三年生と一年生の仲であった二人は心の通わない会話をしていた。

「いっやー笹野久しぶりだなあ、痩せた？」

「そうですかね。先輩は相変わらずですね」

「フォーエバー・ヤングよフォーエバー・ヤング」

「フォーエバー・グッバイしたいところですが」

「くう～、言うねえ笹野ちゃん！」

「言いたくもなるでしょう」

「先輩は大事にしなきゃいけないんだよお～」

「人によりますよ」

「おまえのハートは相変わらず凍ってるねえ」

「では僕はお先に失礼しますので」

「あっもう帰っちゃうの？つれないなあ」

「さっきみたいに現役に蹴りとか入れないでくださいね」

「はいはい、チャオ」

笹野が帰るや否や、滝本はすぐさま渡辺素子の元へ駆け寄る。

「素子ちゃん、久しぶり～」

「あっはい、お久しぶりです」

「可愛くなったね～オジサン嬉しいなあ」
「ああそうですか。ありがとうございます」
渡辺素子の対応はかなりそっけないが、一応会話は成立している。そんな二人のやり取りを一年生が不思議そうに見ている。過去に何かあったのだろうか。すでに楽器を片付けた男子四人は音楽室の隅でその様子を見ていた。
「あの野郎いきなり蹴り入れやがってよ」
「マジねえべ。あいつボコっちまうか」
いきり立つ上条と中本を、暴力はやめよう、と山上がなだめる。
「だいたい俺の素子に馴れ馴れしすぎる」
いつからおまえの素子になったんだよ、つかおまえそういう趣味だったのか、と今度は上条と中本が伊野の妄想タイムに割って入る。そんないつものようなくだらないやり取りをしていると、滝本がこちらに向かってやってきた。
「ユーさっきはゴメンねえいきなり蹴りカマしちゃってさあ」
「ゴメンじゃないすよ」
「生意気だなあ」
「あんなんされたら当たり前の反応じゃないすか」
「男はガタガタ言ってるとモテないよ～」と軽く上条をいなしながら、でも男子が入って良かったよなあ、うんうん、などと独りごちている滝本に、どう対処していいかわからない四人であった。すると突然、
「ようし今日は男子入部記念！有理先輩を囲む会！」
と宣言し、行くよほらほら、と言いながら滝本は男子四人を強引に連れ出し自分の真っ赤なカマロに乗せ、そのまま瀬野駅近くのファミレスで五人で夕飯を取ることになってしまった。
　あまりの強引さ、あまりの身勝手さに早くも憔悴していた四人であったが、猥談師として四人の遥か上を行く滝本のトークにいつしか場も盛り上がり、あっという間に五人は仲良くなってしまった。山上だけはキャラが合わないのか、少し距離を置いていたが。その後も滝本はいかに自分が遊びほうけているか、いかに大学生活が楽しいか、いかに女性という生き物が素晴らしいかなどを熱く語り続けるのであり、四人はまだ見ぬ大学生活に思いを馳せた。ただ基本的に遊びほうけている話ばかりだったので、大学といってもさほど有名な大学に通っているわけではなかろう、とこの時四人は思ったが、後で彼が都内の名門私立大学に通っていると知っておおいに驚いたものである。
　別れ際に、明日も合奏？と尋ねた滝本に、明日は個人練習です、と山上が答える。
「じゃあ明日も顔出すよ、チャオ」
　といって滝本はカマロに乗り、去っていった。

「かっけえなあカマロ」と中本が呟く。
「また似合うよなああいうの」と上条が続く。
「でも疲れるわあの人、チャオってなんだよ」と山上が愚痴る。
「要するにエロガッパだな」と伊野がまとめたところで、そうだな、と他の三人も同意し、この日は解散した。

翌日、予告どおり滝本は再び練習に顔を出した。昨日とは打って変わって真面目な顔をして、渡辺素子たちクラリネット・パートが練習している教室を訪ねた。ショスタコーヴィチの交響曲第5番を練習していた素子に駆け寄ると、演奏会実行委員長は誰か、と尋ね、その足で隣の教室で練習している的場佐知子の元へ向かった。

的場と滝本の間でどんな会話がなされたのかは不明だが、その日、元々の予定を繰り上げて、急遽ポップス・ステージの演出についての会議が開かれた。

昨夜のうちに拓也達も聞いていたことだが、滝本有理は大学で友人たちとロックバンドを組んでいるそうである。ホーンセクション付きのバンドだというので米米クラブみたいなものなのだろう。滝本はサックス担当なのかと思いきや、ボーカルなんだそうだ。とにかく自分でプロデュースしないと気が済まない性分らしく、バンドを作ったのも滝本、曲を作るのも滝本、ステージ演出を考えるのも滝本、駅前でのゲリラライブを企画したのも滝本、とまあそういうバンドらしい。

後から拓也、中本、山上が上条から聞いたところによると、そんな滝本が（呼ばれもしないのに）加わったポップス・ステージの演出会議は滝本の独演会の様相を呈していたらしく、ドンドンと演出が決定していったらしい。これといって奇抜なアイディアはなかったが、現状のメンバーを考えるとまあ最適かなといった演出に落ち着いたようだ。

そして会議が終わった後、滝本は的場佐知子をカマロに乗せ、夜の闇に消えていったという。

このような感じで、滝本の代、そしてその一つ下の代のＯＢ達が足しげく母校に通い様々な指導をしながら二年生女子をナンパしていく、という状態が続き、中には滝本と的場のように見事にお付き合いと相成ったカップルも多く生まれた。どうやらけやき坂高校吹奏楽部の二月とはそのようなものらしい。

さすがに徐々に本性を現したＯＢ達に対して「何しに来てんだアイツら」と中本や山上などは怒りに打ち震えた。上条は憧れの緒川小百合が誰かに持って行かれないかと心配していたが、不思議なことにそれは杞憂に終わった。拓也はというと、「俺は皆好きだから誰でも余ったのでいいや」というスタンスで、これは男子内でもおおいにヒンシュクをかったものである。

さてそんな色恋沙汰に溺れながらも着実に曲を仕上げてきていた吹奏楽部であったが、まさに青天の霹靂とはこのことか、誰もがパニックに陥るような事件が起きる。

仰げば尊しわが師の恩知らず

二月も終わろうかというその日、田口の合奏はいつにも増して熾烈を極めた。ただでさえ難しく、これまで騙し騙しで何とかやってきた「タコ５」に容赦なく高いレベルの要求が飛ぶ。ティンパニの平井などは延々とダメ出しが続き泣きながら叩き続けるという有様であった。

「クラリネット、音が汚いぞ何だそりゃあ！渡辺に合わせろ！」

「低音、遅い！耳付いてんのか広田！」

「サックス、うるさい！上条気色悪い音出すんじゃねえ！」

「トロンボーン、ふにゃふにゃすんな！緒川いつまでもおっとりしてんな！」

「だから、平井イイイ！！」

ハヒー、と泣きながら平井が返事をする。今までにこれほど怒鳴り散らしながら合奏をした田口を、部員は見たことが無かった。要求はいつも厳しいが、どちらかというとのんびりと、ねっちょりと合奏を進めることが多かったからだ。さすがに全部員が心身ともに消耗した。外は雪が降っており帰るのもおっくうだが、早く帰りたい、と誰もが願った。そんな合奏を、二部の指揮者である笹野が見学していた。

「今思うと、あれは田口先生の焦りだったと思うよ。俺はあんまり信用されてなかったんじゃあないかなあ」

定期演奏会が終わったあと、笹野はそんな言葉を残している。

田口が顧問となってから最も厳しい合奏の時間がようやく終わった。

「起立、ありがとうございました」

「ありがとうございました」

ああ、終わった。これで解放される。そんな安堵感が音楽室に漂った。しかし刹那、皆そのまま座ってくれ、と田口が呼びかけた。

ええええ、あああ、などというため息をもらしながら、パラパラと部員がそのまま椅子に腰掛ける。全員の着席を確認すると、合奏時とは打って変わって緊張した面持ちの田口がゆっくりと語り始めた。

田口が今年度でけやき坂高校から転任になること。引継ぎなどで忙しく今日が最後の合奏だったこと。定期演奏会は指揮を振れないこと。新しい顧問が決まるまで代役として今後は定期演奏会の本番も含めて笹野が全ての指揮をすること。

誰もが、何も言い出せなかった。田口の言葉ひとつひとつがバールのようなもので頭を

殴られている感覚に陥らせた。誰も何の感情も表に出てこなかった。それほどの衝撃が、部員を襲ったのだ。部長の前田智子だけが、静かに泣いていた。音楽室の扉に寄りかかっていた笹野も、目を閉じて静かに話を聞いていた。

「ギリギリまで言い出せなくて申し訳ない。でもこれは規則で仕方が無かったんだ。すまない。皆と過ごした時間は俺にとってかけがえのない時間だった。ありがとう…なるべく定期演奏会は見に行けるよう、次の学校にも取り計らってもらおうと思ってる。君達ならけやき坂高校らしい演奏を聴かせてくれると信じてる。頑張ってくれ」

その言葉を最後に、部員の反応を待たずして田口は音楽室を後にした。残された部員たちは、その後しばらく誰一人としてその場から動くことが出来なかった。

やがて誰からともなく、楽器を片付け始めた。「どうしよう」「どうなるの」というささやきが、室内を支配している。誰もが大きな声でわめきたかった。「なんで」と叫びたかった。しかしそれをしてしまうと、感情が爆発してしまってどうしようもなくなるということもわかっていた。彼らにはなす術が無かった。

涙で目を赤く腫れあがらせた前田が、廊下で笹野と何やら話し込んでいる。そんな二人を尻目に、鬱々とした表情で部室へ楽器を片付けに行く部員たちの姿は葬列のようでもあった。

雨や雪の日は、拓也は自転車では学校に来れない。急勾配が多く、ちょっと傘を差しながらの運転がしんどいからである。そのためこんな日は電車を使う。さすがの拓也もちょっとは憂鬱な気分だったので、電車でちょうど良かったな、という気もした。帰る方向が瀬野駅方面の山上、中本、上条は雪の日でも自転車だ。途中まで一緒に帰るか、という中本の誘いを断って彼らを先に帰らせ、拓也は後からゆっくりと玄関で靴を履き替えた。ふと気づくと、戸崎聡子も一人で帰ろうとしているところだった。

「戸崎」

どうせ戸崎も瀬野駅まで行くのだから、一緒に帰ってみようと思った。ふだん寡黙な彼女が何を考えているのかにも興味がわいた。話し始めれば決して彼女が寡黙ではないことを、拓也は知っている。

拓也の呼びかけに、うん、と答えて戸崎も靴を履き終えた。玄関を出たところで傘を差す。拓也の傘は紺色、戸崎のそれは意外なことにピンク色。二人並んでゆっくりと歩きながら校舎を出た。

「なんかこう、どえらいことがあると戸崎と帰ってるな」

「今日でまだ二回目でしょ」

「そっか」

駅までの道のりは暗く、そして寒かったが幸いにも身体中に吹きつけるような風もなく、雪の勢いは柔らかい。しんしんと、とはこういうことを言うのかな、と拓也は思った。

「さてどうなるんだろうか、戸崎先生」
「私にもわからないよ」
「でもまあ先生の規則ってのも大変だな。田口、キツそうだった」
「でも決まっちゃったことならうちらにはどうしようもないよね」
「そうだな」
「二年生がちょっと可哀想だったね。引退の演奏会で、先生いないってのは」
「誰も泣いたり騒いだりしないから逆に怖いよね。しばらく練習に身が入らないんじゃないか」
「たぶんね」
「ここで俺らがその分頑張ります！って雰囲気でもないんだよなあ」
「まあアンタは直接先輩がいるからね。サックスはこれまでどおりでいけそうだけど」
「やっぱ二年生が気持ち入れ替えないと厳しいよな」
「難しいだろうね、色々…」
「にしても笹野さんが全部振るって、笹野さんも大変なことになったもんだ」
「まあ笹野さんなら田口先生と合奏のタイプも似てるしね」
「でもキャラ的になあ、怖いんだよなああの人」
「そう？アタシ結構平気だけど」
「なんだ戸崎ああいうのが好みか」
「あ？」
「いや何でもない、ああ寒い寒い」
「そりゃ雪降ってるからな」
川沿いから急な坂道を登りきると、少し広い通りに出る。通りを渡ればもうすぐ瀬野駅だ。なんとなく次の話が出てこなかったので拓也がホーッと息を吐き出して遊んでいると、目の前で水色の傘が信号待ちをしていた。
「あれ小百合先輩じゃないの」
「マジか。戸崎がピンクで緒川先輩が水色って、逆だろ普通」
「あ？」
二人の声が聞こえたのか、緒川小百合が振り向いた。
「あら。あらあらあら。仲睦まじく」
「いや先輩違いますよ！」
異口同音に二人が声を揃えて疑惑を否定する。
「違うの？」
「全然、違います、こんなのは」
拓也より先に戸崎がキッパリと否定する。何も「こんなの」扱いすることないだろう。
「戸崎は笹野先輩がいいらしいですよ」

「違えェーッ！」
凍てついたローファーが拓也の尻肉を蹴り上げる。なんというシャープな蹴りであろうか、拓也は「ガッツ」と意味不明のうめき声を上げるしかなかった。
「まあまあ暴力はよしときなさい。で、二人はただの友達ってことで？」
「ただの友達です」
「じゃあ伊野君借りていい？」
「え？あ、どうぞ」
「俺を借りるっていうのはあのその」
「ちょっとコーヒーでも飲んで行こうよ」
「あ、俺は別にいいというかウェルカムなんですけどっていうか最高です」
あほか、と唇だけ動かし、「じゃあ私はお先に失礼します」と言い残してピンク色の傘は瀬野駅に向かってスタコラと歩いて行ってしまった。

珍しい組み合わせだ。緒川小百合と伊野拓也。気づけば打ち上げ係の二人であるが、最近はあまり会話をしていなかった。瀬野駅から少し離れたところにある一杯百五十円のコーヒー屋で、その一杯百五十円のコーヒーを頼み、小さいテーブルを挟んで二人は対峙した。
「田口先生の件ですけど」
「うん」
「驚きましたね」
「うん」
「あんま驚いてるように見えませんけど」
「驚いてるに決まってるじゃない。驚いたけど誰に話しかけていいかわからなくて、落ちこんで、不安になって、さっきまで一人で歩いてて、ああこの先どうしようって」
「ああやっぱそうなんですね」
「そりゃ、ああ転任ですか良かったですね、なんていう人は誰もいないでしょう」
「俺なんかはまだ先生とも日が浅いんで別にそこまでではないんですけど先輩たちはしんどいでしょうね」
「しんどいどころじゃないなあ。だから珍しくこうして伊野君誘ってるんじゃない」
「人肌恋しい季節ですか」
「違う！っていうか伊野君なんでそんなに落ち着いてるわけ？」
「どうなんでしょうね。んー、どうなんでしょう。不安ですよ。とても。だから茶化してるだけです」
「良かった、まともな神経してて…まともでもないか」
「あのー、緒川先輩なら聞いてくれそうっていうか言っても大丈夫そうっていうか」

「何？」
「さっき戸崎とも話してたんですけど、やっぱ二年生ここでしっかりしてもらわんと、というか」
「そんなこと言ったって無理に決まってるじゃない。もう涙がここまで出掛かってるのよ」
といって緒川は首のあたりを指したが、そこから涙は出ないだろう、というツッコミは無粋というものだ。
「いやだからですね、先生がこのタイミングでいきなりうちらを放り投げるようにしたように見えなくもないんですけど、多分先生としては二年生を信頼してて、もう言っても大丈夫だっていうタイミングが今日だったのかなあ、とか思うんすよ」
「うん」
「だからですね、大丈夫なんすよ。先輩」
「んー、わかんない」
「えーとですね、だから先生が大丈夫だって思ったタイミングだったとしたらですよ、それは大丈夫なんですよ。だって大丈夫なタイミングなんだから」
「わっかんない。てか理屈っぽいね」
「うー、そうですかね。そうですね。やっぱこういうのは苦手ですね」
「わかんないけど…でも話してくれてありがとう」
「そこでありがとうが出てくるほうが僕にはわからないですけど」
「女と男は違うのよ。それに伊野君はまだ坊やだからねえ」
そういうと、まるで自分は大人の女だと言わんばかりに緒川は物憂げな顔をして窓の外の雪を見つめる。ハッとするような美しさだと言わざるを得ない。こんな状況ながら紛う事なき男の血が思わず漲ってしまい、俺は坊やじゃないぜ姉ちゃん、と言いたくもなる拓也であったが、外の寒さを思い出しながら何とか鎮まって頂いた。緒川が外をぼおっと見つめているので二人はしばらく無言になり、これ以上何を話せば良いものかと拓也がコーヒーをすすりながら逡巡していると、窓の外を見つめたままの姿勢で
「でも大丈夫、っていうの、少しわかってきた」
と緒川が呟いた。何を考えてそういうことになったのか、拓也には知る由もない。十七歳の乙女なりの考えがあったのだろう。ん、緒川先輩って十七歳だっけ？三月生まれだっけ？まあいいや、と思いながら拓也は会話を続けてみた。
「明日は二年生はミーティングですか」
「んーどうなるかわからないね。智子と素子と…って並べるとカミそうだね、あとはパートリーダーだけで話し合うかもしれないし、一年生も含めて全員かもしれないし」
「帰り際、前田先輩と笹野先輩が話し込んでましたね」
「多分、笹野先輩からいいアイデアが出てくるんじゃないかしらね」

「だといいですけどねえ」
その後もぽつぽつと断続的な会話を続けながらも、なかなか二人は席を立とうとしなかった。拓也はちょっとそろそろ帰りたくもあったのだが、先輩にその気配がないのだからどうしようもない。二時間ほど静かな会話が続いただろうか、コーヒーを三杯もおかわりしてからようやく二人は店を出て、帰路に着いた。ちなみに恋愛の話に関しては緒川はガードが固く、拓也は盟友上条への有益な情報を何も得ることが出来なかった。

後ろは振り返らなかった。というよりは、振り返ることが出来なかった。彼らの顔を見ると覚悟が揺らいでしまいそうだからだ。未練が残ってしまいそうだからだ。一週間ほど前に、笹野には先に伝えてあった。今後のこともよく話し合った。あとは笹野が上手くやってくれるはずだ。もう終わったのだ、自分の役目は。
音楽室に生徒たちを置き去りにし、田口はすぐに荷物をまとめて自宅へと戻った。明日からは、ただの世界史の教師である。ただの去り行く一教師に過ぎない。世界史の教科書に出てくる多くの偉人たちと同じく、過去の人になるのだ。

「終わったあ！」
帰宅するなりそう叫び、田口はコートと鞄を絨毯の上に放り投げ、勢いよくソファにもたれこんだ。ちょっと、と注意する由紀絵に向かって田口は不敵な笑みを浮かべ、もう一度、終わった、と呟いた。
「なんだか嬉しそうね」冷たい視線を伴って由紀絵がそういうと、
「そりゃもうプレッシャーからの解放ってのはこんなに気持ちがいいものかって感じだよ」とソファから身を乗り出す。まるで子供のような無邪気さだ。
「あんなに生徒思いの先生だったのに、人って分からないものね」
「別に生徒思いじゃなくなったわけでもないよ、後任も決めてきたし」
「ああそう、じゃあもう完全に御役御免ってわけだ。ただのでくのぼうじゃない」
「なんか妙に冷たいな」
「理由がわからない？」
「わからない」
「アンタがコートと鞄放り投げるからでしょうが！」
「あっ、わっ、すみません」
「あと、今日結婚記念日！」
「わちゃあ」
すっかり失念していた。ここ最近は転任のことばかりでまるですっぽり抜け落ちていた。
「まあ結婚記念日はいいのよ思い出せば。で、結婚記念日忘れてたくせにこんなに早く帰ってきたのはなんで？生徒さんから逃げてきたんでしょうどうせ」

「うぐ」
「もうほんとそういうところで男気ないっつーか大人じゃないっつーか、私が生徒だったら後から追いかけてあなたを刺すわね」
「怖いこというなよ」
「あなたねえ、自分で教師になったんだからちゃんと教師たれっつーのよ。子供はあなたの背中見て育つのよ」
背中か、と心の中で由紀絵の言葉を反芻すると、ふと宮内篤子の顔が浮かんだ。彼女はどこへ向かうのだろうか。彼女だけではない。残されたけやき坂高校吹奏楽部の彼らも、これからどんな方向へ進んでいくのか正直わからない。だがどちらも、今となっては自分の手を離れたことだ、と自分を納得させるしかない。

コートと鞄をすごすごと片付けていると、由紀絵がまた話しかけてきた。色々嫌味は言うものの由紀絵も気になって仕方がないことなのだ。何といっても転任先はあそこだ。
「で、どこまで言って来たの」
「たいてい全部だよ。さすがに転任先のことは言えなかったけど」
「そりゃあ言えないよねえ、まさか今までの顧問があの瀬野川で指揮するなんてねえ」
「すっごいライバル意識だからねけやき坂と瀬野川は。だから瀬野川に行っても素直に受け入れてもらえるかどうか、それはそれで不安だよね」
「でも瀬野川の誰だっけ、顧問の山、山」
「山之内先生」
「そうそうその人。その人がフォローしてくれるんじゃなかったっけ。はいコーヒー」
「おおサンキュー。まあ、酒の席での話だったからな。でもあの人は音楽を言葉にするのが非常に上手いよ。あの人と組んでやれたら、もしかして全国見えちゃうかも」
「瀬野川のレベルで？けやき坂に毛が生えた程度じゃないの」
「まあ全国は冗談としても、そこそこ有名になるかもよ」
「そしてけやき坂はさらなる暗黒時代？」
「どうかな。すでに底辺だからね。このまま海の底か、それとも笹野が沈没船を引き揚げるか」
「そしたらアンタ面子丸つぶれね」
「まあでも笹野だったら本望だよ」
そう言うと窓の外の雪を見ながら田口はずずず、とコーヒーをすすった。いずれ、新聞でも見れば田口の移動先は知られる。その時彼らは敵意むき出しで瀬野川に襲い掛かってくるのだろうか。生徒達が受けるショックと怒りを考えると空恐ろしいが、その反骨心を少し期待してもいる。

ふいに家のチャイムが鳴らされた。何かが届くなんて聞いていない。こんな雪の日に、何かの勧誘か、と訝しがりながらもソファを動かない田口に向かって由紀絵が叫ぶ。
「今カレー混ぜてんの、アンタ早く出て！」
おおこわ、と首をすくめながら早足にインターホンの受話器を手に取る。
「どちら様？」
「あ、先生。笹野です」
「笹野？どうしたんだ急に。入るか」
「もちろん入れてもらいます。寒いですから」
「そうだよな、鍵開いてるからそのまま入ってきていいぞ」
インターホンが切れると同時に、カチャリと音がして玄関のドアが開いた。廊下の電気を付け、田口が迎えに行くと、そこにいたのは笹野だけではなかった。
「前田」
田口が口をポカンと開けてでくのぼうよろしく突っ立っていたのはほんの数秒だったが、本人にとっては時間が止まったようだった。出来ることなら時間を数秒前に巻き戻してインターホン越しに二人を追い返したいくらいだ。
「まあ…入るか」
そういって二人をリビングへ誘い、由紀絵に紹介する。笹野は以前にもこの家に来たことがあるが前田は初めてだ。
「あら笹野君、と…あなたは？」
「前田と申します、突然にお邪魔してすみません」
「ああ部長さんね？いいのよ別に。毎日二人ってのも飽きるしね。色々話があるんだろうけど、もうすぐカレーが出来るから食べていけば」
「いえ、そんな」
「あなたはいいかもしれないけど私がお腹空いてるのよ。先生の家まで押しかけてるんだから私の言うことぐらい聞きなさい」
なんだかすごいお宅に来てしまったようだ、と前田智子は思ったが、由紀絵は今日の合奏中の田口よりも凄味がある。抗うこともできず、とりあえず夕食を食べることになってしまった。急遽現れた二人には炊飯器で炊いたふっくらの米、そして田口夫妻の米はサトウのご飯である。テーブルに四人、田口夫妻と笹野・前田が向き合うようにして座った。
「それじゃあ由紀絵さん、遠慮なくいただきます」笹野は何度もこの家に訪れているのか、すっかり由紀絵に慣れているようだ。棘は棘とウマが合うのだろうか。そしてあの話はいつ切り出すのだろうか。前田は気が気でなかったが、ここはもう笹野に任せたほうが良い気がしてきた。
「いやあ由紀絵さん、相変わらずご飯おいしいですね」
「そう？ただのカレーだけど」

「いやあ一日目のカレーでこれだけの味はなかなか」
「おまえどこでそんな営業トーク覚えてきたんだよ」
「先生が由紀絵さんによく言ってるじゃないですか」
思わぬ反撃を食らってバツの悪そうな顔をした田口だったが、その顔は優しくもあった。こんなに不思議な表情の田口を、前田は見たことがない。教師としてではなく一人の男性としての田口の一面を見てしまったような気がして、少し恥ずかしくなった。

しかし笹野は分かるがどうして前田が。何だか嫌な予感がするなあと思いながら田口はカレーを口に運ぶ。その前田は由紀絵からの質問攻めに少々戸惑っているようだ。どこのパート、家は近所なの、部活はどうなの、彼氏はいないの。由紀絵には学生に対して遠慮というものがない。
「二人とも相手がいないんだから付き合っちゃえばいいじゃない」
と言い出したときはさすがに笹野と前田もむせた。
「あのねえ由紀絵さん、僕もうすぐ高校生じゃなくなるんですよ。女子高生と付き合うのはちょっとマズイですよ」
「いいじゃない別に本人同士が良ければ」
「良くないですよ、ってああ別に前田が女としてどうとかそういうアレじゃないからな」
「分かってます」
といいつつも前田の顔は若干引きつっている。
そんな会話を続けているうちにいつしか皆カレーを食べ終わり、食後のコーヒーと相成った。どこにいたって聞こえちゃうから私も同席するわね、といって洗い物をササッと終えた由紀絵もそのままテーブルに座った。
「じゃあまず要点から聞こうか」
田口に促されると、笹野は前田を見た。まだ無理かな。そう思い笹野は自分から話すことにした。
「先生があんな風にサッサと帰って…あ、要点からでしたね。そうそう、先生には定期演奏会の指揮を振ってもらいます」
「ちょちょちょ振ってもらいますって、だから俺はもうこれ以上振れないんだってマジ忙しいんだから」
「わかってます。だから定期演奏会の本番だけです」
「なんだあそりゃあ？いきなり本番だけ指揮したって上手くいかないだろう」
「それはどうでしょうか。本番までの指揮をするのはこの笹野滋ですよ」
「どの笹野滋だよ」
「先生の一番弟子の笹野ですよ」
「いやおまえ一番弟子って俺別に指揮の先生じゃないぞ」

「自称でもいいですよ。実際に先生から指揮と指導法を習ってるのは僕だけでしょう」
これには前田も驚いた。二年生の時から確かに笹野の音楽センスが他と違うのも分かっていたし、田口にことさら可愛がられているのも知っていた。だがまさか弟子入りしていたとは。
「まあだからおまえに任せたんだけど」
「僕も別に自分で本番振ってもいいんですけどね。現役生が納得しないみたいで。なあ？」
といって前田に話を振る。
「前田、あの後みんなで話し合ったりしたのか？」
問いかける田口に前田は首を横に振って答えた。
「まだ皆には話をしてません。でも多分…皆も同じ気持ちだと思います…私は…先生と一緒に吹奏楽部を…引退したいです」
ほんの短い言葉だが途中から前田は泣き出してしまい、あらあら、といって由紀絵がティッシュを渡してやった。
「まああの後からずっとこの調子だったもんですから、連れて来てみたわけです」
「参ったなあ、泣くなよ」
「やっぱり先生を動かすには可愛がってた生徒の涙しかないかと」
「笹野、おまえ本当に嫌あなヤツだな」
「言われ慣れてますよ」
「まあでも前田がそう思ってるだけじゃあ何ともならないだろ。明日皆で話し合って、それから決めてもいいんじゃないか」
「まあそうでしょうね。今日この場で承諾されてもこっちも驚きますよ」
「ということでいいか、前田」
「はい！」と目を真っ赤に腫らした前田が満面の笑みで返す。
ああ参ったなあ、と呟きながらコーヒーをすする夫を、由紀絵が満足そうに横目で見ている。
一呼吸置いてから、先生あともう一つお願いがありまして、と笹野が続ける。
「今度は何だよ」
「いくら下振りと言っても定期演奏会全曲はやっぱりキツイなあと思いまして。上手く先生にバトンをつなぐと言う意味でも」
「おいまだ俺が振るって決まったわけじゃあないだろ」
「決まったようなものじゃないですか。で、キツイので二部のポップスの指揮者を他のOBに任せようと思うんですが」
「誰に」
「滝本先輩です」

「有理！おいおい大丈夫なのかよあいつ生徒に手出したりしないだろうな」
「この間から的場さんとお付き合いされてるようなので大丈夫だと思いますよ」
「大丈夫っておまえ、それは手遅れって言うんだよ、ああ有理、あの馬鹿」
「でも吹奏楽のポップスの難しさは先生も知ってるでしょう。むしろ苦手でしょう」
「苦手だなあ」
「僕もです。でも滝本先輩は僕らと正反対で、ポップスやるために生まれてきたような男ですから」
「それはあいつが上手いだけじゃないのか」
「それがね、違うんですよ。あの人のバンドのリハ、一度見に行ったことがあるんですけど」
「おまえら犬猿の仲だったんじゃないのか」
「それはそれです。で、全部あの人がバンド仕切るんですけど、あの人がホーンセクションに指示出すと凄い音が出るようになるんですよ。あれはマジックでしたよ」
「なんか眉唾だなあ。でもまあおまえがそう言うなら、いいんじゃねえの」
一度に色々な事が起きたせいか、だんだんと面倒になってきている田口であった。
「ではそういうことで」
「ちょっと待て。定期演奏会の本番、俺が振るのはどの曲だ？いや仮に振るとしたらだよ」
「一部と三部ですね」
「は？おまえどこ振るんだよ」
「僕は本番は振らないです。先生とけやき坂のラストステージを舞台袖からしっかりと見届けますよ」
「おまえ、ずっこいぞ！」
「定期演奏会には他の学校の生徒さんもいらっしゃるでしょう。瀬野川とかね。だから来年の隠し玉は取っておかなきゃあ」
ん？隠し玉ってなんのことだ？明日のミーティングのことに集中していて二人の会話は右から左だった前田だが、思わず反応した。
「すみません、先輩、隠し玉って何のことですか？」
俺のこと、と言いながら笹野は自分の顔を指差した。
「はああ？」前田が口を大きく開けて間の抜けた声を出す。
「先輩が来年から指揮するってことですかあ？次の顧問の先生とかいるんじゃないんですかあ？ホワイ？ホワイなぜに？」

ここで笹野の家庭環境について述べる必要がある。笹野は現在高校三年生である。そして今は二月。で、この有様である。何が起こっているのかというと、噂どおり笹野は音楽

大学への進学を考えている。希望のコースは指揮科だ。初めはサックスで入学して、途中からの転科を目論んでいる。だがしかし笹野には音楽大学を受験するのに決定的な欠点があった。ピアノが弾けないのである。そんなわけで笹野は、吹奏楽部を引退した今年度の初めからピアノを習うようになった。

両親は共働き。父親は大手半導体メーカーの営業部長、母親は若くして大手アパレルチェーンの都内大型店舗の店長を務める。なかなかに裕福な家庭であった。

両親は音楽を一切やってこなかった。現在就職活動中の大学生である滋の兄も同様である。それだけに、音楽の才能を閃かせた息子・滋には家族中が何かを期待している。その何かが何かは当人達にも分かっていないのだが。父親の口癖は「早く小澤征爾みたいになれ」である。小澤征爾以外の指揮者を知らないからだ。

そんなわけで笹野が就職活動も受験勉強もせずにプラプラと音楽バカをやっていても、家族は特に何も言わないのである。

そしてピアノと平行して指揮の経験も積んでおきたい笹野にとって好都合な出来事が起きた。まず、田口が転任となる。そして来年度けやき坂高校に赴任してくる教諭の中に、なんと笹野の叔父がいたのである。笹野は叔父に、なんとしても吹奏楽部の顧問になるように、そして指導は自分にさせるように、と頼んでいた。叔父も両親と同じようなもので笹野の指揮者への夢を後押ししていたので、無論、と快諾をした。とまあ根回しは万全な状態で、今、笹野は田口の家でカレーなんぞ食していたのである。

「まあ、そんなところでさ」と笹野が前田に答える。

「来年は俺の叔父さんが顧問だけど実質教えるのは俺ってこと」

「はあ…」あまりの展開にとっさに言葉が出てこない前田だったが、はっと気づき田口を睨んだ。

「先生は、知ってたんですか…」

「ん、まあ、それは、あれだな、そうなるかなあ～？」

「ああもう大人嫌い。マジ嫌い」

「まあそう言うなよ。笹野以上の適任はなかなか見つからないぞ？」

「まあうちらは引退するから別にいいんですけど」

「そうだろう、とりあえずは明日、話しあって来い。それからだ、全部」

はい、と前田が答え、笹野はこの状況を大変楽しんでいるようでニヤニヤとしている。

「じゃあさあ、おまえらそろそろ帰れよ」

「今日は珍しく追い返しますね」

今日は結婚記念日なのよ、と由紀絵が恨めしそうに笹野に棘を刺した。ああそれでは、といって笹野はそそくさと帰り支度をし、前田を伴って田口家を後にした。

「あああ、なんてこったあ」
「いいじゃない、なんか楽しそうで」
「本番だけっつってもさ、瀬野川が許すか？」
「そこを許してもらえるようにするのがあなたの最後の大仕事でしょうに」
「わあめんどくさいなあ」
「いいからいいから。ほらケーキ食べようよ」
そういって由紀絵が冷蔵庫からケーキとワインを取り出し、二人はようやく結婚記念日を祝うことが出来たのであった。
時を同じくしてピンク色の傘が一人瀬野駅へ向かっていることや水色の傘と紺色の傘を差した男女が近所のカフェに消えたことなど、二人には知る由もなかった。

第十七回定期演奏会（下）

そして翌日。田口がいないと知りながらも、だからといって練習に来ないわけにもいかない部員達がいつものように音楽室に顔を出した。笹野滋も来ている。そしていつものように出欠確認が行われる。その後、前田智子から今後の方針についてミーティングを行う旨が言い渡され、練習よりも先にこれから定期演奏会に向けての方針を決めることとなった。
とはいうものの基本的なことはすべて昨夜に笹野と前田が田口と話を付けている。要は、田口が本番だけ指揮をするのを良しとするかどうかの確認だけだったのであるが、これについて異論は出なかった。二年生にとっては嬉しいことであったし、一年生にとっては半ばどうでもよいことであったからだ。
二部の指揮を滝本有理が担当する、という箇所については少々不安の声が上がったが、笹野が太鼓判を押したものだから皆しぶしぶ従ったという感じだ。
こうしてあっさりと、定期演奏会に向けての体制が整った。ただし笹野が来年も指揮を続けるという隠し玉は、ここでも隠されたままであった。前田としても一年生にこれ以上の不安を与えたくないということもあり、黙っていることにした。
その日のうちに、前田は社会科準備室の田口を訪れ、部員の決定を伝えた。昨夜にはもう覚悟を決めていた田口は、何とかする、と言ってこれを承諾した。
残る問題は滝本有理だけだったが、これも笹野の説得に結局は応じ、二部の指揮を正式に務めることとなった。笹野と滝本、この二人の指導は曲調の違いもあってか正反対のものになったが、生徒に合奏を飽きさせないという意味でこれが結構な功を奏すこととなる。

翌日から、笹野と滝本による合奏が始まった。滝本の合奏は週三回で、一日の合奏時間のうち半分が彼の合奏に当てられることになった。残りはすべて笹野の合奏である。

笹野の合奏は、表向きの性格同様、なかなかにドライであったが、裏の顔がその神経質さに現れる。彼には田口も認める音楽センスがあったが、細かい音まで聴き分けるデビル・イヤーがけやき坂高校の技術的な拙さにいちいち反応してしまうのだ。

「金管全体的にさあ、ちょっと音の粒が荒いんだよね。唇の振動をもっと細かく。そのためにはもっと息を入れて…口の形を崩すなよ」

「クラリネットとサックスさあ、みんな指が固すぎるよね。持ち方変えないと早いパッセージ、音がバラバラだから。あと音が広がりすぎだからもっと口の端を中心に寄せるように締めて、口の中も狭く…そうそう、であとは息をもっとしっかり入れて…そうだね、そういう音の方がまだマシだね」

「ホルンは日ごろからもっと音程正確に取る練習をしないと駄目だね。そこちょっと音程合わせてみようか、せーの…いや、だから、音程合わせろって。二度と言わせるな」

とまあそんな調子で曲の合奏というよりは初心者のための楽器講座のような合奏になってしまうのであった。

反対に滝本はというと、技術的なことは一切指摘しない。

「オーケー、そこオープニングだからもーっとドカーンと行こうか、ドカーンとさあ」

「あのさあ、これバラードなわけじゃんよ。もっとこうさ、ロマンチックに美しく、涙ブワーッって感じに来ない？来ないここ？駄目それ。おまえファック」

「だから上条おまえさ、色気ねえんだよ色気。チャーリー・パーカー？バカ野郎渋すぎなんだよ、この曲ラテンだぞラテン。南米の男の褐色の色気出せよ」

とまあこんな調子でこちらは勢い重視のところがあったが、都内でもトップクラスの下手揃いのバンドであるから、滝本の合奏のほうが逆にわかりやすいというのが何とも悲しいところである。そう考えると、やはり指揮者志望とはいえ笹野はまだ夢に程遠い力量しか持ち合わせていない。ただ音楽的な部分に関しては本番の田口にバトンを託すという流れからすれば、技術的な問題をひとつずつ解決していくのはそれなりに理にかなった指導でもあった。

「あーマジ笹野さんの合奏きちぃー」

学校備え付けの自販機で買ったミニッツメイドを一気に飲み干し、中本が夜空に向かって吼える。練習後の帰り道、中本と山上の二人組である。自転車を並べて軽快に走る。

「いやでもあの人、凄いぜ。どんな耳してんだろうかっていう」

山上は最近、笹野の凄さに驚くばかりで、技術的に拙いところを容赦なく突いてくる彼の合奏も嫌いではなかった。

「スゲエのはわかんだけどさ、きちいよ。ま逆に滝本んときは好き放題吼えまくってるけ

どな」
「あの人の時は勢い出るな。あの人自身が楽しんじゃってるから引っ張られる」
「上条もポップスんときは音カッコよくなってきたよな」
「ポップスのときだけな」
「笹野さんの合奏んときアイツ音うるさくて怒られてるもんな。マジウケるわ」
「そりゃショスタコをファンクで吹いたら怒られるだろ。まだチャーリー・パーカーのほうがマシだわ」
「ショスタコつったらさ、平井のティンパニ今日めっちゃ良くなったな」
「笹野さんマレット選びとスナップの指導で三十分使ってたしな。あれだけ細かく個人レッスンみたいにされたらそりゃよくなるわ」
「もしかして俺たち先輩そろそろ抜くんじゃね？」
「おまえの耳どうなってんだよ。まだまだ遠いよ」
「いやでも伊野とかさ、正直広田先輩よりいいんじゃねえの？」
「あそこはどっこいどっこいじゃねえかなあ」
「どっこいどっこいってことは来年の伊野のほうが今の広田先輩より上手えじゃねえか」
「いやあいつ来年までやる気持つかな」
「ああそれ怪しいべ」
「怪しいよな」
「怪しいっったらおまえあれ聞いたか、伊野この前緒川先輩とデートしてたっていう」
「ああ聞いた、っていうか伊野が自分で言ってた」
「上条には言ったのかな」
「言ったらしいよ。でも伊野は緒川先輩のこと何とも思ってないみたいだからお咎めなし」
「なんだよそれ。もったいねえな」
「あいつは阿呆だ」
「マジで阿呆だな。あいつ前にも俺は誰でもいいとか言ってたくせにな」
「でもさすがに上条が緒川先輩に惚れてんのは知ってるから手出しにくいよ」
「やっぱあれかな、あいつは素子先輩かな」
「なにっ」
「この間ちらっと言ってたじゃねえか」
「それは駄目」
「なんでだよ」
「俺がもらう」
「なんだおまえら二人してドMかよ」
「あのキツさがたまんねえんだよ」

「この変態が」
「ロリコンのおまえには言われたくないな」
こうして二年生の引退が近づく中ひっそりと各自の恋愛模様も色々とあったのだが、そんなことはさておいて時間は流れていった。

結局田口は本当に一度も音楽室に姿を現すことなく、指揮も振らなかった。卒業式のＢＧＭ演奏の指揮は、笹野が卒業生の列に並ばなければいけなかったため、的場が務めた。
そうしていよいよ四月六日、定期演奏会の当日となった。前日のうちにトラックに楽器を詰め込み、当日の朝、ホールへと運ぶ。運搬はコンクールと同じく、須崎修が務めた。
午前中はリハーサル。なんとか新任の瀬野川高校を説得した田口が駆けつけ、リハーサルの半分は田口の指揮する一部と三部に当てられた。滝本の指揮する二部のリハーサルは演奏よりも演出の確認に時間を割いた。
ただリハーサルといってもこれまで技術的な部分は笹野がキッチリとまとめあげている。後は田口の音楽的な好みに合わせて微調整を行うくらいだった。
リハーサルは一部・三部・二部の順番で、各部曲順通りに進められた。一曲目の「アップル・マーチ」の演奏を始めた瞬間、田口は少なからず驚いた。こんなにキッチリと音を出せるバンドだったっけ。だがしかし技術的な向上は見られるものの、音楽の色がない。笹野はあえて彼自身の音楽を消して田口への「つなぎ」に徹していた。笹野のやつ、憎いことをしやがるな、と思いながらも田口はどんどんと無色のキャンバスに色を載せていった。
客席後方から田口のリハーサルを見ていた笹野と滝本が小声で会話を交わす。
「さすがですね田口先生は」
「まあ笹野ちゃんが全く色付けてないからな。やりやすいだろうよ」
「そうはいってもリハ一発でここまで変わりませんよなかなか」
「ふうん」
「やっぱり二年生の先生への信頼感が強いですよね。必死で付いて行こうとしてるし、一年生はその二年生に付いて行こうとしてます。こう見ると、今年の一年・二年の組み合わせは意外と良かったんじゃあないでしょうかね」
「ハン」
「ちょっとヤキモチ妬かないでくださいよ、いい大人なんだから」
「でも俺の二部のほうが絶対楽しいから」
「楽しみ方は人それぞれですよ」
「ポップスのほうがお客さんも楽しいだろ普通に考えて」
「まあいいですけど、そこまで考えてるなら先輩暴走しないでくださいよ」
「ワッツ」

「舞台上だけが楽しんでるようなマスターベーション的なものはゴメンだってことですよ」
「ウヒョ、笹野の口からそんな淫乱な言葉が出てくるとは」
「淫乱ではありません、学術的です」
そんな話をしていると、舞台上の田口が二人の方を向いて叫んだ。
「おーい笹野、バランスどうだー」
笹野も大声で返す。
「そーですねえー、ホールが比較的古いせいもあって高音が埋もれがちなのでー、アップル・マーチは高音楽器はもう少しクリアに吹いた方がいいですねー」
「わかったー、リードはどうだー」
「リードのほうは今のままでもまあ新しくていいですかねー」
そこで滝本が口を挟む。
「リードはラテンなのでそれこそ高音のメロディーもっと出したいですけどー、後はパーカッションの歯切れが悪く聴こえますねー」
「わかったー、二人ともありがとー」
そういうと田口は生徒の方に向き直り、いくつか指示を出してからすぐに三部のリハーサルへと移っていった。
二人のアドバイスもあってか、三部一曲目の「アルヴァマー序曲」は音のバランスにも特に問題なく順調にリハーサルが進んでいく。そしてメインとなる「タコ5」である。音を出してからすぐに田口は演奏をとめた。何かまずいところあったかな、と笹野が不思議そうに見ていると、少々長めの指示を入れてから再び田口が指揮を始めた。冒頭のテンポが、さきほどと全く違う。笹野が設定していたテンポの一・五倍は遅い。
「おお、そう来たか」思わず笹野が呟く。
「ちょっとヘヴィすぎねえか」滝本も呟く。
「アルヴァマーの後ですからね。お客さんを一気にこの曲の世界に引き込むには効果的なテンポだと思いますよ」
「確かに思わず聴き入っちゃうぐらいに重いよ」
そしてその後の急速なテンポの変化。難曲であるがゆえの技術不足を芸術点で補うような、そんな音作りだ。これこそが田口の本当の姿である、と笹野は満足感を覚えた。と同時に寂しさも感じる。
（俺と先生が二人で組めば、こういうことが出来るのに）
今更ながら、田口の転任が悔やまれる。

三部とアンコールのリハーサルが終わり、一旦休憩となった。休憩後は滝本による二部のリハーサルが待っている。田口は客席にいた笹野と滝本に駆け寄ると、笹野の方をポン

と叩いた。
「笹野先生、お見事」
「何を言ってるんですか」
「よくここまであいつら上手くさせたな」
「僕が上手くさせたんじゃなくて彼らが上手くなったんですよ」
そう言ってお互いを讃えあう師弟愛にも気兼ねすることなく滝本が割って入る。
「さーて次はいよいよ俺の出番、先生見ててくださいよ。一部と三部なんて喰っちゃいますからね」
「へえ、それは楽しみだね。テンポ走るなよ」
「大丈夫っすよ、一応ミュージシャンなんで」
「アマチュアだけどな」
そんなやり取りの後に気合を入れてリハーサルに臨んだ滝本であったが、いかんせん照明の演出に時間を取られすぎてほとんど仕事が出来ない状態のままにリハーサルを終えることとなってしまった。
「まあぶっつけ本番のほうがテンション上がるから、これはこれでオーケー、オールライト、ノープロブレム」
とは本人の弁である。心臓に毛が生えているとはまさにこのことか。

昼休憩を挟んでしばらくすると、いよいよ開場である。控え室で最後まで個人練習をする生徒もいるが、ほとんどの生徒は舞台袖にある小さなモニターの前に集まっていた。そこにはホールに入場してくる客の姿が見える。
「おおっ結構続々と人が入ってくるじゃん」と広報の広田裕子が満足そうに言うと、
「ああやばい、緊張してきた」と渡辺素子はいつもの威厳はどこへやらで手が震えている。
部長の前田智子は何も言わず画面を見つめ、静かにトランペットに息を吹き込んでいる。楽器を冷やさないためだ。的場佐知子は控え室でまだ練習をしている。緒川小百合は広田の隣にいるが緊張のためか呼吸が荒い。
そこへ田口が姿を現した。
「今日は瀬野川の生徒もほぼ全員来るぞ」
「そういえば先生の転任先は瀬野川なんですってねえ」と恨めしそうに前田が返す。他の皆ももうすでに転任先は知っている。一斉に敵を見るような目で田口を睨み付ける。
「そ、そんな目で見るなよ。俺のお手並み拝見、ってヤツも多いだろうから俺だって緊張してるんだぞ」
「裏切り者…」と渡辺素子が茶化す。
「まいったな、前後敵に囲まれて指揮するのか今日は」

頭を指揮棒でポリポリと掻きながら、本当に困った様子の田口であった。

一年生はというと、舞台袖のカーテンを少し開けて客席をダイレクトに覗き込んでいる。最前で興奮しながらコソコソと会話しているのは村田と光田である。押すな押すな、といいながら上条、山上、中本がそれに続く。小野田や鈴木もその後ろから遠慮がちに見ているが、背の低い小野田には何も見えない。

小島はこの期に及んで「眠い」と言って野武士のようにサックスを抱え、後方に座り込んで目を閉じている。伊野や戸崎などの低音組も、ただ静かに時を待っていた。入場は下手から。最初に入場するのは舞台上手に位置するテューバの伊野、続いて広田である。あと十五分もすれば開演である。

急いで駅からホールへの道を走る二組の女子生徒の姿があった。一人は満面の笑みをたたえ、一人は面倒くさそうな顔をしながら。

「先輩、急がないと開演ヤバイですよ」

「ちょっと宮内さん、待って、速い」

笑いながら疾走し、道行く人々を驚かせているのは昨年度までけやき坂高校に在籍していた宮内篤子である。そして先輩と呼ばれた女子は、植田（うえだ）かすみ。瀬野川高校吹奏楽部トロンボーン・パートのパート・リーダーである。

宮内はあの手この手を駆使して田口の転任先をだいぶ早い段階で突き止め、この四月からは瀬野川高校の生徒になっていた。始業式は三日後だが、宮内はその前にすでに吹奏楽部を訪れ、そのメンバーの一員となっていたのである。

息を切らせながらホールにつくと、開演十分前になっていた。急いで階段を登り二階の客席に入り、手ごろな座席を探す。毎年客数も少ないけやき坂高校であったが、田口がけやき坂を振るのが最後ということもあったのか、教員関係者やけやき坂高校の生徒など、これまでとは異なる客層も来ており客席は例年にない埋まり具合を見せていた。しかしほとんどの客が一階前方の列に座っているので、宮内と植田は最も良く音が聴こえやすい二階中央の席に座ることが出来た。そしてまたその場所のおかげで、けやき坂高校の部員からは宮内の姿を見つけることが出来なかった。

開演十分前。舞台袖ではすでに入場のための隊列が組まれつつあった。もうモニターを見ている生徒も、カーテンの隙間から客席を見ている部員もいない。野武士の小島も目を覚ました。

その隊列の一人一人に向かって、田口が「楽しもう」と声をかけている。奇しくもコンクールと同じような光景だが、あの時とは何もかもが違うことを全員が分かっていた。最後に田口が一番前に並ぶ伊野拓也に向かって「伊野、楽しめよ」と声をかけた。「うい

す」拓也の返事はいつも通りだ。

開演五分前、ホール内にブザーが鳴り響く。奏者入場の合図である。拓也も若干の緊張を覚えたが、客席を見渡せるくらいの心の余裕はあった。「よし、伊野いけ」隊列のそばに付いていた笹野に促され、ゆっくりと入場する。客席から拍手が起こる。右手に下げたテューバの重みをいつもよりも感じながら、拓也は客席を見渡した。コンクールには劣るが、客席は予想以上の入りだった。二階にも客が入っているようだったが、強烈な照明が舞台側に放たれて逆光になっているため、二階の客の顔までは見えなかった。

全員が入場し終わり着座すると、渡辺素子が立ち上がりB♭の音を吹く。その音で全員がチューニングをするのだ。チューニングが終わるとしばらく間が空く。奏者は全員座ったままだ。客席から咳払いやパンフレットを開く音が聴こえてくる。いやがおうにも緊張が高まってくる。何よりも舞台を照らす照明が熱い。やや肥えている山上などはすでにこめかみのあたりから汗が一筋流れている。

そして開演時刻の午後二時三十分きっかりに、指揮者用の燕尾を着た田口が入場し、客席から拍手が起こった。田口は今までスーツで指揮をしていたが、今日着ている燕尾は今回の定期演奏会に合わせてあつらえた奮発モノである。家計には少なからず打撃を与えたが、最後ぐらいは、と由紀絵が無理やり作らせたのである。

指揮者台の上に立った田口は大きく一つ深呼吸をすると、声に出さすに「楽しもう」と声をかけた。コンクールの時とは違う。今日は本当に最初から最後まで、何から何まで、このホールにいる全ての人々と楽しみたかった。こんなにワクワクする別れがあろうか？

一曲目の「アップル・マーチ」が始まった途端、宮内篤子は少なからず驚いた。あの短期間で、ここまでサウンドが向上するものなのか。もちろん元々が東京都でも最も下手な辺りに位置するバンドである。向上したといっても七尾高校のようになったわけではなく、せいぜい瀬野川高校を超えるくらいのレベルである。ただそれにしても、ここまでの伸びを見せるバンドを、この近隣では他に聴いたことがなかった。個々の音は決して綺麗とは言えないし、譜面どおりに吹けていない箇所もある。しかし要所要所ではキッチリと決めてくる。けやき坂高校に何が起こったのだろうか。部を辞めてからというもの接触を絶っていた宮内には、不思議で仕方がなかった。

一部が終わったあとに休憩が入った。植田と一緒にロビーに出ていた宮内に声をかけてくる者がいた。名前はもう忘れてしまったが、けやき坂の吹奏楽部に入部したときに一度あったことのあるトロンボーンの三年生だった。宮内は彼女から最近のけやき坂高校吹奏楽部の事情を詳しく聴くことが出来た。

「笹野滋…」

来年からのけやき坂高校が、瀬野川にとって強力なライバルとなる。笹野という男の話を聞いた時、宮内はそんな予感がした。

舞台袖では早くも汗だくの田口がタオルで顔を拭き、水をガブガブと飲んでいた。横でストレッチなんぞをしているのは二部の指揮者、滝本である。舞台袖で思い思いに休憩している生徒に向かって、ストレッチをしながら声をかける。

「おっしオマエら、二部はブチかますぞ、ファンキーに行こうぜ！」

生徒が元気良くオー、と答える。滝本には生徒の士気を上げる素質が備わっているようだ。

間もなく二部開演、を知らせるブザーが鳴り、宮内と植田は急いで客席へ戻った。宮内がホールに入りパンフレットを見て一番驚いたのはこの二部だ。宝島。宮内もこの曲は知っている。原曲のＴ‐ＳＱＵＡＲＥのＣＤも聴いた。しかしあのサックス・ソロを吹けるような人材がけやき坂にいたとは思えない。多分西堀あたりが吹くのであろうが、あまり期待は出来ない。

そして二部。生徒に続いて、ギンギラギンのスパンコールの入ったジャケットとベルボトムのパンツ（こんなスーツどこで売っているんだというような）を身にまとった滝本が入場したときには客席もざわついた。

そして始まった「ハリウッド万歳」。

「凄い」思わず宮内篤子は呟いた。なんてパンチのあるサウンドだろう。一部とはまるで違うバンドサウンドがそこにはあった。こんなにシャープに吹けるバンドだったっけ？宮内は本来ポップスにはあまり興味がないが、それでも思わず身を乗り出してしまっていた。そしてあのギンギラの指揮者。ありゃ何者だ。

そのギンギラの男は、田口の事前の忠告も虚しく、暴走列車と化していた。速い。異常にテンポが速い。そのせいで冒頭は少し音がバラけてしまった。しかし慣れてくるとこの速いテンポが心地よい。部員たちは各々必死でテンポに喰らいついていく。おのずと気合が入る。気分が高揚する。決して綺麗にまとまってはいないが、勢いだけは凄まじい演奏になった。

そして続く「ホール・ニュー・ワールド」。今度は遅い。異常に遅い。滝本は恍惚の表情を浮かべ、もはや自分の世界に陶酔しきっている。

（そんなに遅く振られたら、俺、もう…死ぬ…）

ホルンの中本が酸欠寸前であった。山上に至っては無理を悟って休み休み吹いている。だがしかし全体としては濃厚なロマンチシズムが表現された、滝本ワールド全開の演奏とな

っていた。
最後の「宝島」ではまたもや速かった。異常に速かった。上条が拓也に目配せする。
「もっと遅くしてくれ！」しかし指揮者のテンポが速いのでは遅くしようにも限界がある。そのままのテンポで曲は進んでいく。そして上条が立ち上がり、滝本の横あたりに置かれたマイクの元へと向かった。

（えっ上条が吹くの？）
宮内篤子はこの二部、驚きっぱなしだ。何もかもが想定の範囲を超えている。上条は確かにこれまで色々なソロを任されてきた。しかし今回ばかりは無謀なのでは。そんな風にやきもきしていると、遂にソロ・パートがやってきた。そして上条のソロは、宮内の想像をまたもやはるかに超えてきた。

（やばい、本気でやばい、死ぬ、死ぬ、いや待てどうせ死ぬならいっそ、ていうか小百合先輩聴いてくれ！）
一瞬の逡巡の後、上条は思いっきり息を吸い込んだ。
（ファンクだ！）
そう念じた瞬間、上条の時間は止まった。正確に譜面どおり吹けたわけではなかった。何が正確かもわからず、ただただファンクを追求した結果である。しかしその音は、けやき坂高校史上、滝本有理しか到達しえなかった音とほぼ同等であった。フラジオこそ出なかったものの、あまりに「けやき坂の生徒とは思えない」ファンキーなソロに、場内は大きな拍手に包まれた。そして最後の一音を吹き上げ、上条の時間は元に戻った。彼は大きな拍手が自分に贈られているものだと気づくのに一瞬時間が必要だった。頭がボーッとしている。しかしすぐに事態を把握し、指揮を続けている滝本を見た。彼はウィンクで上条の健闘を讃えた。気が付くと上条は、ストラップから外したサックスを右手に持ち、頭上高く掲げて拍手に応えていた。その後もテンションを最高潮に保ちつつ宝島の演奏が終わった。改めて滝本が上条を立たせると、会場からは割れんばかりの拍手が贈られた。
二部が終わりまた休憩が入る。舞台袖に引っ込むと、すぐに滝本が上条に抱きついてきた。
「ユー、パーッフェクト！」
「うわあ滝本先輩汗だくじゃないっすか、きめえッ」
その後も多くの部員が上条の元に駆け寄り賛辞を送った。そして緒川小百合も。
「上条君、すっごいカッコ良かったよ」
「マジっすか！いやあ先輩のおかげッス！先輩のために吹いたッス！」
こんな時でも恋を忘れない男であった。

再び休憩を挟んでの第三部。一曲目の「アルヴァマー序曲」は軽快な吹奏楽サウンド、そして漂うような甘美なメロディの作品で、さきほどの二部で盛り上がった聴衆をまた違った世界に呼び戻すのに一役買った。田口からの「皆さん、落ち着きましょうか」といったメッセージにも聴こえる。

そして滝本が「ヘヴィすぎる」と評した「タコ5」である。遠く彼方から急速に接近してくるような管楽器に導かれ、平井のティンパニが力強く、そして重く打ち鳴らされる。

（お、重い）

宮内も笹野や滝本と同じく重さを感じた。こんなに圧倒的な重いテンポ設定は聴いたことがない。しかしまた、これこそ田口の音楽だ、と彼女の心は張り裂けんばかりに歓喜した。その作品の底辺に連綿と流れる特徴を掴み、それを表出させる。決して派手に吹かせたり大げさなサウンドにもしないが、その作品の本質的な部分に限りなく近づこうとするアプローチだ。ソビエトの重く暗い空、凍てつくような寒さ、その中に見える希望の灯火、それらが確かな色彩を放って一連のグラデーションのように音楽が進んでいく。どれも見たことも経験したことはない情景だが、それを疑似体験させてくれるのが宮内の好きな田口の音楽だった。ただ、その音楽に生徒が付いていけているかというとそれはまた別問題だ。

驚異的に上手くなったとは言っても所詮けやき坂高校である。曲が終わっても拍手は起こるが「ブラボー」が出ることはなかった。しかし客席の宮内は満足だった。これからあの指揮者と一緒に音楽を楽しむことが出来るのだから。これからの一年に期待を馳せ、田口や他の生徒に見つからないよう、アンコールが終わるとすぐに宮内は会場を後にした。

エピローグ

終演後のロビーではお客様の「お見送り」が行われる。部員が全員ロビーに出て、演奏会を聴きに来ていたクラスの友人や親族などと会話を交わしたりするのだ。その後は吹奏楽部全員での写真撮影だ。田口、笹野、滝本が最前列の中央に立ち、他の部員はまばらに並ぶ。田口がけやき坂高校吹奏楽部の写真に納まるのはこれが最後であろう。だがその顔はどこまでも晴れやかだ。

写真撮影が終わると、舞台撤収である。ホールのスタッフと一緒になって部隊を片付け、また自分達の楽器をトラックに積んでいく。感慨に浸っている余裕はない。ホールの利用申請をしているのは午後五時までで、タイムリミットはあと十五分。次々と楽器をバケツリレー方式で受け渡し、楽器の積み込みがすべて終わると次は急いで私物を楽屋から撤去していく。すべての撤収を終えて全員がホールの外に出たのは午後五時を一分ほど過ぎた頃だった。

今日は駐車場を使えるように学校側に申請をしてある。楽器を積んだトラックをひとまず学校に置かせてもらう為だ。「よろしくおねがいします」と声を揃えて見送る部員に、ドライバーの須崎は「じゃあまた後で」と言い残し、けやき坂高校に向けてトラックを走らせた。

けやき坂高校吹奏楽部の定期演奏会はこれで終わったわけではない。この後、ホール最寄の駅で行われる「打ち上げ」をもってようやく全てが終わるのである。打ち上げを仕切るのは、打ち上げ係の緒川小百合と伊野拓也。要は、呑み会の幹事である。もちろん高校生なのでアルコールは御法度。ホールからてくてくと歩いて打ち上げ会場となる居酒屋に着いた。二階がすべてぶち抜きの座敷になっていて、今夜は（といっても五時半から七時半までだが）けやき坂高校吹奏楽部の貸切である。ちなみに一階にある小さな座敷は、けやき坂高校吹奏楽部ＯＢ会が占拠していて、こちらはアルコール有りの時間無制限であった。

演奏に、そして舞台や楽器の撤収に、数少ない男子として獅子奮迅の活躍を余儀なくされた一年生男子は、疲労困憊で座敷の隅に隠れるようにしてへたり込んだ。

「マジどうでもいいから帰らせろって」

中本が愚痴ると、

「つかもう眠い」

と山上が応じる。

拓也は早くも打ち上げ係の仕事に参加しなければいけないので、俺行ってくるわ、と言い残しすぐにその場を離れた。そして上条は今日こそ言うぞ、と緒川小百合のこと以外は何も考えていなかった。

「と、言うことで、カンパーイ」

それぞれ別のことを考えていたり放心状態であったため聞き逃していたが、気づけば目の前にオレンジジュースが置かれ、遠くの席で緒川が乾杯の音頭を取っていた。

「はいはい」「乾杯」と言いながら中本と山上の二人は一気にオレンジジュースを飲み干した。上条はことさら緒川小百合に聞こえるような大声で「かんぱーい」と叫んで、むせた。

「いやあ先生お疲れ様でしたね」そう言いながら笹野が田口のグラスにコーラを注ぐ。

「おまえもお疲れ。本当に良くやったよ。でもビール飲みたいな」

「ビールはＯＢ会の方に行くまで我慢ですよ」

「まあそうだな。あれ、滝本は？」

「ビールが呑みたいといってＯＢ会のほうに顔出してますよ」

「なんだよあいつずりいな。ああビールが、ビールが」

「あと二時間ですから」
「長いっ」
そうはいっても女子高生の二時間などあっという間で、なんやかんや部員それぞれと話そうと思うと二時間でも足りないくらいなのである。
喧騒の中で各部員の飲み物や食事の減り具合などを見ながら幹事として走り回っていた緒川と拓也であったが、さすがに二時間そればかりでは少々辛い。交代で幹事をすることにした。
「じゃあごめんね伊野君、先に休憩してくるから」
「あい、いってらっしゃいませーい」
開始一時間、拓也は居酒屋の店員のようなテンションになっていた。半ばヤケクソである。そしてそのやり取りを目ざとく見つけた上条英雄は、早くも涙を流しながら語り合う部員あり、また豪快に笑い転げながら語り合う部員あり、真面目に語り合う師弟あり、そしてなぜか宙を飛び交う箸やおしぼりあり、といったカオスの中を出口めがけて駆けていった。緒川が一人になるこの時間こそ好機である。好機を逃すは男にあらず。男上条、いざ勝負の時なり。しかし店を出ようとしたその時、一階のＯＢ会に潜りこんでいた滝本に捕まったりして、結局なかなか店を出ることが出来ないのであった。

店の外に出ると、緒川はうーん、と伸びをした。この店は駅から少し離れたところにあり、ネオンなどの邪魔が入らない。上を見上げると、済んだ夜空が広がっていた。綺麗な月、としばらく月に見惚れてしまう。今日で吹奏楽部員でいられるのも最後である。まあ十分にやりきった感じもあるが、少しやり残してしまった感もある。しばらく考え事をしていると、
「先輩！」
と後ろから声がした。振り向くと、何をされたのかわからないが制服もはだけ髪もボサボサになった上条がいた。彼がこれから何を言わんとしているのか緒川には分かっていた。そりゃああれだけ熱視線を一年間送られ、部内でも噂が流れていれば緒川の耳にも入るというものである。そして、どう答えるべきかも緒川の中では決まっていた。

二階の座敷では、後輩が先輩のところにジュースをついでまわったりしているが、相変わらず中本と山上は隅っこで壁にもたれかかって、時折二人にしか聞こえない悪態をついたりしながら過ごしてた。
すると、急に目の前に誰かが座った。あまりの勢いに「うおっ」と中本が仰け反る。見ると、渡辺素子であった。
「あんたたち、パートの先輩のところぐらい行きなさいよ。まとりあえずお疲れ」
「お疲れさーんす」といって中本は胡坐のままでグラスを合わせた。山上はといえば、い

つのまにか正座になっている。
「お疲れ様でした」とこちらはうやうやしくグラスを合わせた。
「さすがに疲れたみたいねえ。そりゃ入館のときも退館のときもあれだけ働いてもらったからね」
「いやー、マジ疲れましたね」
「いや全然、疲れてないです」
お。なんだ山上、さっきと言ってることが違うではないか。さては。面白いことになりそうだ、と思い、それ以降中本は黙った。
「えー山上君疲れてないとかってウソでしょ、さっきまでここで死体みたいになってたじゃん」
「あれはですね、一時的な休憩っていうか体力回復っていうか、だからもう大丈夫です」
「ふーん。で、体力が回復したらどうするの？もうこんな状態だよ」
そう言って渡辺が指し示した座敷一帯は、先ほど上条が目にしたのと同じカオス状態である。
「ここに今から入っていくのは結構きついよねえ」
「あ、はは、まあそうですね」
「だからさあ、アタシもなんかめんどくさくなってここの空気に吸い寄せられた、と」
「そうでしたか」
「でも体力回復した若い男子を引き止めとくのも悪いから、山上君どうぞお好きなところへ」
「あっ、いやでもやっぱりここしか居場所がないっていうか」
「あんた来年部長でしょ？そんなことでいいわけ？不安だなあ」
「いやそれはまあ僕も不安ですけど。っていうか、先輩」
「ん」
「あの、その、お、俺と、つ、付き合ってください」
「はあああああ？」
「うおおおおお！」
渡辺と中本が同時に声を上げる。一瞬座敷が静まり返って全員の目が注がれたが、
「あ、すいません、なんでもないッス、すんませーん」と中本が明るく言うと「なんだなんでもないのか」というような感じで再び座敷は元の喧騒に包まれた。
一段声を落として渡辺が抗議する。
「山上君…あんた、こんなところで、いきなり、何の前フリもなしに、なんてスケールが大きくて大胆でかっこいい男なの……なんて思うわけないだろバカッ」
「ええ⁉　」
「あのなあ、こんなところでそんなこと言い出すバカどこにいるんだよッああ恥ずかし

い」
「いやでも俺マジなんですけど」
「知らないよアンタがマジかどうかなんて。だいたい次期部長が何やってんだよ恋愛禁止でしょう普通」
「ええー！」
「いや知らないけどさ。とにかくアタシはこれから受験勉強に向けて、それはもう猛然と勉学に励むガリ勉少女にならないとちょっとヤバイ状態だったりするし、あとこれはアンタが悪いわけじゃないけど年下には興味がないし、あとこれはアンタが悪いんだけどアタシの好みは細身なわけ。でも今後の参考までに聞かせてもらおうか。アタシのどこがいいわけ？」
「いやその前に僕デブじゃないですから」
「デブじゃないけど細くはないでしょ。アンタの学年でいうと上条とか伊野とか？あれくらい細くないとダメなのよ。で、どこがいいわけ？」
「はあ…まずは、顔です」
「いいねえ」
「あとそのキツイ性格」
「あ？」
「なのにあの音色」
「え？」
「表向き凄いキツイ性格に思えるんですけど楽器って性格出るじゃないですか。先輩の音めちゃくちゃ優しいですよね。そのギャップみたいなところがいいです」
「ああ…そう…」これにはちょっと渡辺も驚いた。以外と周りの音聴いてるのねコイツは。やっぱ部長としても上手くやっていけるかもしれない。でもそれとこれとは別。
「わかった、ありがとう。でもさっきも言ったけどアタシは来年ガリ勉少女になって、ケーオーとかアオガクとかそういうセンスのいいところに入って、センスのいい細身の男を捕まえる予定なわけ。だから山上君とは付き合えないのです」
「ええええ」
「ええええって言われても。これ以上話してると周りに気づかれそうだからもう行くね。とにかく今回はごめんなさいってことで。でも嬉しかったよ。まあアンタが将来もっといい男になって、その時アタシが独り身で、まだアンタがアタシのこと好きだったらまたアタックしてきてもいいよ。まあ、ないだろうけど。てことで中本、あとはフォローよろしく」
そういうと渡辺素子は賑わっているクラリネット・パートの輪の中にスーッと消えてしまった。
「終わったし」そういってふてくされ、正座を崩して再び胡坐に戻って壁に寄りかかる山

上を見て、中本は我慢の限界を迎えた。
「んぐっ、ぶわっはははははは」
「てめえ、何笑ってんだよ」
「だっておめえ、おかしいじゃんよ、すべてがもう、おかしいじゃんよ、狂ってるってマジで、ぶわはははははは」
「てめえぶっ殺すぞ」
「いや待て待て、笑って悪かった、でも絶対このシチュエーションで切り出すとか、マジ狂ってるからオマエ」
「しょうがねえじゃんよ」
「ぶわっはははははは、僕デブじゃないです、だってぶわはははははは」
中本はもう山上の全てがツボに入ったらしく、ひたすら笑い転げている。
「あああああ、言うんじゃなかった」落ち込む山上の元に、生気を失った男がフラリとやってきた。
「おお上条」
「山上、淳、聞いてくれるか」
「そんな気分じゃねえよ」
「なんだなんだ上条も面白話を持ってきたか」
「つうかさあ…俺、緒川先輩に振られちまったよチクショー！」
「マジ…ぶわはははははは」
今度は山上も爆笑する。
「なんだよオマエもか！」
「つうかおまえら二人してどんだけヘタレなんだよ、ぶわっはー！」
「淳、てめえ笑うなよぶっ殺すぞ」
「おめえ山上と同じこと言ってんぞ、ぶわはははは」
「てか山上は何があったんだよ」
「渡辺先輩に振られた」
「ぬわっはははー！」
今度は中本と上条が爆笑する。釣られて山上自身までもが爆笑し始める。もう笑うしかない状況であった。そして散々笑い合ったあと、元気が戻った中本は各先輩の間を練り歩き、引退を惜しみながら最後の会話を交わしていった。その間、振られた二人はちびちびとコーラを酌み交わしていた。

休憩を終えて、緒川小百合が戻ってきた。
「伊野君、休憩終わったよ」
「あ、じゃあ交代ですね」

「どう、まだ忙しい？」
「いや、みんなもう腹いっぱいみたいで追加の注文はほとんど入らないですね」
「そう、じゃあちょっと話付き合わない？」
なにか嫌な予感がしながらも、「そうですね」といって拓也は従い、二人で店の外に出た。
「いやあ、綺麗な月ですね」
「そうなの。私には特に綺麗に見えるの、今日は」
「もう引退ですもんねえ。色々お世話になりました」
「いえいえ、こちらこそ。立派に裕子ちゃんの後を継げるテュービストになってくれたし」
「まあ、才能ですかね」
「こら」
「はは」
「いいね、こういうやり取り」
「まあ来年からは無くなるわけですからね。今日は寂しいですね」
「さっきね」
「はい」
「さっきね、上条君に告白されたの」
「ついに来ましたか」
「ふふ、ついに来た」
「ははは」
「笑うとこじゃないでしょう、ふふ」
「いや最後の最後でよくやったなあと思いまして。不肖の友人ですが、よろしくお願いしますよ」
「あ、いや、それがね…断ったんだ」
「ああ。そっちかあ」
「え？」
「いや元々確率は低いだろうと踏んでたんですが、今日の宝島、凄かったでしょう。あれで確率が半々になったかなと思ってたんで、どっちに転ぶかなって思ってたんですよ」
「伊野君、以外と嫌な計算するのね」
「まあ親友だけに、ってとこですかね。でも残念です」
「伊野君はさあ、好きな人に告白とかしないの」
「んー、好きな人いませんからねえ」
「上条君みたいなさあ、先輩好きです、みたいなのは」
「ないんですよ。誰でもいいっちゃあいいんですけど、いざ考えると誰でもいいってわけ

でもない。じゃあ誰ならいいか、って言われると該当者なし」
それを聞くと、緒川は少し寂しそうな顔をして、それは良くないねえ、と呟いた。
「あ、すみません先輩に向かって。失礼しました」
緒川は拓也の顔をじっと見ると、何かを諦めたようにもう一度呟いた。
「それは良くないねえ」
「……良くなかったかもしれませんねえ」
そこまでが、緒川の精一杯界だった。
「ごめん、もうちょっと休ませてもらっていいかな」
「ああそうですね、ちょっと気持ちが落ち着かないでしょうから。じゃあ、戻ります」
そういって拓也は店へと戻っていった。店の扉がぴしゃりと閉じられたのを確認すると、緒川はその場に座り込み、叶わなかった恋を思い、静かに、泣いた。

二時間に及んだカオスな打ち上げが、ようやく終わろうとしていた。まずはこれまで指導してきた笹野と、指揮の滝本と田口から一言。笹野からは来年以降も笹野が指導にあたる旨が発表され、一年生からは悲喜こもごものどよめきが起きた。滝本はすでに酔っ払っていて、何を言っているのか分からなかったが、最後の「サンキューベイベエ」だけはかろうじて部員にも聞き取ることが出来た。田口からは、改めて彼が瀬野川高校の教諭になったことと、これから良きライバルとして共に成長しよう、ということが語られた。田口も相当アルコールに飢えていたので、最後だというのにかなり短いスピーチであった。
そして最後に部長の前田がこの一年間を長々と振り返り、二年生および一年生女子は皆で涙し、ものはついでだと山上と上条も便乗して別の涙を流した。こうして打ち上げは終わり、田口、笹野、滝本はＯＢ会の座敷へ移り、部員たちは各々帰途についた。

山上、中本、上条、伊野の一年生男子四人は、他の部員が帰ったあとも店の近くで座り込んでいた。そこで改めて伊野には山上と上条の失恋が報告された。

「結局誰も彼女出来ずかあ」
「まったくヘタレてんなあ」
拓也と中本、無傷の二人がそう愚痴る。
「勝負してないやつに言われたくねえよ」
山上が応じる。
「ああ、緒川先輩」
上条はまだ悔やんでいる。
でもさあ、と空を見上げながら拓也が呟いた。
「俺ら、これがいいんじゃね？この感じが」

その言葉に、他の三人も無言で同意していた。恋に破れた者も、恋すらしていないものも、まだまだ先は長い。今はまだ、これでいいのだ。

「これからまた一年間だな。頼むぞ、部長」そういって中本が山上の肩を小突いた。
「おまえら、マジでちゃんと協力してくれよ」
「もちろん」上条が応える。
あっ、と何か大事なことを思い出したように拓也が三人の顔を見た。
どうした、と問う中本に向かって、拓也がイヤらしい笑みを浮かべる。
「今回二人の失恋で分かったんだけど、やっぱさ、女子って先輩が好きなんだよ、多分。てことはさ、今度入ってくる新入生の中でかわいい娘見つけたら、片っ端から吹奏楽部に入れる。で、先輩かっこいい、キャーってなる。もちろん彼女らは一年男子なんかには目もくれないから、男子が入っても俺たちにダメージはない、つまり」
「ハーレム…」上条の目に光が戻った。
「後輩選び放題…」中本の目に怪しい光が浮かんだ。
「ウヒョー！」
「イッヒヒヒヒ」
一気に彼らの妄想特急が走り始めた。
「うわはははは、春だ春だあああ」拓也も月に吼えた。
「くたばれ、ロリコンども」山上が吐き捨てるように呟いた。

涼しい夜風が、彼らの頬を撫でていく。

了